

SCHOOL OF ENVIRONMENTAL SCIENCE THE UNIVERSITY OF SHIGA PREFECTURE

滋賀県立大学 環境科学部

環境科学研究科 年報 第11号

特集 ■ 学生主体の教育活動のとりくみ



滋賀県立大学

滋賀県立大学 環境科学部 環境科学研究科 年報 第11号

特集 ■ 学生主体の教育活動のとりくみ

巻頭言 前進軌道へ

環境科学部長・環境科学研究科長

大田 啓一

平成5年の本学の開設に際して、環境科学部・環境科学研究科における教育と研究の基本姿勢として、3つの理念が掲げられた。それらを要約すると次のようになる。

1. 21世紀の環境問題に取り組む学際的な学術研究の推進と、創造性豊かな人材の育成
2. 琵琶湖とその周辺地域を対象とする環境教育研究と地域の政策形成過程への参画
3. 社会に開かれ、社会に支えられる大学づくりへの貢献

これらの理念は、開設から12年を経ようとしている今日においても一向に輝きを失っていない。それどころか、系統的で組織的な環境教育と研究への社会的要請は一層強まってきている。大学における環境教育・研究への志向はこの間格段に高まり、「環境」を冠した学部・大学院研究科が全国の国公立大学法人において陸続と誕生した。「環境」を冠した学科・専攻となると、その数は枚挙にいとまがない。

このような状況は、必然的に環境教育・研究の分野における大学間競争を激化させるものであり、大学の法人化と少子化傾向はそれに一段と拍車をかけるところとなっている。そのなかで本学部・研究科が確固たる地位を築き、これを維持するには、教育面においては、要所となる分野を充実し、それら要所を緊密につないだ体制をつくるのが肝要である。また研究面においては、個人プロジェクトにおいて創造的な研究を追及することに加えて、組織的なプロジェクト研究の中で成果を挙げていくことが必要である。

本学部においては、この一年間、環境計画学科の2専攻（環境社会計画専攻と環境・建築デザイン専攻）を二つの学科に改組する準備をしてきた。平成20年度からは学部には4つの学科が立つ予定であり、各学科の教育軸を明確にしながら、総合的な環境教育を実現するためのカリキュラムと教育実践が予定されている。大学院の教育として特筆すべきは、地域社会づくりに貢献するための「近江環人地域再生学座」が平成18年10月に発足したことである。ここでは科目等履修生と大学院生の教育が実施される。また大学院組織については、全学的な再編準備が開始されている。

研究面においては、個人プロジェクトあるいは比較的小規模での共同研究が進められてきた。その一方で本学部としては、他学部ならびに県内諸研究機関との連携による研究を推進すべく、組織的な大型研究プログラムをこの1年準備してきた。予算的な裏づけを得て本格的な立上げを来年度目指している。

以上のような状況下でこの年報11号が発行される。本年報は外部の読者に対しては、環境科学部・環境科学研究科の活性を判断する客観的なデータを提供することになる。学部内の教員にあっては、本年報によって現在のレベルを認識され、さらに意を新たにして次の前進へ向けての一里塚として役立てていただければ幸いである。

目 次

巻頭言 前進軌道へ	大田啓一	3
-----------	------	---

■特集：学生主体の教育活動のとりくみ

犬上川竹林プロジェクトの2年間	横川昌史	8
環境社会計画専攻らしさを活かした大学生生活 ～課外活動を通じて学び、成長したこと～	谷口 浩・肥田真梨子	12
「木楽部会ともくれん」	芹田周平	16
ちーむはっけい～社会資本としての集住体プロジェクト～	中尾達郎	19
「∞」を感じることができた卒業制作展	与語一哉	23
『DANWASHITSU』～小さな講演会が地域の大学を発信する～	DANWASHITSU運営委員会	25
琵琶湖の外来魚問題と子ども達の地曳網体験学習 －研究と環境教育の連携－	中尾博行・藤田建太郎	29

■私の環境学

景観生態学と適正な土地利用の実現	浜端悦治	34
つれづれなるままに、“私の環境学”	長谷川(石黒)直子	37
コミュニティ・ビジネス ～人と人のつながりを生み出す手法～	鶴飼 修	39
工業都市における公害問題と地域社会の対応	香川雄一	42
私の環境学	高柳英明	44
これまでの研究の概要と今後の展望	鈴木一実	46
低投入持続型農業のためのイネ育種	清水顕史	49

■学位論文の概要

イネおよびヨシの高親和性硝酸輸送システムに 関わる遺伝子の構造と発現	荒木良一	54
森林からの水質汚濁物質の流出と琵琶湖の 沈水植物群落の水質改善機能の評価	浜端悦治	56

■環境科学部・環境科学研究科－この1年

環境科学部			
環境生態学科の一年	学科長	倉茂好匡	60
環境計画学科環境社会計画専攻の一年	学科長/専攻主任	仁連孝昭	60
環境計画学科環境・建築デザイン専攻の一年	専攻主任	布野修司	61

生物資源管理学科の一年	学科長	川地 武	62
環境科学研究科			
環境動態学専攻の一年	専攻長	長谷川 博	63
環境計画学専攻の一年	専攻長	水原 渉	63

■教員の活動資料編

環境科学部・環境科学研究科人事等	66
環境生態学科	67
環境計画学科 環境社会計画専攻	74
環境計画学科 環境・建築デザイン専攻	82
生物資源管理学科	94

■卒業論文・制作／修士論文リスト

卒業論文 環境生態学科	108
卒業論文 環境計画学科環境社会計画専攻	108
卒業論文・制作 環境計画学科環境・建築デザイン専攻	109
卒業論文 生物資源管理学科	111
修士論文 環境動態学専攻	113
修士論文 環境計画学専攻	113

編集後記	115
------	-----

特 集

学生主体の 教育活動のとりくみ

犬上川竹林プロジェクトの2年間

横川 昌史
環境科学部環境生態学科3年

大学へ通学・通勤するのに多くの人が犬上川を通ってくると思います。犬上川の橋をわたるとき、犬上川沿いに自転車で走るとき、じっくりと川を観察したことはありますか。おそらくみなさんの地元の川とは違った特徴があると思います。犬上川には川に沿って帯状に広がる緑の回廊があるのに気づきませんか。これは河辺林と呼ばれるもので、川沿いに発達した林なのです。全国的には残り少ないタイプの林で、特に滋賀県では比較的多く残っています。

現在、犬上川の河辺林では大きな問題が起こっています。それは放置竹林の問題です。管理放棄された竹林では竹が増えすぎて、林が暗くなってしまいます。倒竹も増え、人が入れない状態になります。増えすぎた竹は他の植物の生育地に進出し、実生や草本類の生育環境を奪ってしまいます。現在の犬上川河辺林は倒竹がひどく、林の中を歩くのもままならない状態で、暗くなりすぎて姿を消しつつある植物もいます。また、道路まではり出した竹は冬季には落雪の恐れがあり危険ですし、風によって倒されれば交通に支障をきたします。人が入らないことで不法投棄されるゴミも目に付きます。このようなことは全国各地でも問題となっています。

こういった問題はなぜ起こったのでしょうか。昔、竹は建築用材・農業用材・生活用品として利用されていました。また、春には食用としてタケノコを採取していました。こうした竹林の利用によって、竹は適当な本数に抑えられ、また林の中も歩ける状態に維持されていました。しかし、プラスチックの登場や、生活様式の変化によって竹は必要のないものとなり、竹林を管理する人が減ってしまいました。

そこで、再び河辺林に人が入って竹を伐って利用

することで明るい林にしようという活動が犬上川竹林プロジェクトです。主な活動地は彦根市立病院裏の河辺林で、エコキャンパスプロジェクトの学生が中心となって、市民団体の「犬上川を豊かにする会」と一緒に活動しています。また、開出今自治会や開出今第三自治会、彦根市内の方に参加を呼びかけて地域住民の皆さんと共同で活動しています。竹を伐って明るい林をつくることで、植物の生育環境が改善されるとともに、河辺林が地域の方の散歩コースとなったり、竹材やタケノコを採れるようになったり、落雪防止に役立ったりと地域に役立つような効果も期待できます。

それでは、具体的な活動の紹介をしていきます。

竹伐り

メインになっている活動は竹伐りです。不定期ではありますが、みんなで竹を伐りに行っています。竹を伐るときはただ闇雲に竹をすべて伐るわけではありません。林の中では傘をさして歩ける程度を目安に伐っています。道路沿いでは道路に張り出している竹を中心に、道路への圧迫感がなくなるよう少し多めに伐っています。竹はなるべく根元で水平に伐ります。高い位置で伐ると作業の邪魔になりますし、斜めに伐ると切り口の先が尖ってしまい危険だからです。また、放置竹林では倒竹の量が多いため、倒竹の除去にも力を入れています。現在はノコギリで伐っていますが、今後はチェーンソーの導入も検討中です。

伐った竹を捨ててしまうのはもったいないので利用方法をいろいろ考えています。運びやすい長さに切られた竹は大学に運ばれ、いろいろなものにつく



道路から見た河辺林



暗くなった河辺林内部



竹の伐採

り変えられます。

竹炭づくり

竹の有効利用として炭焼きを行っています。炭焼きには移動式の（林試式）炭窯を使用しています。切り出した竹を60cmの長さに切って4つに割り、節をとります。割った竹をなるべく密に炭窯につめていき、いっぱいになったら点火します。点火後は煙突を設置し、煙の色・におい・温度や通気孔から中の様子を見ながら炭化が始まったと思ったら炭窯を土で密閉します。煙突の下部からは竹酢液が採れます。点火から密閉までだいたい10～12時間ぐらい。密閉後は一晩放置しておき、次の日に竹炭を取り出します。

できた炭は参加者に持って帰ってもらっています。畑の土壌改良剤・消臭剤・インテリア・燃料などとして使用しています。

竹紙づくり

竹から紙をつくる活動も行っています。竹を2～3ヶ月水につけてアクを抜き、水酸化ナトリウム溶液で煮て繊維をやわらかくします。その後ミキサーで粉碎し、水と糊を加えてすき枠ですき、天日で乾かせば完成です。すくときに落葉を挟むとおしゃれな紙ができます。できあがった紙は一筆箋やしおり、葉書などにしたり、薄めの紙を使ってランプシェードも作りました。また、湖風祭（学園祭）では竹紙づくりの体験コーナーを企画し、作品の販売を行いました。今後は地域の方向けのイベントを企画していきたいと思っています。

竹箸づくり

竹素材を身近に感じてもらい、竹の問題を認識してもらうために、湖風祭を中心に竹箸づくり体験を行っています。湖風祭ではゴミ削減のため、お客さんにお箸を持参してもらっているのですが、自分でお箸を作って湖風祭を楽しんでもらう企画です。

お客さんにはちょうど良い長さに切っておいた箸材を割ってもらい、ナイフで好みの形に削ってもらいます。大変身近な生活用具である箸を自分でつくるということで、毎回好評をいただいています。2005年度の湖風祭ではスタードームと呼ばれる竹のドームを作ってその中で箸をつくってもらいました。

その他のイベント

炭・紙・箸以外でもイベントを行ってきました。甲良町で開かれた子供向けの竹の工作教室の講師として出かけたり、竹で遊ぶイベントのお手伝いをしたりしました。また、年末には多賀町立博物館との共催イベントで門松づくり講座を開催しました。明るい河辺林だけでなく、竹などの自然素材を使った文化をしっかりと受け継いでいくことも大切であると考えています。

今後も地域に目を向けたイベントや活動をもっと展開していきたいと思っています。

その他の活動

その他の活動としては「犬上川を豊かにする会」や周辺自治会との話し合いを開いて、今後犬上川をどうしていくか議論しています。彦根市清掃センターに、倒竹などの利用が難しい竹や不法投棄されたゴミの処



伐った竹の長さをそろえる



枝の処理



伐った竹を運び出す



竹伐採前



竹伐採後



整備された河辺林内部

分をお願いしました。春にはみんなで河辺林に入ってタケノコ堀りをしています。また、犬上川の河川改修工事に伴う植物の調査に同行したり、竹伐採作業の前には活動地周辺の観察会を行って、より犬上川の自然について知ることができる機会を作っています。京都精華大学が開いた暮らしの中の竹文化を広めるイベントに参加して竹炭のプロの方の意見を聞いたり、ハイチから炭焼きの視察が来たこともありました。

これらの活動は新聞や「エコキャン通信」、エコキャンパスプロジェクトの活動報告書などで広く広報し、より多くの方に活動をお知らせしたり、活動に参加してもらえるような機会を作っています。

犬上川竹林プロジェクトが発足して2年と3ヶ月が経ちました。ここまで来てようやくいろいろなものが形になってきました。エコキャンパスプロジェクトの仲間たち、大学と教職員の方々、そして地域の方々の協力があってこそ、ここまでくることができました。これからは形になったものを今まで以上に地域に向けて発信していく時期だと思えます。

今後の活動として、河辺林の土手に活動のアピール用の看板を設置したり、河辺林に降りる斜面に階段を付けて地域の人が林の中を散歩できるようにしたり、竹炭や竹紙をフリーマーケットなどに出して販売するような案が出ています。また、湖東地域振興局と一緒に竹チップを使って、法面などの雑草の繁茂を抑える実験をしています。これがうまくいけ

ば竹の大量利用が可能になるかもしれません。さらに、活動地のの上流にあたる甲良町から、河辺林の放置竹林をどうにかしたいので一緒に活動してくれないかという依頼もきています。夢はどんどん膨らんでいっています。

竹林の管理は短期的に終わるものではありません。ずっと継続していかなければならないものです。また、犬上川だけでなく、全国的な問題でもあります。地域が中心となった管理が必要でしょう。いかに楽しく、いかに手軽に管理できるかが重要になります。管理が負担だと思えるようなものであれば継続できません。犬上川竹林プロジェクトを地域ごとの竹林管理のよいモデルにしたいと思っています。犬上川で出た芽が大きくなって、たくさんの実をつけ、いろいろな地域に飛んで行ってほしいです。

コメント：野間直彦（環境生態学科講師）

犬上川については本学の開学当初から、棲んでいる生物・改修工事の影響などに関心を持つ学生の自主的な活動があった。竹林プロジェクトはそれら先輩の蓄積をうまく受け継ぎ、市民の協力者と語らって竹林管理を継続している点が新しい。現代GP予算はその支援に効果をあげている。まだ当初の目的を達成したとは言えないが、まだ話していない団体など、今後様々な関係者と相談することで、活動の継続と広がりが期待できると思う。皆さんも一度、活動に参加してみてください。



伐った竹を4つ割りにする



炭窯



できあがった竹炭



子供と一緒に竹紙づくり



できあがった竹紙



スタードームで竹箸づくり



甲良町で竹の工作教室



門松づくり



犬上川を豊かにする会との話し合い



河辺林の観察会



学生メンバーの集合写真



新しく出た芽

環境社会計画専攻らしさを活かした大学生生活

～課外活動を通じて学び、成長したこと～

谷口 浩，肥田真梨子
環境計画学科
環境社会計画専攻4年生
(コメント 専攻教員 金谷 健)

私の大学生生活の右往左往 (谷口 浩)

1. 大学で初めにしたこと

1-1 大学に入ってから目的が無い状態

この環境社会計画専攻に明確なビジョンを持って入学する学生は非常に少ないと思います。何となく「環境に配慮した社会をデザインする」と言う非常に曖昧な言葉に惹かれて来た学生が大半だと思います。私も間違いなくそのうちの1人でした。これといった目的が無く入ってしまったのが本音です。入学してからはしばらく雲を掴むような手ごたえで居ました。そのせいか授業もあまり覚えていません。他の学部や大学に行った学生よりも目的意識が無いのだろうと焦りも感じていました。「何かをしないといけない」そう思ったときに、二つの出来事がありました。

1-2 技術士環境部門の受験

ある昼下がりの授業で、うとうとして時間が過ぎていったときのことでした。先生が環境関係で一番難しいと言われる「技術士」の試験について話し出しました。難しいだけに価値もあるし、就職にも強いということでした。でも学生中に合格するのは難しいということも同時に聞きました。特に目的意識の無い私は、何となく4ヵ年計画で受験してみようと思って締め切りが迫る中ドタバタで申し込んで見ました。

1-3 サークルが主催するセミナーへの参加

企業などの組織が取り決めに従って環境に配慮した仕組みを作って活動（そして客観的に評価）するための規格である「ISO14001」と言うもののセミナーを学生サークルが主催すると言うのを聞きました。「何となく仕組みが作りたい」「企業が環境配慮しないと環境問題は解決しない」という漠然たる私の意識に反応してこちらも受けてみました。

2. カリキュラムの現状

一方で当専攻のカリキュラムですが、社会における環境問題の変遷と現状、その解決のための環境技術や環境政策の手法や理論などを体系的に学んできました。

特に行政や企業、住民など利害が複雑に絡み合った各主体を学生が演じて社会のルールについて議論する「合意形成技法」や、環境NPOや環境省など

現場の最前線の方の声が聞ける「政策形成・施設演習」などは本当に刺激的なものでした。また「環境フィールドワーク」では、実際にリアルタイムで取り組まれているバイオディーゼルの普及運動などを視察し、課題を調査、解決策を提案するという非常に難しくもやりがいのある内容でした。

カリキュラムは、水環境・廃棄物・法律・大気・心理学・経済学など非常に幅の広い範囲を扱っていましたが、全てを知らないといけないというのも納得いきますし、その中から自分のやりたいことが見つければそれで良いと思いました。しかし、大学のカリキュラムに従っていても、特に「コレになれる」「こんな資格が取れる」なんてことはありませんでした。先生側も、「幅広い進路の中から、自分で探さない」というスタンスでした。

3. 自分で決めた課外活動だから

3-1 カリキュラムと課外活動のつながり

個別には充実していたカリキュラムですが、実践するということに関してまで網羅されているものではありませんでした。それこそ何か自分のやりたい事（やりたいと思わなくても）を一つでも見つけ、その世界を学外で実際に体験する必要があります。そこで、私が取り組んだのは「技術士環境部門」の受験と「ISO14001」の実践でした。とても高尚な目的意識があったわけではありませんが、目標が無いからこそ何かを何でもいいから始める必要があると考えたのです。ですから今振り返ってもやりたいたことをやってきたという自負はありません。

3-2 とにかく環境活動の「実績」を残したかった

私は、特にISO14001の活動に注目し、上述のセミナーに参加し環境系サークル(EMO:滋賀県立大学環境マネジメント事務所)に入りました。そのサークルの活動は、主に県立大学生協のISO14001活動を協同で実践することと、その経験を活かして学外地域の企業にISO14001取得の支援・コンサルティングをすること、そして分かりにくいISO14001の内容と実践の仕方を学生や地域の企業の人に教えるセミナーの主催、の3つです。

私は、その中でも地域の企業にISOの仕組み作りの指導に力を入れてきました。しかし初めは怖くて仕方ありませんでした。学生が企業の指導をする

ということの難しさと、失敗したときに責任が取れるのかという大きな不安があったからです。小さな会社ではなく、数百人規模の中堅企業が相手です。また学生が授業ではなく、学生だけの主体的な活動として指導をすると言うのは全国に例のないことでした。

初めは怖気付くことや失敗ばかりでしたが、どうしてもこの企業の環境活動を推進させて環境ばかりでなく本業の部分でも新しい風を吹かせたいという思いから、徹夜での作業、担当者との折衝、従業員の教育などを行ってきました。

特に難しかったのは、既存の組織の風土や仕組みに対してどのようにISOで決められたルールをそこに適用するかということでした。何かを言うルールは簡単に作れます。しかし、それを実際に滞りなくやることは容易ではありません。難しい用語を使う場面もあり、理解が付いていかないことが当たり前の世界です。そして仕組みの内容が分かっているてもやる意義が分からない、意義が分かっているても行動しないという現実がそこにはありました。これらに対してしっかり原因を考えて、仕組みの改善や従業員の意識を向上させる必要がありました。

目的は、学生による指導が無くても自立的かつ継続的に自分たちの作ったルールを守り、そのルール自体を向上させるようになってもらうことでした。苦勞が絶えませんが、無事ISO14001の認証を取得し本当に全国初の事例を作ることが出来ました。

この活動が珍しいのは、コンサルティング会社をあえて使わずに社会に無知な学生の思いつくアイデアや雰囲気重視し、そして双方に学ぶ場を与えた会社と、学生との協働の活動だったからです。

3-3 実績はそのままではいけない

結局それでめでたしとしては面白くありません。その活動を各メディアにアピールをして雑誌や新聞に掲載されました。また、「組織内の環境マネジメント(管理)」だけでなく、サークルと関わる企業同士をサークルが節となって有機的に結びつける「地域の環境マネジメント」が出来ないか、という今後のプランを含めて専門誌に寄稿したりもしました。

やりっぱなしではなく、事例を発信して社会の環境運動の機運を高め、また次のチャンスの足掛けとなるように自分たちも継続的改善を目指しました。この活動は大学内だけでは出来ませんし、また環境意識の高い組織(登場人物)が多いから出来たことという意味では、他の大学では絶対に出来ない、滋賀県という場だからこそ出来たことです。

カリキュラムだけでは絶対にこの専攻の醍醐味は味わえません。座学を通じて興味を持ち、学外のフィールドへ自主的に出て足掻いて見るという体験を

する。その体験を通じて養った視点で、座学の大切さを再確認する。このサイクルがあって初めてこの専攻が目指す人材が輩出されるのではないかと思います。

4. 大学生生活で得られたもの

以上の活動は自分の力でやってきた部分は本当に少ないです。しかし何も無い所からチャンスに飛びついて食らい付くことで、本当に良い機会に恵まれたと思います。専門知識が身につけて、交渉することを学んで、仕組みづくりの難しさを痛感して…。いろいろなことが学べましたし、身に付いたと思いますが、何よりも目的が無かった所からでもしっかりやれることがあるんだという体験が一番でした。

取り上げるのが遅れましたが、技術士の環境部門の1次試験も受験1年目で合格することが出来ました。

クラスで誰も取り組まなかった中で、まずやってみようと言う思いと行動があったため、正直運によるものですが合格することが出来ました。

その合格をきっかけに様々な専門家の方とも人脈が出来たので、本当に最初の一步は大事だと思っています。そういった機会がまた自分を成長させていくと思うので、これからもチャンスを逃さず、また始めたことは最後までやり遂げるようにしたいと思います。

環境問題も何も無い所から問題を新たに提起して、解決策も何も無い所から見つけてまた作っていかなくてははいけません。そういった意味では、人が学ぶ姿勢にも似た所があると思います。

5. 進路とこれから

進路は、上記の活動もあって物流機器関連企業の環境対応の部署に付くことになりました。仕事内容は、今までの経験をそのまま行かせるISO14001の仕組みづくりとその運用を任せられる予定です。海外に売り上げの半分がある企業で、その海外の支社や現地法人の認証取得を執り行います。今までは学生の立場でしたが、次は企業で当事者としてやってみたく、また様々な業界を結ぶ物流企業だからこそ出来ることがあると考えています。

環境なら公務員という道もありますが、前述のとおり企業を変えることが環境問題の解決を前進させるという思いから、とにかく現場から初めてみよう、一番現場に近いところを選びました。

当専攻、当大学、この滋賀県で学んだことは本当に大きなものでした。まず企業で、現場でしっかり社会を具体的に見る力と行動できる力を身に付けて、将来的に環境問題の解決に、さらに広く見た社会に対して少しでも貢献できるような人物になればと考えています。

1400日の大学生活 (肥田 真梨子)

1. 大学生活での2つの目標

1-1 環境問題について学ぶ。

「大学卒業後には、社会に役立つ人になりたい。今後、大きな問題になる事は何か？その問題に対し社会に広く通用する手法を学びたい」と考える中で環境問題に興味を持ち、環境社会計画専攻で学ぶ事を決めました。

1-2 大学生活をおもいっきり充実させる。

「大学生活の1400日をどう過ごすかで、大きな差がでます。さあ、あなたは どうしますか？」1年生前期の授業で、T先生がおっしゃった言葉です。大学生は、授業・サークル・遊び・バイト等を自由に選択できる恵まれた身分だと思います。高校ではクラブ活動をしていなかった事もあり、様々な事に挑戦しようと3つの団体に所属しました。

2. 大学生活で学び、得た物

2-1 現場で学んだ多面的な視点

まず、授業を通じて学んだ事を述べます。環境社会計画専攻では、現場で学べるユニークな授業が多かったと思います。特に印象に残っている授業は「政策形成・施設演習」「イベント計画演習」「合意形成技法」です。授業内容は、環境省の方から環境政策のお話を伺う、愛・地球博のドーム内で環境問題の啓発イベントを行う、環境税導入に関するロールプレイングで市民・行政・利害関係者に分かれて議論する等です。

このような授業は他大学に例は少なく、内容も充実していたと思います。これらの授業で共通して学んだ事は「環境問題の複雑さ」つまり「問題を解決するためには、先ず現場で現状を知り、関わる全てのもののメリット・デメリット等を多面的に考える視点が必要」という事です。例えば環境問題の意識を高める為に単に普及イベントを行えば良い、環境政策を充実させる為に政府から援助金をもらえば良い等、偏った視点だけではうまく行かない事を学びました。

2-2 失敗から学んだ軸を決める大切さ

次に、サークル活動を通じて学んだ事を述べます。私が所属している3つの団体は①EMO(環境系サークル)②ESS部(英語系部活)③女子ラクロスサークルです。

3つをかけた事は容易な事ではなく、活動時間が重なる事が多々ありました。そのような時は「今回はEMOを優先したから次回はESSを優先させよう」といった具合に参加しており、全ての活動が中途半端になってしまうという失敗を経験しました。

ある時、先輩から「全部は出来ない」と助言を頂きました。それからは自分の軸を考えて活動に参加するようにしました。私の軸とは、①環境、②人と

のつながり、③適度な運動です。こうする事で、それぞれを両立させながら大きな成果を得る事が出来ました。

2-3 チームの力で得た成果 環境大臣賞

私の一番の軸である「環境」(EMOでの活動)を通じて学んだ事、得た成果について述べます。

EMOとは、ISO14001(組織の環境負荷や環境影響等を管理する為の国際的なルール)に沿った活動を大学生協等で実践しているサークルです。具体的には、生協職員と共に学内ごみ分別促進キャンペーンの実施、環境活動全体を見直す監査、生協で得た活動ノウハウを地元企業や団体で実践等、様々な活動をしています。

中でも印象に残っている事は、3年生の時に出場した全国大学生環境活動コンテスト2006です。環境活動に携わる全国の学生が活動内容を発表し、一定の評価基準の下で勝敗が決まるというものです。

前年度は予選敗退という事もあり、発表内容や方法をサークル一丸となって試行錯誤し、練習しました。その結果、わかりやすい発表方法と活動内容が評価され、57団体中1位になり環境大臣賞を受賞する事が出来ました。しばらく実感が湧きませんでした。目標を一つにしたチームの力は大きかったと思います。

このような貴重な経験をさせて頂けたのも、今までサークル活動を作って来られた方々の努力なくしては有りえない事なので、本当に感謝しています。

下の写真は、2006.1.14に、当時の滋賀県知事(写真中央)に環境大臣賞受賞の報告を滋賀県庁で行った時に撮ったものです。



2-4 様々な経験より

次に残りの軸である「人とのつながり」「適度な運動」(ESS・女子ラクロスサークルでの活動)を通じて得た事について述べます。

(1)「伝えたい」気持ちの大切さ

まず、ESSについて述べます。毎日昼休みに英語のレッスンを展開し、他にも英語でディスカッションや暗唱大会等を行っているクラブです。私は涉外として、主に外部の人と行うイベント(留学生との交流会や他大学の人とのディスカッション等)を担

当していました。

中でも印象に残っているのは留学生との交流会です。ほとんど日本語がわからない20人程の留学生に手巻き寿司の作り方を英語で説明しなければならなく、必死で片言の英語とジェスチャーで伝えようとしました。思うように単語が出てこなくて困っていると、留学生側から英単語を言って頂き、皆が納得するという不思議な状況を経験し、何とか伝える気持ちさえあれば伝わるという事を学びました。

(2)コミュニケーション能力

次に、ラクロスについて述べます。試合に出るような強いチームではなく、週二回の練習や夏合宿、OBとの交流試合や学祭（湖風祭）に出店する等楽しく活動をしていました。ラクロスの練習をする事で、日ごろのストレスを発散する事が出来、私にとっては非常に適度な運動になっていました。

中でも印象に残っている事は、OGとの交流会です。歴代キャプテンにお会いして昔の事や進路のお話をして頂くなど、人とのつながりを増やすことが出来ました。又、学祭では、暴風雨の中でメンバーと共に一生懸命客引きをする等、忘れられない経験をする事も出来ました。

下の写真は、ラクロスメンバーで撮った集合写真です。



3つの団体での活動を通じ、様々な国や年代の方とつながる事ができ、1年生の時に比べるとコミュニケーション能力を少し向上させる事が出来たと思います。

本当にあっという間に4年が過ぎてしまいました。今後社会に出てからも、今まで共に過ごしてきた大切な仲間とのつながりや、乗り越えてきた事を糧にして、頑張っていきたいと思います。

3. 今後の進路

就職先は環境計測機器メーカーから内定を頂き、統合マネジメント業務（環境・品質・労働安全衛生のルール統合）に関わる部署で働かせて頂く予定です。

環境社会計画専攻やEMOなどで学び、得たものが活かせる進路ではないかと考え、とても嬉しく思っ

ています。今まで学んだ事を一つでも多く活かし、成長できればと思います。

具体的には、仕事内容には環境の経験を生かして、更に成長していきたいと思います。又、これからは海外の方と関わる機会も少なくないと思いますので「伝える気持ち」を忘れず、英語を学びながら言葉の壁を乗り越えられればと思います。

仕事だけではなく、会社のクラブ活動等でも適度な運動を続け、又、多くの人と関わる中でコミュニケーション能力を向上させながら、たくさんの事を学びたいと思っています。

そして、大学入学当初の目標である「少しでも世の中に貢献出来る人」になれるように頑張ります。

谷口君、肥田さんの手記を読んで（金谷 健）

環境社会計画専攻では、「環境と調和した社会経済システムの知識とそれに必要な方法論を習得して、環境政策や環境計画を立案・評価・改善できる指導的役割を担う人材を養成すること」が教育目的であり、そのために、多くの講義や演習科目が用意されている。

ある学生から言われたことだが、「学生サイドからみた当専攻の利点」は、①幅広いカリキュラムがあるので、興味のある分野に出会えるチャンスが多い。②1年生から専門科目の授業をとる事ができる等、自由に授業が組み立てられるので、課外活動に打ち込む時間を、自分次第で作れる、という2点とのことである。

谷口君、肥田さんの手記を読むと、二人とも、当専攻のこうした「利点」を十分に活かして、課外活動、具体的にはEMOという環境系サークル活動等を通じて、大学生活を充実したものとされたことが、よくわかる。

卒業後、谷口君も肥田さんも、環境マネジメントに関わる仕事をされるとのことである。これは、内定先の企業に、本人の人柄や専攻での勉強だけでなく、EMOという環境系サークル活動等での実績も高く評価されたためと思われる。

二人の手記を読まれた高校生の皆さん、本学の後輩の皆さん、君たちも是非、上記の当専攻の利点である「多くのチャンスがある」「自由に大学生活が送れる」という事を活かして、当専攻の勉強+こうした環境系サークル活動等に参加して、環境問題について実践的に学び、充実した大学生活を過ごしてください。

「木楽部会ともくれん」

木楽部会代表

芹田周平

(環境・建築デザイン専攻松岡ゼミ)

木楽部会顧問 松岡拓公雄

エコキャンパスプロジェクトの背景

エコキャンパスプロジェクトは“滋賀県立大学を「エコキャンパス」循環型モデルに”をスローガンに学生が主体となって2003年に発足した団体で、現在はその中に「木楽部会」と「生き物部会」があります。「木楽部会」は木や竹といった自然素材を使ったものづくりを学び楽しみながら、環境について考え活動を展開しているグローブです。そして「木楽部会」が中心となってこの度の造形活動拠点(通称;もくれん)整備事業を進めてきました。

滋賀県立大学エコキャンパスプロジェクトを発足するにあたり活動の拠点が必要でした。滋賀県立大学計画時の「マスターアーキテクト」は故内井昭蔵先生でしたが、彼の構想の中に「学生による手作りの学生センターによりキャンパスが完成する。」というものが、新マスターアーキテクトの松岡拓公雄教授及び学生により、完成された建築物ではなく、年月を重ねる毎に増殖するような学生の手による建築物の建造を目指そうということで活動を展開してきました。

2005年度までは本学に建築やデザインを学ぶ学科専攻があるにもかかわらず、造形活動拠点がありませんでした。建築や家具などのデザインを学ぶ上で、実際にものをつくるということは、工程や工法、素材の性質などを体得するという観点から非常に大事だと思われます。また、地域との交流、共同事業の推進を図れる場が必要という観点からも造形活動拠点を整備する必要がありました。

そこで、古民家および蔵の移築を行い、造形活動拠点として再生することにしました。候補として甲賀町の茅葺き民家と旧水口藩主の蔵があがり、最終的に作業スペースや室内環境などを考えた際、旧水口藩主の蔵の方が広く高さもあったので、蔵を移築再生することになりました。その際、多くの先生方の署名をいただき、現在の財務グループの青地さんらの協力を得て県への新規事業として申請し承認され実現することになりました。

水口藩主の蔵の概要

水口城を居城とする二万五千石の水口藩の藩主であった加藤家が、明治維新後の廃藩置県より現在の水口城跡から居を移した際に移築されたものと考え

られています。鬼瓦に「弘化」の年号の記載があり築150年以上とされます。その蔵を保存管理していた解体業を営む方から譲り受けました。広さは7間×3間(延床面積約77.76平米)あります。棟木までの高さが約6mと高く、作業等に適しているといえます。

プロジェクトの活動概要

■ 2003年度

水口町の蔵の視察や甲賀町の民家の視察を行い、学校に造形活動拠点設立の申請書を提出するなど造形活動拠点設立のための下準備を行ないました。

■ 2004年度

使い勝手など考慮し蔵を移築することに決まり、蔵移築のための部材の調査や他大学における造形活動拠点の視察を行ないました。そして環境科学部新規事業17年度予算採択に決定し、造形活動拠点が実際に作られることとなりました。

■ 2005年度

2005.04 部材の運搬及び学生コンペの実施

解体済みの部材を本学の敷地に運び込み、学生に対し誰が誰とどのように使うかや配置案など周辺敷地の条件を含めた総合的な案を募集し、本学内でコンペティションを行いました。

2005.05~06 造形活動拠点の基本設計

コンペティションで選ばれた案を叩き台にして、学生間で検討を重ね造形活動拠点の基本設計を行いました。

2005.07 民間の設計事務所と打ち合わせ

積算や細部についてのご指導をしていただき、基本設計から現在のプランになるまで打ち合わせを重ねました。

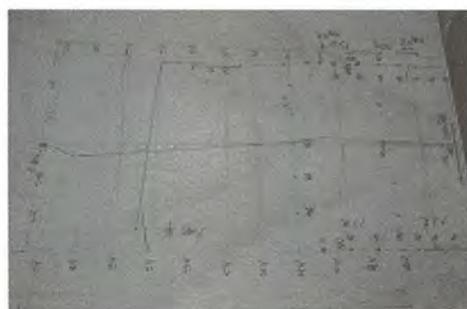
2005.10 造形活動拠点着工

施工を行う工務店が決まり、私たちの造形活動拠点の施工が始まりました。責任問題や安全面の問題で施工自体に学生は直接参加出来ませんでしたが、古材の検品を行ないリスト化し、現場に行き大工さ

んたちの仕事の様子や建物が建っていく過程を見学しました。造形活動拠点の躯体や外構は工務店の方々が行ない、内部は私たち学生の手でつくりあげていくことになりました。

2005.12 造形活動拠点を「もくれん」と命名

この移築再生された蔵の愛称を決めるべく、学内に募集をかけたところ様々な反応があり、その中から本学の造形活動拠点にふさわしい愛称をピックアップし投票を行いました。もっとも票を集めた「もくれん」という愛称に決まりました。



2006.03 造形活動拠点竣工

約半年の期間を経て、ようやく造形活動拠点「もくれん」の躯体と外観が完成しました。学校サイドと木楽部会や木匠塾など造形活動に携わる団体で運営することになりました。

■ 2006年度

造形活動拠点の断熱や土壁塗りを行ない、またベンチなどの家具の制作を行ないました。バンドソーなどの工作機械も購入され、益々造形活動拠点が楽しくなりました。近江環人の実習もここでこなされます。

蔵再生のプラン決定までの変遷

水口町にあった移築前の蔵の平面図。

7間半×3間のスペースに対し造形活動拠点として機能するように計画をするに当たり、学内コンペを行なった。

条件としては造形活動拠点に必要なと思われる機能の計画、造形活動拠点周辺の計画・ランドスケープを含めた総合的な提案。そして、躯体・瓦は既存のものを使うことであった。

告知から2ヶ月経ち、2回～院1回まで計7案が出揃った。審査員は松岡拓公雄先生、福本和正先生、山根周先生の御三方をお願いした。

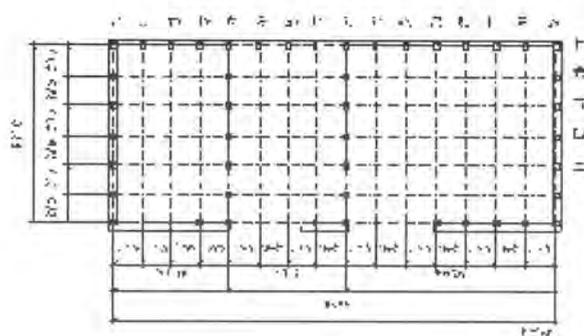
学生がプレゼンを行なった後、先生方から講評をいただき、投票へ移った。その決定案が右図2。これをたたき台にして、それからの3ヶ月間学生で何度も会議を重ね、ひとつひとつ決めなければならないことを決めていった。

そして細部を詰めるに当たり、民間の設計事務所と会議を何度か行ない、実際に建つためにプランを洗練させていった。そして最終的に提出したのが右図3である。若干の修正があったがほぼ学生の意向が通った形で実現に至った。

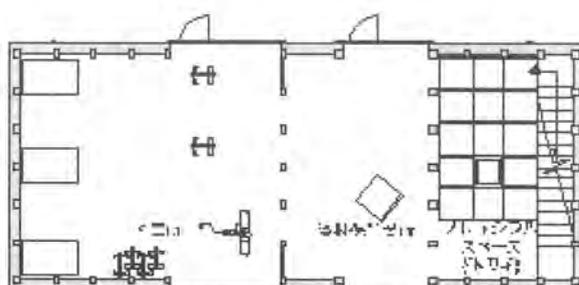
工事も終わり、2006年度は試運転を行ない、少しずつではあるが内装も始まった。

木工作機械が入り、作業室がやや狭くなったが、造形活動拠点の周辺も活かし、造形活動を楽しむには不自由なく作業が出来る。

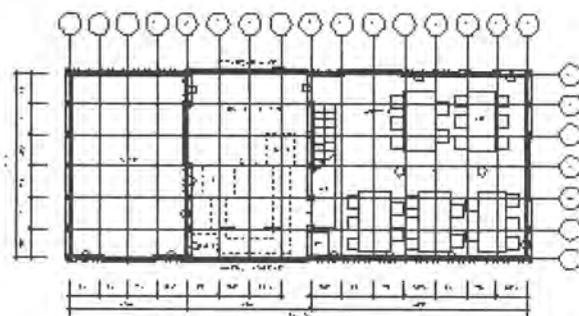
1 移築前



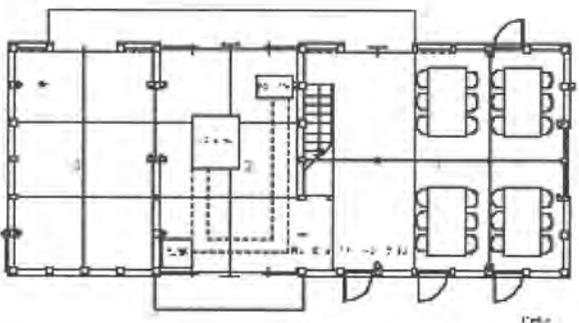
2 学生コンペ決定案



3 最終提出図面



4 現在



ちーむはっけい

～社会資本としての集住体プロジェクト～

ちーむはっけい代表

中尾達郎

(環境科学研究科環境計画学専攻松岡ゼミ)

ちーむはっけい顧問 松岡拓公雄



集落俯瞰写真

ちーむはっけい

私たち“ちーむはっけい”は1999年、松岡拓公雄教授が滋賀県立大学赴任時に、大学1回生から大学院2回生までの縦割りのゼミを編成し、ひとりの建築家がまとめた「社会資本としての都市住宅構想」に対して学生の視点からどんな重ね書きができるかを共通のテーマとしたワークショップに参加したことに始まる。

それ以来、このワークショップでは主に「都市における集住形」に焦点を当て、活動していた。私たち滋賀県立大学がこのワークショップに参加するに当たって、滋賀県彦根市というフィールドで“都市”から離れた視点からのアプローチを考えることができるのではないだろうかと考えた。そこで、彦根市の特徴の一つである田園風景を社会資本として捉え、全国一律のシステムの提案ではなく土地に根ざした地域性をもつ景観を考える勉強会を実施した。彦根市に数多く点在する集落を調査・研究することを活動の核とし、さらに現在の集住形と照らし合わせることで「集まって住む」ということへの提案を模索していき、それを都市や田園において反映させる提案につなげていくことを主な目的とした。

これまでの活動

□集落調査

現在、彦根市の約80ある集落のうち30の集落を調査してきた。デザインサーヴェイという形をとった調査方法は次の通りである。

1. 集落を形づくる屋根の形状・方向、樹木の配置などの景観要素を抽出し地図に落とし込む
2. 集落の歴史を文献、古地図、過去の航空写真などをもとに調べ、その集落の成り立ち、形態の変化を知る
3. 2をもとに1を分析し各集落の特徴を導き出す

この作業を各集落で繰り返すことにより、集落を湖岸・平野・街道沿い・山際のカテゴリーに分けその立地などの条件により、彦根の地に人々はどのように生活していたかを知る。それと同時に「集まって住む」という本来の人の生活スタイルを再発見・再認識し、現在の集住形では失われているもの、忘れてはいけないものを見出す作業にもなると考える。



彦根市における集落分布図

湖岸集落	大藪 八坂 須越 三津屋 下石寺 薩摩 柳川
平野集落	新海 田附 本庄 下岡部 上岡部 甲崎 田原 稲里 普光寺 南山崎 出路 金田 金沢 西清崎 小田部 野部 彦富 服部 上稲葉 下稲葉 服部 海瀬 荒張 野良田 賀田山 稲枝 甘路 外町 開出今 西沼波 沼波 小泉 宇尾 東沼波 極楽寺 犬方 堀 辻堂 金剛寺 蓮台寺 安田 寺村 清崎 五僧田 妙楽時 長江 楡 筒井 安食中 南三津屋千尋 太堂 三津
山際集落	甲田 馬場 中山 物生山 莊厳寺 善谷 里根 笹尾 仏生寺 山之脇 男鬼 野田山 上石寺 延寿寺
街道沿い集落	小野 大堀 高宮 鳥居本 正法寺 原 出町 地蔵町 法士町 葛籠町

っている。文献からでは得られない情報、知識に関しては実際に見学に行き、自分たちで体験することによりその空間をさらに深く理解するように努めている。実際に見学に行った集住体としては長野県今井ニュータウン・大阪府Next21・岐阜県宮住宅ハイタウン北方・集合住宅stepなどが挙げられる。

□その他の活動

- 彦根市開出今町を調査対象地として開出今町の田風景を要素分解するフィールドワークを行い、建築文化に掲載したほか、京都造形大学ユニットとのセッションも行った。



建築文化掲載

- 彦根市芹川周辺にあり、200年ほど前から使われている足軽屋敷の1つを建築家の方と協力し実測や模型製作を行なった。
- 集落調査での出会いから鳥居本町にある民家の再生に参加させていただいた。
- 2004年度大津市まちづくりパワーアップ夢事業に採択され、大津都市再生大学校への参加を通じて旧大津百町の町屋フィールドワークを実施。旧大津百町の俯瞰模型を制作し、展示した。



集落調査データシート

□集住形の研究

近代都市集住体や集住システムについての資料・事例を収集・調査しそれらを持ち寄り、勉強会を行



俯瞰模型写真

など、活動を通してさまざまな機会を得ることができ、結果的に多くの興味深い活動へと発展してきた。

現在の活動

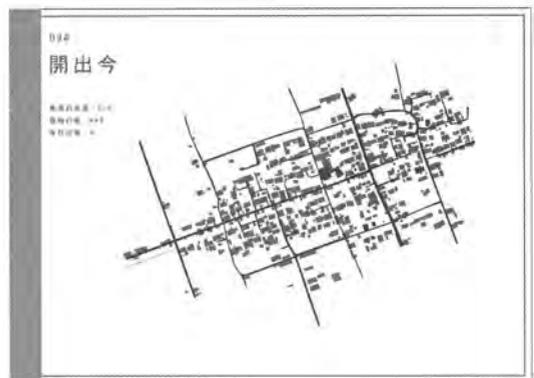
2004年度から文部科学省が新規創設した「現代的教育ニーズ取組支援プログラム（現代GP）」を通しての滋賀県立大学のプログラム「スチューデントファーム「近江楽座」—まち・むら・くらしふれあい

工舎」に採択され、集落調査した内容を図鑑化し本を発行することを始めた。

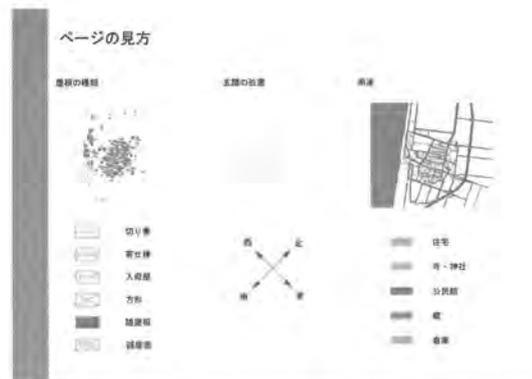
これまで培ってきた集落調査のノウハウを活かし集落をデータベース化し、それを蓄積していく。そのことによって集住体の追求だけでなく、彦根市や滋賀県の資料として活用でき、近年急速に進んでいる生産性のみを追及し、景観を無視する傾向にあるニュータウン開発やマンションの建設など、集落内における提案すべき事態に対して有効な資料にもな



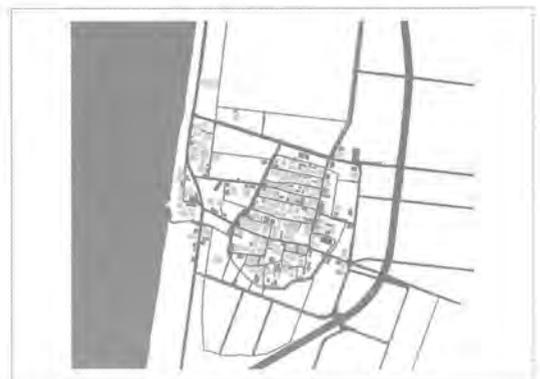
2004年度発行「集まって住む形」



2005年度発行「005 下石寺」



2004年度発行「集まって住む形」



2005年度発行「005 下石寺」

るのではないかと考える。また、それを地域住民にも公開することにより、景観の再認識・文化継承・地域における世代間の交流のきっかけとなることを期待する。

図鑑は2004年度に一冊目として彦根市の全集落の紹介となる「集まって住む形」を、2005年度にはひとつの集落にしぼり、景観要素の抽出と分析を行った「001 大藪」「005 下石寺」を、2006年度にはその続編となる「022 小田部」「023 賀田

山」「035 甘呂」の計6冊発行した。最終的には彦根市全域の集落をすべて網羅することを目標にしており、また学年を超えた交流による知識の共有はちむはっけいの原動力の一つとなっているので、今後も学年・世代を超えて継続的に活動を行っていく予定である。

活動を通して

これらの活動を通して自分の興味あるテーマを見つけ出し、卒業論文や設計、修士論文とリンクさせ、さらに深い部分まで掘り下げた研究を行う学生も出てきている。

各々の自主性を尊重し、チームワークから得られた成果を自分のテーマと関連付けて発展させていくこと、様々な機会を活かしその目標に向かって活動を続けていくことは個人のステップアップであるとともに“ちーむはっけい”にとってのステップアップへと繋がっていく。

ちーむはっけい2006

M2 千葉 知智 chisato CHIBA

M1 竹岡 寛文 hurohumi TAKEOKA

USP-UNIT MASTER

中尾 達郎 tatsuro NAKAO

松岡拓公雄 ei MATSUOKA

牧野 瑞紀 mizuki MAKINO

takeo MATSUOKA

増井みのり minori MASUI

松岡 英緯 ei MATSUOKA

4 小林 加奈 kana KOBAYASHI

谷水 あき aki TANIMIZU

3 石川 智章 tomoaki ISHIKAWA

駒井 克哉 katsuya KOMAI

宮窪 翔一 shoutichi MIYAKUBO

「∞」を感じる事ができた卒業制作展

与 語 一 哉
 環境計画学専攻
 環境意匠コース
 博士前期課程1回生

卒業制作展は2006年で8回目となるが、2年前から学生が主体となって展示や講評会を進めている。本年も学生が主体となって進めようとなった。

2006年の卒業制作展のテーマは「∞」である。卒業制作は大学生生活の集大成でもあり、新たな旅路への出発点となる。そんな僕らは無限の可能性を持っていると信じ、果て無き世界を共に見よう、そしてそんな僕らを見てくださいといった思いが込められている。特に僕らの学年にとっては最初で最後の共同作業であり、本当にできるだろうかと不安であった。



特に本年は論文に対しての意識を高めたいとの意見が出た。例年「論文は地味である」、「論文の扱いが設計よりも悪い」といった風潮がある。議論を重ねた結果、そういった差を埋めるために同じ交流センターのホワイエで展示や講評会を行おうとなった。論文と制作の日時は別々になったが、お互いの発表を助け合うといったかたちをとった。



全体の代表を中心に、会計、会場設営、広報、看板、リーフレット、レセプション、ケータリング、議事等の担当を振り分けた。各担当が毎週行われる全体会議で報告や議題を投げかける。僕自身は看板の担当であった。どこにどういったものを作るかということであるが、もう1人の看板担当者と話し合い案をまとめ会議にもちかけ意見を求めた。地道な作業であり、思いのほか難航した。自分の卒業制作も進めていかなければいけない中で平行してやっていくことは正直大変だった。



準備も終盤から当日にかけて先輩、後輩、先生方も協力してくださった。まさに環境・建築デザイン専攻の関係者すべてでつくったプロジェクトであった。



今回は関西の他大学や彦根周辺にポスターやDMを置かせていただいたことで展示中300人を超えるお客さんにみていただくことができた。

また学生主体の卒業制作展になってから講評会時に外部ゲストを招いているが本年は横内敏人氏と宮城俊作氏に来ていただいた。建築やランドスケープの第一線で仕事をしている方々から各々に檄をいただいた。その後行われた討論会でも司会をしていただいた先輩のおかげもあり例年になく活気づいた。成功である。



1回生から3回生のとき私は先輩たちの卒業制作展を手伝いながら先輩のすごさを体感した。果たして自分がこれほどの卒業制作なんてできるものなのかとっていた。その卒業制作も終わった。後輩には私たちがどのように映ったのか。ぜひ今後もすばらしい卒業制作展が行われることを願う。

この卒業制作展からはや1年が経つ。私たちはすでに新しいスタートを踏み出しており、今さらこと細かく書き記すことはできない。やはり鮮明に残っ

ているとすれば、すべてを終えたときの皆の笑顔。それがもたらしたものは、俺たちはやり遂げたのだという自信と、1人じゃ到底できないことが皆で力を合わせればできると無限の可能性を感じたことである。これを糧にしてそれぞれの新たな人生を歩んでいる。

なお、この卒業制作展の様子は、環境・建築デザイン専攻ホームページ <http://www.ses.usp.ac.jp/lab/kenchiku/> に紹介されており、そちらも参照いただければ幸いです。

『DANWASHITSU』

～小さな講演会が地域の大学を発信する～

DANWASHITSU運営委員会
環境計画学科
環境・建築デザイン専攻

『DANWASHITSU』とは建築・環境デザインの学生有志が運営する講演会の名称です。「しながら「談話」をするかのような雰囲気の中で、現在活躍されているあらゆる「創り手」の方々とざっくばらんに語り合う場を大学の中に設けたい」という想いの下に1999年から定期的に講演会を開催しています。『DANWASHITSU』の具体的なコンセプトは以下の三つです。

- ①学生が直接ゲストと対話できる距離感を大切に
する。
- ②単にゲストの話聞くのではなく、『地域性』
や『環境』をテーマとし、あらゆる「作り手」
から多様な『環境観』、『地域観』なるものをあ
ぶりだす。
- ③学年のみならず学生・教員の枠を超えた運営を
継続し、滋賀県立大学の環境・建築デザインの
存在を全国に発信する。

『DANWASHITSU』では、今までの7年間で23回の講演会を開催してきました。これまでのゲストは建築家のみならず、照明デザイナーから陶芸家、写真家まで多岐に渡ります。開催は不定期ですが毎年4、5回程度の開催を目指しており、B棟2F談話室において1時間半程度のスライドショーの後、2時間程度の懇親会を行っています。この約4時間は学生・教員・ゲストがフラットな立場でものづくりに対する想いを語り合うエキサイティングな時間が繰り返されます。

設立当初は完全に独立採算で運営を行ってきたのですが、昨年度からは専攻の先生方から資金的援助をいただけることになり、より充実した体制のもとで活動を行うことができました。学生の思いつきから始まった小さな講演会『DANWASHITSU』は学内の建築学生の誰もが知っている存在であり、もはや環境・建築デザイン専攻における伝統にもなりつつあります。

2006年度のゲストは、宮城俊作氏（ランドスケープアーキテクト）、藤本壮介氏（建築家）、山田脩二氏（写真家）、ヨコミゾマコト氏（建築家）を

お招きしました。それらの講演会の様子を運営委員の視点からレポート風に紹介したいと思います。

「庭と風景のあいだ」 ゲスト：宮城俊作氏
（ランドスケープアーキテクト）



2006年度DANWASHITSUの最初のゲストとして、ランドスケープアーキテクトの宮城俊作氏をお招きした。前半の講演会では、これまでに宮城さんが携わってこられたプロジェクトを中心に、スライドを流す形式で行われた。それらの仕事の幅は多岐に渡るものであり、ランドスケープに関して無知である僕に、その職能の広がりを見せているかのように思えた。これら一連の作品の説明で、共通して聞くことができたのは、ランドスケープにおけるディテールの話ではないだろうか。そこには、建築とはまた違う、生きたものを扱っているランドスケープならではの緻密なデザインがあり興味深かった。

宮城さんのデザインするものからは、いかにその場所に呼応して、外への広がりを意識しているのかがよくわかる。平等院宝物館などは、特にそうしたことが感じられた。

また、宮城さんがここ数十年の仕事をとおして念頭においている3つの問い、つまり・風景を造ることができるのか？・「建設」は唯一の創造行為か？・環境の「現実」はデザインに値しないものか？という問いは、ランドスケープアーキテクトの

職能観の確信にせまるもので、宮城さんはそこに建築との差異をみだせると言われていたのが印象的だった。

後半は布野先生、松岡先生、学生を交えて懇親会が行われた。講演会とはまた違った和やかな雰囲気、学生の質問を中心にたくさん話題がでていた。中でも自然とは何かをめぐっての話では活発な議論が交わされていた。人工と自然とのニュアンスは非常に微妙であるとした上で宮城さん自身は、やはり人の手が加わっている里山のような風景に美しい自然を感じると言われていたのが心に残る。

普段、なかなか第一線で活躍されている外部の建築家と直に話す機会の少ない学生にとって、非常に刺激あるものになったのではないだろうか。

(4回生 石野啓太)

「新しい座標系」 ゲスト：藤本壮介（建築家）



7月の暑い頃、今注目の建築家である藤本壮介氏をDANWASHITSU講演会に招いた。その著名さと長身のスタイルとは裏腹に、非常に気さくで穏やかな口調で話が始められた。

「住む人に合わせる機能主義ではなく、もともとあるものから人が機能性を見出していく住み方のほうが豊かなのではないか」。藤本氏はプロジェクト毎に軸となるテーマを打ち出して説明されたが、これは一貫して言われたことだった。我々建てる側が家をつくってだけでなく、住む側もつくることで始めて完成する。とりわけ、初期の代表作N-houseの話は衝撃的だった。床の無い建物は使う人によって大きく左右される。人と人との新たな関係が強く意識される。他にもFinal Wooden Houseをはじめ、彼の話す作品のプロセスや思いに触れると、徐々にその概念を実感することができた。

そして、藤本氏独特の説明の手段として度々登場するのが、五線のない楽譜である。最近になってピアノを始めたというから驚きである。彼曰く、五線

と小節は絶対時間を示し、五線のない楽譜はそれぞれの音に固有の時間が流れているのだという。音楽をする者にとって、小節は無くてはならない要素であると同時に、人によって変化の無いものである。一方、音符は人それぞれに変化し音を楽しむためには欠かせない。話を聞いているうちに、その音符の自由さこそが藤本氏の目指す新しい座標系なのかもしれないと思った。

また、自分の目指す建築を話す時、「二人」「居場所」という言葉を多用されていた。二人というのはコミュニケーションがうまれる最少の人数である。と同時に、最も親密に関係が築き上げる単位でもある。座標系というと、一見とても大きな単位で考えられているのかと思われるが、こういった小さなものの積み重ねによって全ての関係が生まれると思う。建物をつくるのも人間であるし、空間を利用するのも人間。ものづくりにとって一番大切なものは人。言葉にすると当たり前のことではあるが、今回の講演でそれを改めて見つめ直すことができた。

(3回生 岸本千佳)

「この国の津々浦々の景観の品格 風化する素材(瓦)の品格」 ゲスト：山田脩二氏（写真家）



「建築家はバカだ」そんな衝撃的な言葉で山田さんの講演はスタートした。会議室で2時間、談話室で2時間。独特の山田節で、終始笑いの絶えない講演となった。

はじめに、山田さんはマイクを持って前に立ち、ポスターより少し長くなった講演のタイトルを自らホワイトボードに書き

出した。「この国の津々浦々の景観の品格 風化する素材(瓦)の品格」。

山田さんの目に映る今の日本の景観、建築とはいったいどんなものなのだろう。そして、山田さんの言う“品格”とはなんだろうか。

カシャカシャと映写機が懐かしい音を立てながら、

たくさんの写真をスクリーンに映し出した。カメラマンであり、瓦職人である山田さん。そんな変わった肩書きを持つ山田さんは視点もやっぱり変わっていた。東京ドームも都会のビルも富士山も、山田さんが作ると全部瓦葺になってしまいうらしい。そんな冗談を交えながら、山田さんは会場を和んだ雰囲気

に。山田さんが「これはいいね」と言って見せてくれる瓦や石、流木は、本当に何気なくて一見どこにもあるように感じられる。しかし、それらは人工では作り出せないような形、朽ち方、素材感を持っていて、誰もが不思議と美しいと感じる。山田さんが講演中何度も口にした“品格”がそこにはあるのかもしれない。私たち現代人は、日本のあちこちに高いビルやマンションを建設する一方で、山や川、水田の広がる風景に心を和ませ、それらを求めて観光に行ったりする。“品格”のない景観が生まれるのは、このような矛盾した行動を起こす現代人の品格のなさに起因しているのかもしれない。そして、そんな危険性を山田さんはカメラのフィルターをとおして私たちに教えてくれている。

後半の談話室での懇親会では、お酒を交えながら学生から様々な質問がされた。話の中心は、山田さんの若い頃から現在に至るまでの様々な経験の話から自然と写真についての話に……。

「写真は芸術じゃない、芸術として撮るのは自己満足だ」と語った山田さん。実際に世間で評価されている写真家がそう考えていることに驚いた。なぜなら、写真家の撮る写真というのはたいてい、その写真一枚にその人らしい表現がアーティストックにされているものだと思っていたからだ。けれど山田さんは、「カメラマンは自分の表現が出来るものではない」と言う。山田さんの言う写真は、「どういう風にコピーをされて、いかに世間に見せるか」という工業製品としての役割をするものだった。そして、「カメラマンはただ忠実にコピーするのではなく、いかにうそをつくか」が重要であると言う。そんな山田さんの話を聞いて、アートコンプレックスを少なからず私も持っていたことに気づかされた。

今、芸術的な要素が強くなった現代の写真のあり方を、そして写真に限らず建築においても、もう一度その果たすべき役割について原点に戻り見直す必要があると感じた。(3回生 吉岡あすか)

「単純な複雑さ」ゲスト：ヨコミゾマコト氏（建築家）



ヨコミゾマコトさんと言えば最近では富弘美術館で日本建築学会最優秀賞を受賞し、名実ともに日本のトップ建築家である。そのスター建築家が滋賀県立大学に来る事になった。ヨコミゾさんは県大の講演会場に、白いシャツとパンツに、黒いロングコートという、雑誌で見た彼と全くかわらない爽やかな出で立ちで、颯爽とやってきた。ヨコミゾさんの講演会はこれまでの作品のスライドが中心だった。ヨコミゾさんが作品についてどのように考えて設計したかをひとつひとつ、丁寧に説明する姿は、温かなヨコミゾさんの人柄がよく出ていた。彼の作品は住宅から集合住宅、美術館まで多岐にわたる。「非階級性・非全体性」や「単純な仕組みと複雑さ」、「自己最適化」など、ヨコミゾさん独特の言葉を織り交ぜ、分かりやすく説明してくれた。

一番興味深かったのは、懇親会での「建築を工芸品のようにつくるのは嫌い」という発言だった。ブルータルな表現にするのは嫌いだと言う。コンクリートはコンクリートらしさ、鉄は鉄らしさを、彼は求めているようだ。コンクリートは表面がザラザラしていて、素手で触ると怪我するくらいでもいい、と言っていたのには驚いた。ヨコミゾさんは建築を、すぐきれいに作る人だと思っていたのに、ヨコミゾさんの意外な一面を見ることができたと感じた。(4回生 宮窪翔一)

「環境観と地域観」を映し出す鏡として

『DANWASHITSU』でゲストの方が話すテーマは、毎回ゲストの方がそのとき最も興味のある事を話してもらっている。そのためレクチャーの内容は多岐に渡る。しかし最後に全てのゲストに対して共通に聞いている2つの質問がある。それは「地域で建築を学ぶ可能性と危険性」そして「あなたにとって環境とは何か」というものだ。ゲストの回答は

様々であり、そこでは外部からの視点、都市からの視点で様々な環境観や地域観を伝えてくれる。学生の中には地域の大学で建築を学んでいる意味や価値を見いだせなくなるものも多い。また、学内の講義だけではそのことをなかなか実感できないというのも事実であろう。『DANWASHITSU』とは、学生が教員やゲストと対等な立場で、自分たちのいる「環境」の意味を相対的に確認できる場所なのである。そして、そこには「地域」だからこそ実感できる「同時代性」が確かに映し出されている。

『DANWASHITSU』は今後も学生主導で活動を継続していく予定である。

(卒業生中川雄介)

琵琶湖の外来魚問題と子ども達の地曳網体験学習

— 研究と環境教育の連携 —

中尾博行

藤田建太郎

環境動態学専攻博士後期課程

(沢田研究室)

はじめに

琵琶湖はおよそ400万年もの歴史をもつ古代湖で(Kawanabe, 1999)、多くの固有種が生息する。しかし最近では北米原産の外来種であるオオクチバス *Micropterus salmoides*、ブルーギル *Lepomis macrochirus*が定着、増加し、問題となっている(中井, 2002)。外来魚問題の解決には、問題となっている生物への直接的な働きかけの他に、広く一般市民に問題を周知するための活動が欠かせない。特に初等教育の現場で周知活動を行うことは、将来の自然環境保全の担い手を育成する上で非常に重要である。

環境動物学研究室(沢田研究室)では2002年以来、水中観察を中心とした外来魚2種の繁殖生態に関する研究を行ってきた(中尾, 2006)。その一方で、研究で得られた水中写真や映像の展示・公開、滋賀県内の小中学校の自然観察会への協力など、社会還元にも力を注いできた。本稿ではその中から、2002年から2005年に草津市立志津小学校、同笠縫東小学校、琵琶湖フローティングスクール事業、滋賀県立琵琶湖博物館と連携し、株式会社小松水産の協力を得て実施した地曳網体験について報告する。なお2005年については、本学における現代的教育ニーズ取組支援プログラム(現代GP)の一環として実施された。

地曳網の実施結果

地曳網体験は、2002年10月15日に草津市立志津小学校5年生、2003年9月25日に草津市立志津小学校5年生、2004年5月11日に草津市立笠縫東小学校と志津小学校(フローティングスクール事業のため複数校が参加)5年生、2005年10月24日に草津市立志津小学校5年生の生徒(各年とも約100名)を対象として、大津市北小松の北小松水泳場で行われた。引率教員の注意の後、漁業者が漁船を用いて沖合い約300m程度まで網を入れた。その後、生徒、教員、漁業者、当研究室の学生全員で網を引き、徐々に網を引き上げた(図1)。いずれの実施年とも、引き上げ始めの頃は魚の姿が見えず、また網を引くのが大変な重労働であったため、子供たちは不満げであったが、網の引き上げが終盤に差し掛かると、コイ



図1. 地曳網を引き上げる子ども達。

Cyprinus carpio、オオクチバスなどの大型魚が暴れる姿や、ハス *Opsariichthys uncirostris*が網の端を飛び越えて脱走する姿が見られるようになり、現場は一気に活気付いた。袋網(地曳網の最後尾に付けられた、魚を集めるための袋状の網)まで引き上げると、漁業者がタモ網を使って魚をバケツに移したが、この時すでに子ども達は見たこともない大型魚や珍しい魚の姿に大騒ぎの状態になっており、中には手にアユ *Plecoglossus altivelis altivelis*等の魚を握り締めてしまっている子供も多数見受けられた。

採集された魚は可能な限り現場で種類別に選別し



図2. 採集された魚類. 写真で確認できる大型魚はすべてオオクチバス。

た。各年とも、この時すでにオオクチバスの採集量が最も多いことが視覚的に明白であった(図2)。特に2003年と2005年のオオクチバスの多さは他魚種を圧倒していると思われた。子ども達のみならず、引率教員や当研究室の学生も、このオオクチバスの多さには驚かされた。

魚類の選別後、クラス別に分かれて担当の学生が採集されたそれぞれの種の生態について簡単な説明を行った。特に大型のオオクチバスについては、2002年と2003年は琵琶湖博物館実習室で、2004年と2005年は現地で解剖実習を行った(図3)。オオクチバスの胃からはアユ、ヨシノボリ類*Rhinogobius* sp.、スジエビ*Palaemon paucidens*などが検出され、半消化状態の魚やエビの姿を目の当たりにした子ども達から驚きの声が上がった。また、オオクチバスの心臓が動く様子や、大きな口と鋭く細かい歯、何万粒もの卵が詰まった大きな卵巣なども、子ども達の興味を強く引いていた。

子ども達の一部は、解剖について始めは抵抗感を示していたが、解剖担当の学生が魚類調査の意義やオオクチバスの置かれている状況を丁寧に説明することで、多くは納得してもらえた。この際、魚類調査、あるいは外来魚といえども失われて行く命に対し、「かわいそう」と感じることは決して誤りではなく、むしろ尊重すべき感覚であることを伝えるこ

とに留意しながら説明を行った。2005年は最後に株式会社小松水産の方から地曳網の歴史や琵琶湖の変化などを話していただき、一連の学習は終了した。



図3. 解剖前のオオクチバス。2 kgの秤が振り切れている。

北小松周辺の魚類群集の動向

学習が終わり子供たちが学校へ帰った後、採集魚の重量計測と個体数の計数を行った(2002年はこれらの作業を行わなかった)。2005年は採集された量が多かったため、大学研究室へ持ち帰ってこれらの作業と、標準体長の計測を行った。表1に各年の採集魚の個体数を、表2に各年の採集魚の重量を示した。2003年9月と2005年10月は採集量が非常に多く、特に2005年10月は2004年5月と比較して、個

表1. 地曳網による採集結果(個体数)。

(単位:尾)

種名	2003年9月	2004年5月	2005年10月
オオクチバス(<i>Micropterus salmoides</i>)	910	6	1575
ウグイ(<i>Tribolodon hakonensis</i>)	106	-	1709*
アユ(<i>Plecoglossus altivelis altivelis</i>)	1613*	25	9
ブルーギル(<i>Lepomis macrochirus</i>)	313	1	223*
フナ類(<i>Carassius</i> sp.)	28	1	64
オイカワ(<i>Zacco platypus</i>)	-	-	61
ヨシノボリ類(<i>Rhinogobius</i> sp.)	-	25	-
コイ(<i>Cyprinus carpio</i>)	-	-	8
ビワヒガイ(<i>Sarcocheilichthys variegatus microoculus</i>)	2	-	4
カネヒラ(<i>Acheilognathus rhombeus</i>)	1	-	3
ハス(<i>Opsariichthys uncirostris</i>)	2	-	1
ニゴイ(<i>Hemibarbus barbus</i>)	1	-	1
カマツカ(<i>Pseudogobio rivularis</i>)	-	-	2
カジカ小卵型(ウツセミカジカ, <i>Cottus reini</i>)	-	1	1
ホンモロコ(<i>Gnathopogon caeruleus</i>)	-	-	1
ヌマチチブ(<i>Tridentiger brevispinis</i>)	-	1	-
	2976	60	3662

*は重量からの推定値

体数で約60倍、重量で約10倍の魚類が採集された。北小松周辺では、秋期に魚類の生息量が増加すると推定された。いずれの年もオオクチバスの重量が最も多く、2003年と2004年はアユ、2005年はウグイがこれに続いた。この他に1kg以上採集された魚類として、2003年はフナ類*Carassius* sp.、ウグイ*Tribolodon hakonensis*、2005年はフナ類、ブルーギル、コイ、オイカワ*Zacco platypus*が挙げられた。個体数ではオオクチバス、アユ、ウグイ、ブルーギルが非常に多かった。オオクチバス、ブルーギルや、コイ、フナなどのコイ科魚類は、いずれも春から初夏にかけて産卵を行なう。オオクチバス、ブルーギルは波の静かな内湾や内湖で（寺島、1977；淀、2002；中尾、2006）、コイ科魚類は内湖やヨシ原で産卵する（友田、1978；山本、2002）。地曳網を行った北小松はこのような条件に当てはまらない、広大な砂礫の浜である。北小松における地曳網による魚類の採集量が、春期に少なく秋期に一気に増加するのは、これらの魚類の繁殖に伴う移動と関係している可能性が高い。秋期に採集された魚類のうち、カマツカ*Pseudogobio rivularis*、ビワヒガイ*Sarcocheilichthys variegatus microoculus*、カネヒラ*Acheilognathus rhombeus*、ホンモロコ*Gnathopogon caerulescens*、カジカ小卵型（ウツセミカジカ、*Cottus reini*）などの小型魚は採集数が非常に少なか

った。同じ場所に大量のオオクチバス（重量で約1600倍以上、個体数で約400倍以上）が存在しているため、これらの小型魚は非常に高い捕食圧にさらされていると考えられる。琵琶湖沿岸の魚類群集の構造については、外来魚によって1994-95年の段階ですでに危機的な状況にあるとされている（中井、2002）。一連の地曳網の結果も同様の傾向を示し、この状況が現在も一向に改善されていないことを示している。

おわりに

オオクチバスとブルーギルの日本における急速な分布域の拡大の要因として、その特異な繁殖戦略と柔軟な摂餌様式という生態的な特徴が指摘されている（淀、2002）。琵琶湖をはじめとする日本古来の生態系を守るためには、外来魚の駆除をはじめとした適切な資源管理を行うことが必要不可欠である。そのため沢田研究室の外来魚研究グループでは、1999年から2001年は外来魚の食性の解明を、2002年からは繁殖生態の解明を目的として琵琶湖の北端部でスキューバ潜水を用いた調査を行い、2007年も研究を継続中である。

外来魚の拡散は、釣り人が釣り場を増やすために行う放流や、飼いきれなくなった飼育個体の放流など人為的な拡散が大きな役割を果たしているという一面も持ち合わせている。そのため生態的な知見の

表2. 地曳網による採集結果（重量）.

（単位：kg）

種名	2003年9月	2004年5月	2005年10月
オオクチバス (<i>Micropterus salmoides</i>)	62.62	8.37	80.17
ウグイ (<i>Tribolodon hakonensis</i>)	0.95	-	24.00
ブルーギル (<i>Lepomis macrochirus</i>)	8.54	0.04	5.44
アユ (<i>Plecoglossus altivelis altivelis</i>)	9.40	3.11	0.20
フナ類 (<i>Carassius</i> sp.)	2.70	0.02	7.57
コイ (<i>Cyprinus carpio</i>)	-	-	3.32
オイカワ (<i>Zacco platypus</i>)	-	-	1.02
ハス (<i>Opsariichthys uncirostris</i>)	0.13	-	0.12
ビワヒガイ (<i>Sarcocheilichthys variegatus microoculus</i>)	0.05	-	0.04
ニゴイ (<i>Hemibarbus barbuis</i>)	0.04	-	0.02
カジカ小卵型 (ウツセミカジカ、 <i>Cottus reini</i>)	-	0.02	0.02
カネヒラ (<i>Acheilognathus rhombeus</i>)	0.004	-	0.02
ヨシノボリ類 (<i>Rhinogobius</i> sp.)	-	0.03	-
ホンモロコ (<i>Gnathopogon caerulescens</i>)	-	-	0.01
ヌマチチブ (<i>Tridentiger brevispinis</i>)	-	0.001	-
カマツカ (<i>Pseudogobio rivularis</i>)	-	-	0.05
	84.44	11.59	121.99

表3. 環境学習に関する活動.

活動	内容・実施日程
イベント講師	小学生地曳網体験 (03/9/25) (04/05/11)、ピアノ池生き物ウォッチング (05/06/25)、ボーイスカウト 駆除釣り大会 (06/10/14)
環境学習講師	馬淵小学校 (04/12/08)、安曇小学校リバーウォッチング (05/11/18) (06/01/17) (06/11/30) (07/01/16)、愛東北小学校環境フォーラム (05/10/16)
企画展・講演	ウォーターステーション琵琶・水中から見た琵琶湖・魚たちの世界 (05/02/06~05/03/06)、湖南市立図書館・水中から見た琵琶湖の魚の世界 (05/05/20~05/06/05)、西堀栄三郎記念探検の殿堂・琵琶湖の水中探検! (05/08/03~05/10/03)
現代 GP*による取り組み	現代 GP の助成を受け、地域とのつながりをキーワードに、草津市志津小学校の 5 年生を対象として地曳網体験を実施 (05/06/01~06/03/31)

※：現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム

蓄積のみならず、外来魚が琵琶湖にもたらした危機的な状況や、野外へ放つことの危険性を広く伝えていくことも急務となっている。幸い外来魚研究グループが行っている調査では、水中写真やビデオの撮影を行っており、普段はなかなか目にすることのできない水中の様子が、小学生や一般の方々に受け入れられやすい教材となり、様々な場面でお話をさせていただく機会があった (表3)。その多くは小学生など、将来の自然環境保全の担い手となる子供たちであった。今回実施した地曳網体験をはじめ、水中の映像や、実際の魚の解剖を通じて、ありのままの琵琶湖を知ってもらうことで、琵琶湖や自然環境について興味を持ってもらえたなら幸いである。



図6. 安曇小学校での活動.

平成17年度は滋賀県立大学の現代的教育ニーズ取り組み支援プログラム (現代GP) から助成を受け、琵琶湖博物館、市民団体、小学校と協働し充実した体験プログラム「地曳網体験」を行うことができた。また草津市立志津小学校 (当時) 教諭の中村大輔氏には、地曳網体験の実施について尽力いただいた。琵琶湖博物館での解剖実習では西垣亨学芸員 (当時)

にご指導いただいた。その他、機会を与えてくださった教育機関の方々、市民団体「琵琶湖を戻す会」、参加者の皆さん、施設管理者の方々に、この場を借りて感謝の意を申し上げる。

教員コメント

自らテーマを選び、研究を続ける中で、人と人とのつながりから環境教育の場で発表するまでに至ったことは大きな成果である。今後も一層、研究を進め、社会貢献できる成果を残せるよう努力してもらいたい。

(生物資源管理学科 沢田裕一)

引用文献

- Kawanabe, H. 1999. Biological and cultural diversities in Lake Biwa, an ancient lake. Pages 17-41 in H. Kawanabe, G. W. Coulter and A. C. Roosevelt, eds. Ancient lakes: Their cultural and biological diversity. Kenobi Productions, Ghent, Belgium.
- 中井克樹. 2002. 琵琶湖における外来魚問題の経緯と現状. 遺伝, 56: 35 - 41.
- 中尾博行・藤田建太郎・川端健人・中井克樹・沢田裕一. 2006. 琵琶湖北湖における外来魚ブルーギル *Lepomis macrochirus* の繁殖生態. 魚類学雑誌, 53: 55-62.
- 寺島 彰. 1977. 琵琶湖に棲息する侵入魚一特に、ブルーギルについて. 淡水魚, (3): 38 - 43.
- 友田淑郎. 1978. 琵琶湖とナマズ. 汐文社, 東京.
- 山本敏哉. 2002. 水位調整がコイ科魚類に及ぼす影響. 遺伝, 56: 42 - 46.
- 淀 太我. 2002. 日本の湖沼におけるオオクチバスの生活史. 日本魚類学会自然保護委員会 (編), pp31-45. 川と湖の侵略者ブラックバス. 恒星社厚生閣, 東京.

私の環境学

景観生態学と適正な土地利用の実現

浜 端 悦 治
環 境 生 態 学 科

1. 景観生態学との出会い

私の所属していた琵琶湖研究所では、「景観生態学」を冠したテーマのいくつかのプロジェクト研究を1986年から行ってきた。当初その名称についてプロジェクト関係者で何度か議論をしたが、どちらかというと消去法で「景観生態学」という名称が残ったと記憶している。

その後、1987年に西ドイツで景観計画を積極的に行っていたグレーベ教授に会い、景観生態学的土地利用計画について、現地で説明を受ける機会を得た(写真1)。さらに1989年11月には「あすの生態学を求めて」と題した国際生態学会のシンポジウムが琵琶湖研究所で開催され、景観生態学を紹介されたミュンヘン工大のハーバー教授の講演(Haber, 1990)(写真2)を聴くことができた。プロジェクト発足以来、調査にかまけて「景観生態学とは」という問いかけをしてこなかった私にとって、この2教授との出会いは景観生態学を理解する上での貴重なきっかけとなった。



写真1. ライン-マイン-ドナウ運河の工事区間の保護地を説明するグレーベ教授(1987/12)



写真2. 永源寺でお茶を楽しむハーバー教授(1989/11)

2. 景観生態学とは

景観生態学は、「景域生態学」や「地域の生態学」とも呼ばれる(横山, 1995)。さらに景相生態学という、五感の生態学にまで発展させるべきとの意見もあるが(沼田, 1992)、まだそれについて十分な研究例もないので、ここでは狭い意味の景観生態学についてふれるにとどめる。

それは単に視覚的な風景を扱うのではなく、「地理的に限られた地域(景観)に出現する生態系の集合」を取り扱い(Haber, 1990)、「景観を構成する各要素間の関係と、系として景観がいかに関能しているかを把握する」(Zonneveld, 1989)生態学の1分野ととらえることができる。ハーバー教授が強調されたのは、まさにこの各要素間、各景観間の関係性の把握という部分であり、そこに私は新たな景観生態学の魅力を感じた。

3. 不可分な湖沼生態系と集水域

琵琶湖という美しい自然とその水資源の保全を目標に掲げた琵琶湖研究所は、琵琶湖という湖沼生態系は陸上生態系によって影響を受けており、湖沼の富栄養化を防止するためには、陸上の制御なくしては成り立たないとの初代吉良竜夫所長の考えから、湖や湖岸にとどまらず、集水域をも研究対象としてきた。いまから思えば、琵琶湖研究所は、まさに景観生態学的研究を行ってきたといえるであろう。

以下私が直接関係した2、3の研究から、景観生態学的視点の重要性について、考えてみたい。

(1) 森林地域での研究

琵琶湖とは直接関係していないと思われがちな河川の源流部にある森林で、伐採実験とその継続調査を1980年代末から行ってきた。これは森林伐採が渓流水質に及ぼす影響を野外実験的に明らかにするという日本では初めての試みであった。伐採流域と対照流域とを準備し、一方の流域の森林を皆伐するというを行った。伐採流域では、皆伐直後の懸濁物質によるTNやTPの増加とともに、伐採後9ヶ月を過ぎたところからの溶存態のNO₃-Nの増加が確認できた。後者のNO₃-Nは季節にかかわらず通年で高い状態を維持し、伐採6年後の2002年でも対照流域の濃度レベルには戻らなかった。森林伐採のこうした渓流水質への影響は、夏の成層期には生産層では窒

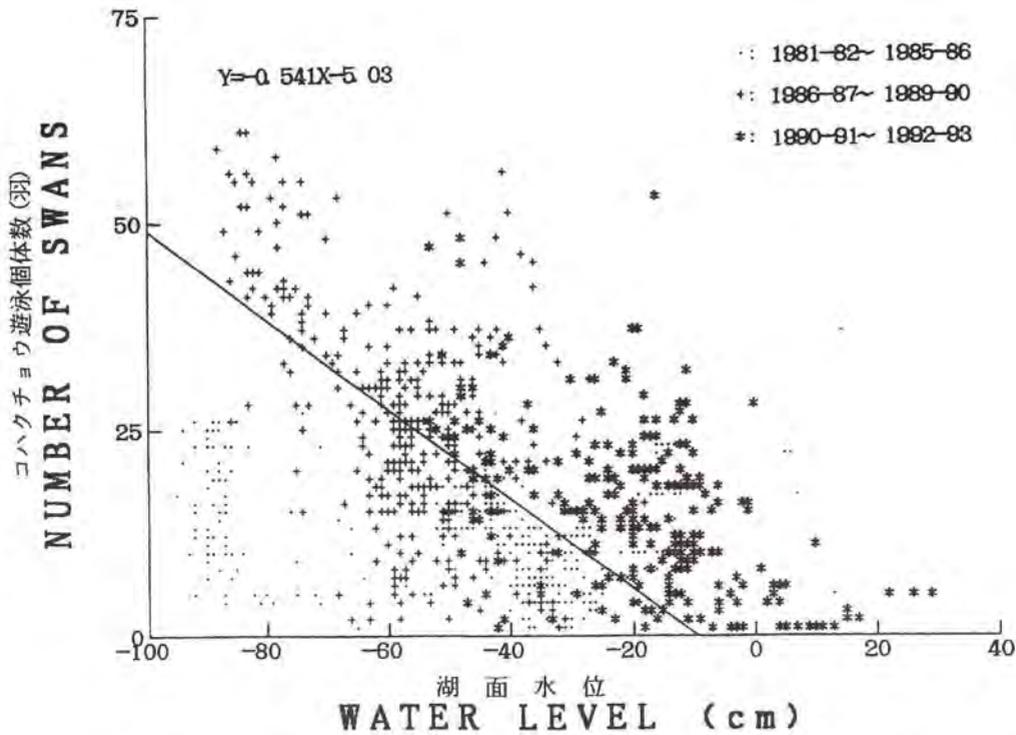


図1. 安曇川デルタ湖岸におけるコハクチョウの日遊泳羽数と湖面水位との関係

素についても不足する琵琶湖にとっては、富栄養化に寄与する恐れがあると考えられた。

このように、独立した生態系と考えられる湖沼生態系が、地理的に遠く離れた森林生態系によって影響を受ける可能性のあることが明らかになり、その富栄養化の防止のためには、森林の取り扱いも考慮する必要のあることが示された。

(2)冬季の水鳥の湖岸利用

1980年代後半、私は先の述べた「景観生態学」を冠した湖岸を対象としたプロジェクト研究の一環として琵琶湖に生育する水草（沈水植物）の分布調査を行っていた。その中で、琵琶湖で越冬するコハクチョウと水草との関係についても調べた。その結果、コハクチョウやヒドリガモなどの植物食の水鳥が、沈水植物を採食していること、そして湖西の安曇川デルタの湖岸で、コハクチョウの湖面上での日遊泳個体数と湖面水位との関係を見ると、水位変動の大きかった1986-87年冬から1989-90年冬の期間では水位（X）と個体数（Y）との間に有意な逆相関の関係（ $r = -0.61, n = 606; t$ 検定, $P < 0.001$ ）のあることなどがわかった（図1）（浜端ら、1995）。琵琶湖の沈水性の水草は、波浪の影響の少ない地域では、水深1m前後から7m付近まで生育しており、水位が下がれば下がるほど、水鳥にとっては餌が採り易いため、湖面で遊泳採食する個体数が増加する結果と考えられた。

冬季における琵琶湖の水位変動は、湖面で水草を

採食するコハクチョウなどの水鳥にとって、採食場所を左右する重要な要件であることも明らかになった。

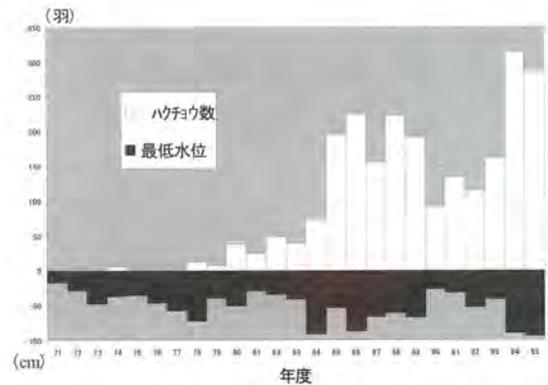


図2. 滋賀県に飛来したハクチョウ類の羽数と冬期（10月～3月）最低湖面水位の経年変化

全湖を対象として滋賀県によって毎年1月に実施されている水鳥の一斉調査で得られたハクチョウ類の個体数の経年変化は、-95cmという低水位を記録した1984-85年冬の翌年から、コハクチョウの越冬数が2倍以上に増加し、その個体数はその後数年にわたっては維持されるが、1990-91年冬から1993-94年冬に個体数の減少が認められた（図2）。これは1989-90年までは冬期の水位が比較的低水位で維持されていたが、この翌年から4年間、水位が下げられなくなり、採餌が困難になったことが原因と考えられた。コハクチョウが水田に初めて飛来し

採食をするようになるとともに、南湖へ移動を始めたのもこの冬であった。すなわちこうした移動の原因が琵琶湖の湖面水位であると考えられたが、湖沼の水位上昇の結果、陸上の給餌地や農地へ採食場所を変えたコハクチョウの同様の例がイギリスやオランダでも知られている (Owen & Cadbury, 1975; Beekman et al., 1991)。

このように湖岸の水鳥の保全を考える場合、採餌場所という視点だけからしても、湖沼だけを対象としたのでは不十分で、その周辺の農地なども視野に入れ、いくつかの異なる系を複合的に捕らえる必要のあることがわかった。

(3) 沈水植物群落の回復と湖沼

その後、1994年の夏に琵琶湖では大渇水が起こり、夏の低水位記録としては、実に55年ぶりとなる-123cmが記録された。これを契機に南湖を中心に沈水植物群落の回復を始め、それに呼応するかのようにより水質の改善が続いている。

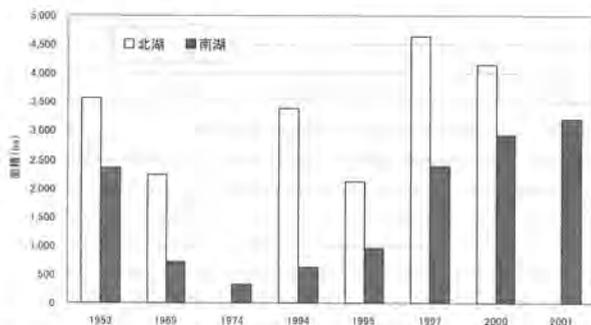


図3. 北湖と南湖での沈水植物群落の分布面積の経年変化

こうした沈水植物群落の回復過程と水質等に及ぼす影響を明らかにするための研究を1994年から行ってきた。その結果、南湖の沈水植物群落は1950年代から急速に減少してきていたが、大渇水以降増加に転じていることが明らかになる (図3) とともに、渇水以前と以後とを比べると、南湖南部地域では透明度は1.8 mから2.6 mに上昇し、クロロフィル-a, TP, TN (唐橋流心を除く) についてはそれぞれ 12.3 μg/lが4.61 μg/lに、0.026 mg/lが0.017 mg/lに、0.35 mg/lが0.28 mg/lへと低下するなど、南湖の水質が明らかに改善してきていることがわかった。沈水植物が水質を改善する機構はまだ明らかに出来たとはいえないが、水草による栄養塩の吸収、水草による他感物質の放出、底泥の巻き上げの抑制など、単独の原因で水質が改善されたとは考えにくい。むしろ沈水植物群落が浅水域湖沼の生態系の基本構造を形作るが、その発達動物プランクトンなども含めた湖沼生態系の構成要素をより豊かにし、その結果生み出された安定的な生態系が、水質

を改善してきていると考えるのが合理的であるようだ。

これらの研究をとおして、生態系を構成する要素間の関係性の把握や、系としての機能の把握を行うことの重要性を、そしてそれらの研究手法としての景観生態学の必要性を認識するに至った。

4. 私の環境学

環境学というものがあるのか、まだ十分な認識はないが、もしそれがあれば現在の環境問題を解決する実学の一つではないかと思っている。ハーバー教授の講演に話を戻すと、博士は景観生態学の目的を、土地利用構造をより適正にすることによって人間活動を制御し、持続的な土地利用と開発をはかろうとすることにあると述べられた。琵琶湖の富栄養化を改善するための下水道や下水処理場の整備は進み、人為的にできる負荷量の削減は、上限に近づきつつある。今後の手だては、ハーバー教授の言う適正な土地利用の実現ではないかと考えており、その基礎学として景観生態学的研究を進めていきたいと考えており、それが私の環境学であるのかもしれない。

引用文献

- Beekman, J. H., Eerden, M. R. van & Dirksen, S. 1991. Bewick's Swans *Cygnus columbianus bewickii* utilising the changing resource of *Potamogeton pectinatus* during autumn in the Netherlands. *Wildfowl, Special Supplement No. 1*:238-248.
- 浜端悦治・堀野善博・桑原俊雄・橋本万次. 1995. 琵琶湖でのコハクチョウの採食場所の移動要因としての湖面水位—水鳥と水草の関係解明に向けての景観生態学的研究—. 関西自然保護機構会報,17(1): 29-41.
- Harber, W.. 1990. *Physiol. Ecol. Japan*, 27 (Special Number): 131-146.
- 沼田真. 1992. 視覚的な景観と複合的な景相. 図書, 518. 28-31.
- Owen, M. & Cadbury, C. J. 1975. The ecology and mortality of swans at the Ouse Washes, England. *Wildfowl*, 26: 31-42.
- 横山秀司. 1995. 景観生態学. 207pp. 古今書院.
- Zonneveld, I. S. 1989. Scope and concepts of landscape ecology as an emerging science. "Changing landscapes: an ecological perspective"(eds. Zonneveld, I. S. & Forman, R. T. T.), 3-20, Springer, New York.

つれづれなるままに、“私の環境学”

長谷川（石黒）直子
環境生態学科

琵琶湖研究までの道のり

私は本学に来るまで、琵琶湖の研究をしたことはなかった。主に研究対象としていたのは諏訪湖とレマン湖だった。レマン湖はフランスとスイスの国境にある深い湖で、レマン湖の研究を行っていく上で琵琶湖のデータを使って比較考察したことはあったが、自ら琵琶湖で観測を行ったことはなかった。日本で淡水湖沼を研究している人にとって、琵琶湖は特別な湖であろうし、琵琶湖のほりに研究室があり、大学の船で観測を出来る県立大のような環境はとても恵まれたものであると思う。

さて、レマン湖は前述のように深い湖で、最大水深が309mある。最近では、特に寒さの厳しい冬にしか湖底まで循環を起こさない。このような冬的全循環が起らない年が続くと、深層の溶存酸素は消費されて減少していく。いっぽう、琵琶湖は幸いなことに、最大水深は104m、今のところ全循環が毎年確認されている。しかし年によっては2月くらいまで起らないこともあり、今後気候の温暖化が進めば毎年起らなくなる可能性も否定できない。また、九州にある池田湖は1986年以降全循環が起らなくなり、それに伴って深層の溶存酸素が全くなかった。さて、琵琶湖で同じような状況になったら、いったい琵琶湖の深層環境はどのようになるだろうか？（この原稿を校正している2007年3月8日現在、琵琶湖は全循環を起こしていない。もしこのまま全循環が起らなければ琵琶湖は初めての全循環欠損を迎えることになる。いったい2007年夏の琵琶湖はどうなってしまおうのだろうか？）

ところで、レマン湖では全循環が起らない年でも、毎年のように深層で一定濃度の溶存酸素の回復が見られている。これがどうしてなのかよくわかっていない。私はこの溶存酸素の起源は、レマン湖集水域の9%を覆う氷河が溶け、冷たく濁った密度流となって深層まで供給されているためであるという仮説を立てて研究を行った。これが、私がフランスに留学し、現地で調査をしたりデータを収集したりして仕上げた学位論文の中の一つのテーマである。

しかしこの仮説を裏付けるための観測は困難を極めた。何より困難だったのは、レマン湖の深さだった。冷たく濁った密度の高い水は湖底を這っていく。レマン湖は氷河に削られて出来た湖で、湖岸から急

に深くなり、中央にはまっ平らな湖底平原が広がっている、まるで箱のような形をした湖である。深層密度流の行方を掴むには、水深200~300mの湖底付近の水の流れを捉えねばならない。物理的な制約も大きく、このような観測によるデータ入手は結局実現することが出来ず、このテーマの解析は既存のデータによる考察が中心となった。この観測は将来的に、学術的な知力・体力をもっとつけてから挑みたいと思っている。

このように難関なレマン湖にいきなり飛び込む前の練習の場に好適なのが琵琶湖である。実は、湖北に多く降る雪が溶けて琵琶湖に流れ込んだときに深層へ沈んで溶存酸素を供給するプロセスがあるだろうことはすでに指摘されている。しかしこの実態を長期的（例えば一冬通した連続観測）、また3次元的な空間分布として捉えた詳細な観測結果はない。どれくらいの頻度で、期間で、どれくらいの酸素が深層へ供給されているのか、明らかにしてみたいと思う。幸い、琵琶湖はレマン湖に比べてまだ浅く、観測を行いやすい環境にある。

姉川や安曇川によってもたらされる融雪洪水、そんなものは琵琶湖全体の水量に比べたらたいした量ではないではないか。確かにそのとおりである。しかし、レマン湖や池田湖のように琵琶湖で全循環が毎年起らない状況になったらどうだろう？現在のレマン湖のように融氷起源の密度流によってかろうじて生きながらえる状況にはならないだろうか？もちろん、温暖化によって、湖北に降る雪自体が少なくなり、密度流自体が起らなくなる可能性もあるが・・・。

私が研究を行おうとしている姉川の支流の高時川にはダム建設計画がある。ダムが建設されたら、ダムにいったんためられた融雪水はあたたまり、たとえ積雪があったとしても深層密度流プロセスを消滅させてしまう可能性も大きい。そのためにも、ダム建設前に現在の密度流を正確に捉える必要があると考えている。

自然と人文の融合、私にとっての“環境科学部”という意味

以上は、私が本学着任前から進めてきた研究を続ける形での研究テーマである。私は本学に着て、今

まで考え及ばなかった別の視点で研究を行なっていたと考えている。それは本学の“環境科学部”という下地にいるからこそ考え付いた気がしている。

私はもともと地理学科という分野出身だ。地理学科には自然地理学と人文地理学がある。現在、この2分野はほとんど学術的には分裂状態にある（と私は認識している）。私自身、学生時代には自然地理にしか興味を持たず、人文地理はほとんど学んだ記憶がない。しかし本学環境科学部に来て、“これだ”と思った。今は、自然地理学的視点と人文地理学的視点を融合させてはじめて、環境問題を捉えられるのだと理解できる。本来、地理学こそが環境問題に取り組むべき学問分野であったのではないかとさえ思う。同学部に同時に着任した人文地理学出身の先生と、いつか自然と人文を融合させた研究を一緒にしましょうね、と話したこともある。

教育面でも同じことを考えている。私の所属する環境生態学科はかなり自然科学的なカラーの強い学科である。“環境科学は総合的な学問です”、“環境科学部では広い視野で環境問題を捉えることができます”というわりには、学科を越えた知識・学術交流が（教員レベルのみならずカリキュラム的にも）乏しい気がする。私はあえて、環境生態学科で自分が受け持つ授業は、私の本来の専門である流れ学から離れて、人文地理学的・社会科学的な視点をできるだけ取り入れていきたいと考えている。私自身も修行の毎日になるだろう。

私が学んだ地理学科はフィールドワークが十八番の分野であるはずで、確かに毎年フィールドワーク（私たちは巡検と呼んでいた）を行なった。しかし本学環境科学部で行なわれているような気合の入ったものではなかった。県立大の環境科学部は、私が受けたくても受けられなかった魅力あるフィールドワークを行なっていると思う。フィールドワークでは“総合的な視点から”をある程度重視して教育しているように思う。それが、学年が進むにつれ専門に分化するいっぽうで総合的な視点に立った教育が少なくなっている気がする。私は、「自分が学生だったらこんな授業を受けたいなあ」と思う、人文と自然の融合を追求した授業を目指したい。自分の感性を信じて。

研究と教育の融合

さいごに、県立大に着任して、得られた大きな視点がもう一つある。これは県立大だから、というよりは、初めて教育職に就いたからなのかもしれない。

学生から学ぶことがとても多い。それはもちろん、

私自身が教え方を知らず試行錯誤している段階なので、という理由も大きい。しかしそれだけではない。私の所属する学科の学生に限らず、やる気のある学生の頑張りぶりには目を見張るものがある。私が担当している大気水圏科学・実験では環境生態学科の2回生30人と一緒に高宮神社から高宮交差点にかけてヒートアイランドとクールアイランドの観測を行なった。11月の寒い中4週間、重たいアスマン通風乾湿計や風向・風速計を持って毎週3時間ひたすら観測を続けた。こんな観測でもいやな顔せず積極的に取り組み、私自身がびっくりするような大作のレポートを出してくる学生がたくさんいたのに驚いた。そんな学生を教育できるのは教師冥利に尽きると感じる。さらには、学生から学ぶことで自分もさらにやる気になり、学生のアイデアからヒントをもらって新しい研究テーマ・教育材料を思いつくということもあった。大気水圏科学・実験で高宮周辺の気象観測をやったのも学生のアイデアによる。研究面では、私の所属する研究室の卒業生が大量の漂着ゴミを回収して研究したのを知り、それに触発されて琵琶湖の湖底ゴミの研究をやりたいと思い立った。今まで自分が行ってきた研究とは全く異なる視点になるが（湖流によってゴミが移動するプロセスという意味ではつながる部分もあるが）、今後も学生のアイデアに乗っかって、またお互いにアイデアを出して研究を作り上げていくことが出来るのだろうと思う。教育も然り。“県立大はどうしたら地域の環境にもっと貢献できるだろう？”こんなテーマで学生たちとディスカッションしたら、きっと私には考え付かないすばらしいアイデアが飛び出すのだと思うとワクワクする。これが私にとっての“環境学”。自ら学び、学生からも学び、学生にもフィードバックし、みんなでより良いものを作っていく。着任したばかりの新米教員、夢と希望に溢れすぎでしょうか？

コミュニティ・ビジネス ～人と人のつながりを生み出す手法～

鶴 飼 修
環境計画学科
環境社会計画専攻

大学院「近江環人地域再生学座」担当

<コミュニティ・ビジネスという事業手法>

コミュニティ・ビジネスという“事業手法”が生まれたのは1980年代、不況に見舞われたイギリスで、失業者対策、地方分権を推進する政府の施策が原型といわれる。(細内1999a) *1

我が国で、この概念が生まれたのは、1994年から墨田区内をフィールドに実施されたHR I *2とK G K *3の共同研究を通じて、細内が地域コミュニティの再生にビジネスの視点を取り入れた事業手法をコミュニティ・ビジネスと「名付け」たのが最初であるとされている。(細内2001a) *4

しかしながら、このような地域コミュニティによる事業手法は、我が国において明治時代にすでに存在していた。例えば、長野県野沢温泉の地縁団体法人野沢組や入会地の資源を共有した地域産業もコミュニティ・ビジネスの一種と考えられる。(細内1999b) *5このようにみるとコミュニティ・ビジネスは、我が国にとって、「古くて新しい事業手法」といえるのではないだろうか。

以下に、「コミュニティ・ビジネスという事業手法」(以下コミュニティ・ビジネスとする)について筆者の考えを述べる。

<コミュニティ・ビジネスの現況>

コミュニティ・ビジネスは、様々なメディアに取り上げられ、現在、全国的に国民への認知が高まりつつある。*6 また、自治体の多くで、コミュニティ・ビジネスや類似の事業活動への普及啓発や起業支援を実施している。*7 滋賀県においても平成15年度、16年度に滋賀県コミュニティ・ビジネス創出支援モデル事業が実施され、それらの事業を踏まえて起業ガイドブック*8が整備されている。

コミュニティ・ビジネスは、その定義が曖昧である。*9 従って、当該事業者の数は明らかになっていない。平成16年度に行われた(財)地域活性化センターによる調査*10では、地方公共団体や関係機関のホームページを参照して854団体に対してアンケート調査を行い226団体から解答を得ているが、調査報告書にも抽出方法が適切でないことが記載されている。また、古賀(2004) *11はコミュニティ・

ビジネスの抽出にあたって「産業分類にない、様々な業種・業態を包括した概念であるための断念した」としている。

NPO法人＝コミュニティ・ビジネスではないが、2006年末で2万9千を越えるNPO法人の認証数*12をみれば、数万の事業主体があると推測される。

<コミュニティ・ビジネスの定義>

コミュニティ・ビジネスのとらえ方については、私は、各主体様々でよいと考える。例えば、コミュニティ・ビジネスは、地域の活性化、雇用の創出、女性の社会参加、子育て支援、地域特産品開発など様々な場面で活用されている。細内(2001b) *13は「生活に密着した活動」がコミュニティ・ビジネスのテーマであるとしており、そうすると、個々人の生活における活動や行政サービスの多くがコミュニティ・ビジネスとして展開できる可能性がある。

これらの展開はいずれも、そのとらえ方にかかわらず、「地域を元気にする」ことにつながるという意味で意義があると考えられる。

しかし一方で、「コミュニティ・ビジネス＝地場産業」「コミュニティ・ビジネス＝NPO法人」といった考えを持たれる方もいると聞く。たしかに、その地場産業はコミュニティ・ビジネスという事業手法を展開したかも知れないが、地場産業すべてがコミュニティ・ビジネスであるとは言えない。地場産業の定義も幅が広い。大阪の町工場群がコミュニティ・ビジネスを展開しているかということ、そう考える人は少ないであろう。

また、コミュニティ・ビジネスを実施している団体がNPO法人かもしれないが、NPO法人イコール、コミュニティ・ビジネスの実施組織ではない。株式会社や協同組合での活動も報告されている。*10

曖昧な定義をもつコミュニティ・ビジネスであるが、ここで、コミュニティ・ビジネスを、その本質に着目して、私なりに定義したいと思う。

細内(1999c) *14はコミュニティ・ビジネスの最終的な効用を「コミュニティの自立」としていた。この究極的な効用は否定されるものではないが、そのプロセスに注目すれば、私は、コミュニティ・ビ

ビジネスの本質的効用は、自立までには至らないが、その適用過程において、地域コミュニティを再構築あるいは新しい地域コミュニティを創造することにあると考える。

ここでいう、地域コミュニティとは、互いに顔の見える、会えばあいさつを交わす、困ったときは助け合う、人々がつながりあって構成される集団を言う。コミュニティ・ビジネスとは、その“つながり”を生み出す手法であると私は考える。これはソーシャル・キャピタル^{*15}の創出手法のひとつであるとも言える。

現代の地域コミュニティの形は、自治会や町内会、町会、部落会、区会、区、組、あるいはPTAやサークル、NPOなど様々である。特に、滋賀県では美しい集落景観の中に、地域コミュニティ活動が継承されているところも多いと聞く。一方で、都市部に住む住民にはそういったコミュニティ、すなわち地域における人と人とのつながりが希薄であったり、あるいは、崩壊してしまった状況が見うけられる。例えば、隣の住民の顔さえ知らないマンション居住者が存在することは、都市住民では一般化しつつある。

科学技術の発達、情報化社会の進展で、私たちの暮らしは飛躍的に変化した。家事仕事からの解放、どこにいても可能な、自由な知識探求など、数十年前とは生活スタイルが大きく変わった。

また、社会が成熟していく中で、地方分権、小さな政府・行政への流れが進行しつつある。

そういった時代の変化のなかでも、人として忘れてはならないことは、「人は、人とのつながりのなかで生きる動物である」ということではないだろうか。

つながり方は様々である。地縁、血縁から、企業コミュニティ、友人知人、サークル仲間など、一人を対象としても様々なつながりがある。そういったつながりの中で、コミュニティ・ビジネスは、あたらしい、人間らしい、つながりを創出する役割を担う手法と考えるのである。

<コミュニティ・ビジネス=

人と人のつながりを生み出す手法>

このように整理すると、コミュニティ・ビジネスとは、地域を舞台とした、人間らしい「つながり」を創出する手法である、と整理できる。

利益追求中心のビジネスではない、お金のやりとり以上に買う人、売る人のつながりを感じることができる。そういった「優しい気持ち」にあふれたビジネスを創造する手法である。

もちろん、現実には厳しい。そんな事を言っているだけではビジネスはできない、という方も多いであろう。そういった意見は、その通りで、実際には、ビジネスとして成立させる工夫^{*16}が不可欠である。

また、ここであえて、コミュニティに「地域」と付けたのは、コミュニティ・ビジネスの舞台が地域であるべきだからである。近年、ソーシャル・エンタープライズ（社会的企業）が注目されているが、コミュニティ・ビジネスとの違いは、その事業が、地域に根ざし、地域コミュニティの再生・創造という活動を継続して行っているかという点だと考える。ただし、コミュニティ・ビジネスの進化の形として、一般的な営利事業への展開や、ソーシャル・エンタープライズ（社会的企業）という形も考えられる。そういった展開は、国の経済活力、社会の健全化のためには好影響を与えるものであり、可能であれば多くのコミュニティ・ビジネスが、そのような発展を遂げることを願いたい。

しかしながら、そのような発展を遂げる前に、まず足下から、自らの地域から良好なコミュニティの形成を実践すべきだと考えるのである。

<現代社会におけるコミュニティ・ ビジネスの意義>

人と人との良好なつながりの形成という本質を目的とするのであれば、コミュニティ・ビジネスという言葉に限定的に使用する必要はないであろう。地域に住まう人々の主体的参加を基本とした地域の問題・課題の解決を通じて、人々のコミュニケーション、価値観の共有が図られ、コミュニティ形成の「きっかけ」が創造される。そのような流れの中で、主体自身が、まちづくり活動として、課題解決の継続に対する必要性を認識すれば、自ずと事業性を検討せざるを得ない。

まちづくりとは、そのまちの「文化」を育むことである。文化とは、音楽・芸術などもあるが、日常生活文化を含むもの、と私は考える。そして、文化を育む基本的構成要素は、「場」における「人と人とのつながり」であろう。

現代社会で失われつつある、人間性や人と人とのつながりを如何に再構築するのか。私は、コミュニティ・ビジネスという事業手法の調査研究、創出、実践を通じて探求し、次世代につないでいきたいと思う。

<参考文献・資料>

*1 細内信孝（1999a）『コミュニティ・ビジネス』ぎょうせい、73-75p.

- *2 H R I : 株式会社ヒューマンルネッサンス研究所
- *3 K G K : 株式会社計画技術研究所
- *4 細内信孝 (2001a) 『地域を元気にするコミュニティ・ビジネス』 ぎょうせい、はじめに
- *5 細内信孝 (1999b) 『コミュニティ・ビジネス』 ぎょうせい、144-149p.
- *6 2002.6.3NHK 「広がるコミュニティ・ビジネス」 『クローズアップ現代』 ほか
- *7 全国各地での支援についてはNPO法人コミュニティ・ビジネスサポートセンターのホームページが詳しい <http://www.cb-s.net/shiensaku.htm>
- *8 財団法人滋賀県産業支援プラザ (2005) 「コミュニティ・ビジネス起業ガイドブック」
- *9 金子ほか (2003) 『コミュニティ・ビジネスの時代』 p.23、前出の細内による定義、国や自治体による調査報告における定義などがあるが、共通の定義はされていない。
- *10財団法人地域活性化センター (2005) 「コミュニティ・ビジネスとコミュニティの再生について調査研究報告書」
- *11古賀敦之 (2004) 「コミュニティ・ビジネス地域再生のための新たな事業展開」 北九州市立大学大学院紀要18号、48p.
- *12内閣府国民生活局HP <http://www.npo-homepage.go.jp/>
- *13細内信孝 (2001b) 『地域を元気にするコミュニティ・ビジネス』 ぎょうせい、46p.
- *14細内信孝 (1999c) 『コミュニティ・ビジネス』 ぎょうせい、56p.
- *15ソーシャルキャピタルに関しては、内閣府経済社会総合研究所編 (2005) 「コミュニティ機能再生とソーシャル・キャピタルに関する研究調査報告書」に詳しい
- *16起業に際しての工夫については、細内・鶴飼 (2002) 『3日でマスターできるコミュニティ・ビジネス起業マニュアル』 ぎょうせい を参照されたい。

工業都市における公害問題と地域社会の対応

香川 雄一
環境計画学科
環境社会計画専攻

「環境」への関心と地理学

1970年代初頭に誕生した私は、この時期が環境問題において大きな転機となっていたことを、後に知った。「公害国会」における各種法制度の制定、環境庁の発足、国連人間環境会議というように、「環境」への関心が高まっていく時期であった。もちろん幼少の折にはそのような時代情勢を知る由もなく、映画やテレビで環境問題を素材とした作品を目にしても、それほど感銘を受けた記憶はない。むしろ自分にとっての関心は、広い意味での「環境」、つまり場所による環境の違いや風景や文化を形成する身の回りの環境にあった。

少年時代に数度の転居を経験し、旅行や地図が好きだった私は、地理という科目に興味を持った。当時は就職への影響など考えもせずに、地元以外の地理学教室のある大学に進学した。はじめは漠然とした教科としての地理をイメージしていたのだが、研究室に所属するようになって大きな衝撃を受けた。今となっては、当然視できるようになった問題意識や研究方法の議論にまったくついていけなかったのである。しかも地理学は伝統的な調査手法と革新的な概念構築との間で大きく揺らいでいた。

卒業論文の着手に当たって、テーマを導き出したのは社会問題に地域社会がどう対応しているのか調査してみたいという問題意識であった。指導教官の助言も受け、原子力発電所が集中する福井県の若狭地方を調べることにした。滋賀県のすぐ近くである。

だが、問題が大きすぎたこともあり、満足のいく調査はできなかった。特に反省点として残ったのは、テーマ性を意識し過ぎたため、実態調査がおろそかになっていたことである。このことは大学院に進学してから卒業論文への痛烈な批判を受けて、改めて地理学の研究手法を習得し直すことにつながった。また調査対象に課題設定から向き合うという意味で、「環境問題」に取り組むことを決心した。

フィールドワークへの取り組み

学部時代に地理学の専門教育を受けていたとはいえ、フィールドワークの経験という意味では非常に幼稚な技術しか習得できていなかった。地理学は自然地理学と人文地理学に分かれており、環境問題に対してもそれなりに研究蓄積がある。しかしながら

自分が調査していたことは、実は既存データの利用や資料に書いてあることの要約だけではないかという疑問が生じた。オリジナルな客観データの収集にどうやって取り組みればよいのか悩んだ末に、環境問題の歴史的变化を地域社会に視点を据えて眺めてみることにした。これが修士論文の研究テーマである。

地図や統計データの収集はもちろんのこと、古い新聞をめくり、文書館で資料をあさるということも経験した。また歴史的なこととはいえ、古い時代のことを知る人たちに話を聞きに行き、資料と照らし合わせながら事実を確認した。環境問題の調査と言ってもそれは今の問題意識であって、もちろん、水や空気が汚れば生活に影響も出てくるが、生業や健康への被害が環境の悪化よりも高く意識されているのがよくわかった。このとき調べていたのが、現在に至るまで自分の研究フィールドとなる神奈川県川崎市の臨海部であった。

川崎の地域環境問題を事例として

川崎と言うと高度経済成長期の公害問題や埋立地の石油化学コンビナートがよくイメージされる。公害裁判やエコタウンとして注目されるのも同じく臨海部である。ここで環境問題がどのように発生してきたのかを知りたかったので、公害問題の端緒に着目した。川崎の工業化は、東京と横浜における経済活動の波及による工場の立地によって始まった。

日本の大都市周辺における臨海部は現在、ほとんどが工場地帯になっている。川崎市も例外ではなく、海水浴はおろか海辺に近づくことも容易ではない。昔は東京湾に面した遠浅の砂浜が、明治時代末期の埋立に始まり大正から昭和初期にかけて臨海工業地帯へと変貌したのである。

ほぼ時を同じくして大気汚染と水質汚濁の公害問題が発生していた。原因は工場からの排出物である。歴史資料からその場所を特定できたので、工場周辺の住民や地域組織がどのように対応したのかを資料によって明らかにした。観測データはほとんどなく、汚染と被害の因果関係も定かに示されていない時代のことである。それでも地域の有力者や産業組合、町内会レベルの住民組織が工場に対して異議を申し立てている。そこに環境問題への地域社会による対応のメカニズムを見出そうとしたのである。

100年ほど前の話で、しかも激しい都市化を経験した地域であったが、ある程度の実事は明らかになった。それでも調査方法が果たして妥当だったのかという不安を抱え、過去の環境問題を研究する意義について自信をもてなかった。その頃、依拠していた研究が米国の地理学者による社会運動研究への問題提起であった。

なぜ人びとは運動に参加するのか

学部の頃から社会学の社会運動研究は参考にしていたつもりである。それでもやはり地理学的な研究方法へのこだわりはあった。偶然、大学院の外書講読の授業で見つけた論文が、自分の研究を支えてくれることになる。そこでの問題意識は以下のようなものだった。

合理的な個人は本来、要望を受け入れてもらうために集合行為としての社会運動には参加しない。なぜなら参加の如何を問わず要求が実現するのなら、楽な方、つまり参加しない方を選ぶからである。それでも集合行為に参加するためには何かの理由がある。それを見定めていかななくてはいけない。社会運動への参加を説明するために政治経済的アプローチや歴史的アプローチが試みられた。地理学者はそれらに対して場所の特徴やコミュニティの役割に注目すべきであるとした。

川崎は東京湾と多摩川に沿って工場が立地した。京浜臨海工業地帯の中核として空襲による戦災はあったにせよ、製造業において日本で有数の生産規模を誇っている。一方で工場労働者の流入と東京、横浜の通勤圏ということから人口も爆発的に増加した。こうした工業都市としての特徴のほかに、臨海部の農漁村が都市化、工業化を経験したがゆえの在来産業や地付住民の存在もある。それらが公害反対運動の形成に大きくかかわっていたのであった。

博士課程に進学してからは、方法論を学ぶとともに高度経済成長期を見据えて川崎の調査を継続しつつ、長期休暇の際には、別の地方における公害反対運動も調べてみることにした。そこで社会運動への参加の経緯を比較してみたのである。

場所と時代を変えて確かめてみる

公害反対運動における日本全国の動向を文献で調べながら、川崎以外の対象地域を倉敷市（水島）と和歌山市に選定した。選択理由に個人的な調査の都合（宿泊地、交通手段、協力者）があったとはいえ、川崎に対して地方都市であることや工場地帯の形成過程から、比較対象として適切であったと思う。

高度経済成長期の公害反対運動が調査の中心とな

ったため、戦前の川崎に比べて資料は探しやすかった。しかも限られた住民に対してではあるが、実体験の聞き取りも可能であった。反対運動の展開に加えて、議会資料も分析対象とした。記録が残っていることで、公害問題への関心の程度やいかなる属性の議員が積極的にかかわっているのかを検証できた。川崎とは規模や時代背景が異なるものの、環境問題への地域社会による対応という側面では相似性を見出すことができた。

次の作業は川崎の過去をさらに遡ることと、現在に至るまでの公害反対運動の展開を跡づけていくことであった。公害問題が発生していない時期でも調査が必要なのは、場所の特徴やコミュニティ運営の中心人物を調べることができるからである。高度経済成長期の公害反対運動の分析では他都市で用いた議事録の分析に加えて、政治過程に影響する選挙の投票結果を集計してみた。いわゆる公害反対運動の主体イメージがどのように形成されてきたかを確認することもできた。

こうして調査をまとめつつ、2001年3月に学位を取得した。製本された冊子を手にとってみると、それなりの達成感があったが、研究としてはまだまだ途上であることを思い知らされた。フィールドワークで抱えた疑問が目の前に立ちふさがっていた。他分野の研究との接合が、学位論文に加えなかつたいくつかの調査のまとめ方を模索してみた。

学位取得後の課題と作業

政治地理の枠組みで研究成果をまとめるとともに、最初に取り組んでみたいと思ったのは、環境問題発生地における社会運動に参加しなかった住民の調査である。これは共同研究で川崎臨海部の漁業者に注目した。研究手法としては収集データをGISによって表現する技術を習得した。関心が近い研究組織に参加してアジアの大都市における環境問題に取り組むつつ、環境問題を景観の開発や保全といった視点からも解釈しようとしている。環境問題をテーマにしていることで、研究の幅は徐々に広がった。それを教育にどう結びつけていくのかも、授業では意識するようにしている。

「滋賀県立大学の環境学」への期待

着任地である滋賀県立大学環境科学部は職場としても居住地としても環境問題の研究に最適である。環境学諸分野の研究者や意欲を持つ学生・院生との議論を楽しみにしている。目の前に広がる琵琶湖と滋賀県の地域社会は魅力的なフィールドである。私の環境学は今、始まったに過ぎないのかもしれない。

私の環境学

高柳 英明
環境計画学科
環境・建築デザイン専攻

2006年度10月より現職に本学環境計画学科に着任いたしました。私の環境学を記す前に、これまで関わった設計や研究についてお伝えさせてください。これまでの研究では専ら人間の行動をもとに建築のデザインを考えることを専門にしておりました。大学院を修了後、初めて就いた職では『人を集める』のための建築を作っていました。美術館や駅ビル、企業PR館のプロデュースがその主な職務内容でしたが、その後人を集めても快適な人間-空間系のデザインに目覚め、その道の研究に没頭し、人の行動モデルを用いた可視化シミュレーションによるメタデザイン手法をテーマに学位を収めました。前職場の千葉大学では、主に大規模駅の改築計画、デパートの売場配置計画の立案を通じ、混雑しても方向を見失わない、あるいは人混みが楽しめるといった空間作りに寄与してきました。

と、ここまで書くと、本学の立地する琵琶湖周辺での活躍の場がないもののように感じられますし、実際には自然環境を対象とした研究実績も未だ不十分ではありますが、これから私が本学で立ち上げる研究室の大きなテーマをのべ、本年度の『私の環境学』にかえさせていただきたく存じます。

昨年、ラマダンの時期にチュニジアを訪れました。首都チュニスより北へ車で5時間弱、『タクルーナ』という集落を視察するためです。観光客はおろか、都市部に住む地元の人間ですら訪れないこの地は、畑の広がる原野の高台に牙城のごとく看取されますが、あまりに力強い自然にしがみつくように存在しています。いくつかの住居が中庭を囲み寄り添う型式は、チュニス等の都市部で見られるメディナの住居群のそれに似ていますが、強い陽射しによるふく射熱と乾いた風から身を守るべく、壁は通常の二倍の厚さ、床面は晒し土間にて、居室内に適切な湿り気と温度を与えています。土地柄、別段珍しいものではありませんが、この集落の佇まいとそこに生活する人々を観察するにつれ、圧倒的な強さをもつ環境を前にする建築のありかたに気づかされます。たかだか60名足らずの、集団様式の発展し得ない小さな建築群であっても、集落の方向は風と陽光の向きを読んで作られています。従って住居から一步出て、通りに強い風は吹きません。その効果には驚き

を禁じ得ませんでした。



タクルーナ全景

普段より建築計画研究の傍ら、実践の設計に携わっている身の上から考えると、建築を造って建てることは環境の消費行動であると感じます。それは仕方のないことですが、特に日本ではどこに行っても都市ですから、その場に欲しい建築を、自然環境とは関係を持たず求め造ろうとします。中には前面緑化をして天然冷却と街に潤いを…とお考えの環境意識の高い向きもおおいですが、斜線制限など建築を造る際の法規ですら、都市の成り立ちからくる特例与件によってかたちを決めようとしているため、なかなか意識通りの建築にすることが難しいように感じます。

本学の立地する琵琶湖は、地質学で呼ばれるテクトニック・レイクであり、周囲からの堆積泥と湖底の沈み込みが同時に進行する世界でも有数の古代湖であると聞き知っています。600万年の歴史を有する固有の気象条件からくる環境の特異性は、素人目に見ても壮大なスケールとロマンを感じますし、私の好きな風景写真家は、この琵琶湖の風がもたらす様々な自然現象を捉えて見せてくれます。夏は蜃気楼が見えると言いますし、湖沼特有の湖陸風や、予測不能なサーマルブリーズも吹くとされています。このあまりにも味わい深く、なまめかしい現象を深く観察・解析し、都市の特例与件ではなく、局地気候、周辺の風景といった環境固有の特例与件として

明らかにし、建築や都市環境の造り方に活かす手だてを考えたいと思います。建築生産における環境対応という、アノニマスな立地を対象とした、とすれば説教臭いテーマになりがちですが、その場所と環境の良さを活かす『固有な環境建築モデル』の事例を明示することこそ、建築の消費文化にダイレクトに訴えかける環境学となりうるのではいでしょうか。前述のタクルーナに比較してはあまりに感傷的ではありますが、眺望や風景、気候や風を深く理解し、それらを味わい尽くす本能的な術を忘れてしまった現代建築に、技術的な知識として今一度想起させることが急務であり、琵琶湖は絶好の研究対象であると考えます。

具体的な手法は模索中ですが、ある種の実験住宅を琵琶湖畔に構築し、広域の日射・気温変動、風向・気流の循環等のデータに併せて、住宅のかたちを変化させ、室内温度・湿度、風の抜け等を計測し、快適空間モデルの推定を行うことを考えています。このモデルを元に、住宅の形状や向き、または開口

位置や大きさ、開口条件等、建築デザインに直結する意匠上の問題を解決する設計支援システムを構築し、立地固有の住宅のプロトタイプを導きたいと考えます。私のこれまでの研究活動で培った人間行動の解析モデル化では、群衆の挙動を定点観測したデータを用い、その動きを単純な物理・工学モデルとして理想化し、建築空間要素との挙動上の相互作用のリアルタイム解析を行っており、同種の技術において、環境条件と設計デザイン条件の連関を瞬時に解析し、設計CAD画面上で逐次確認しながらその効果を発揮する最適案を導き出すことができると考えます。また同様なことは公共性を帯びた集客施設等にも適用でき、これにより今までの琵琶湖岸にはない、親水施設の考案と環境学の啓蒙にも寄与したいと思います。現時点では未だ全て準備段階ですので、いささか素案じみておりますが、建築消費にダイレクトに訴えかける環境学は、それを設計する者の意識を改革する手法を提示することにあると思われます。今後の本学での研究活動に宜しくご期待下さい。



これまでの研究の概要と今後の展望

鈴木 一 実
生物資源管理学科

私は京都大学大学院農学研究科、農業メーカー（石原産業株式会社）の研究所および（財）岩手生物工学研究センターを経て、昨年4月に滋賀県立大学環境科学部に赴任してきました。今まで一貫して植物の病気を取り扱う、植物病理学や作物保護学の方針で研究を進めてきています。ここではこれまでの研究の概要を簡単に紹介するとともに、今後の研究の展望や大学での教育などについて普段考えていることを述べてみたいと思います。

私のこれまでの研究の概要は、次のとおりです。

1. 京都大学大学院在籍時の研究

（昭和53年4月～昭和57年3月）

多くの種類の作物に感染する炭そ病菌は胞子の発芽管の先端に宿主植物への侵入器官である付着器を形成します。ウリ類炭そ病菌を材料として用い、植物病原糸状菌の病原性発現機構の解明を目的として、付着器侵入に必須な種々の要因を解析しました。付着器侵入に宿主細胞壁の化学的分解や付着器のメラニン化が重要であることを明らかにするとともに、その後のメラニン合成阻害薬剤（化学合成農薬）の開発や糸状菌の病原性遺伝子の解析につながる基礎的で重要な知見を明らかにしました。

2. 石原産業株式会社に在職時の研究

（昭和57年4月～平成5年2月）

新規な農業用殺菌剤の選抜および開発に従事し、新規殺菌剤フルアジナムの登録取得や実用化にたずさわるとともに、本薬剤の病害防除作用機構に関して多くの知見を明らかにしました。本薬剤は幅広い病害防除スペクトラムを有する保護殺菌剤として、現在でも日本国内のみならず国外でも多くの場面で使用されています。

3. 財団法人岩手生物工学研究センターでの研究

（平成5年3月～平成18年3月）

1) 病害の検出・診断技術の開発および病害の感染・発病機構の解析

病害の検出・診断技術は病害の原因を正確に特定し、病害防除を適切に実施する上でたいへん重要です。ウイルス病や細菌病の検出技術（抗体を用いた検出技術や遺伝子診断技術）の開発に取り

組み、実用化を踏まえて岩手県の試験研究機関に数多くの技術成果を提示しました。また、得られた検出・診断技術を用いて、岩手県の重要な花き品目であるリンドウのウイルス病の感染経路の解明に取り組みました。一方、難防除病害であるレタス腐敗病やトマト青枯病などの細菌病については病原菌の挙動と病徴発現の解析を通して、感染・発病機構に関する基礎的な知見を明らかにしました。

2) カプシウム属植物のウイルス抵抗性機構の解析

岩手県では夏秋取りのピーマンの栽培がたいへんさかんです。ピーマンやトウガラシが含まれるナス科のカプシウム属植物にはトウガラシマイルドモットルウイルス（PMMoV）などのトバモウイルスに対する4種類のL抵抗性遺伝子（ L^1 ～ L^4 ）が存在し、それぞれ異なる病原型のトバモウイルスを認識して過敏反応を伴う抵抗性反応を誘導することが知られています。そこで、トバモウイルスの各病原型を識別する遺伝子診断技術の開発や宿主植物の抵抗性機構の解析に取り組みあわせて抵抗性育種の効率化をはかる上で重要と思われるウイルス抵抗性に連鎖するDNAマーカーや抵抗性遺伝子型識別マーカーの探索を行いました。また、L抵抗性遺伝子とは連鎖しない新規なトバモウイルス抵抗性遺伝子を同定しました。さらに、キュウリモザイクウイルス（CMV）については育種に利用されている抵抗性遺伝子源がほとんど知られていないことから、カプシウム属植物の多くの系統や素材を集め、CMVの接種による抵抗性素材の選抜を実施しました。その結果、二つのタイプの新規なCMV抵抗性素材を見出し、その抵抗性機構を解析しました。

今後の研究展望については以下のように考えています。

1. カプシウム属植物のウイルス抵抗性機構の解析

すでに得られているL抵抗性遺伝子に連鎖するDNAマーカーをもとに、L抵抗性遺伝子のより詳細なマッピングを実施するとともに、新しく同定したL遺伝子とは連鎖しない抵抗性遺伝子によるウイルス抵抗性機構についてもさらに解析を進めたいと考えています。

CMVに対する抵抗性素材の探索も重要な課題と位置づけ、すでに得られている新規なCMV抵抗性素材のウイルス抵抗性機構を明らかにし、遺伝解析を実施することにより、抵抗性育種への応用の可能性を探りたいと思っています。

2. 新規なウイルス抵抗性、病害抵抗性素材の探索

有効な防除薬剤が存在しないウイルス病の適切な防除を考える上で、宿主植物のウイルス抵抗性遺伝子の利用が重要であると考えられます。ところが、抵抗性遺伝子によるウイルス抵抗性はウイルスの変異により打破される例も知られています。実際にPMMoVではウイルスの外被タンパク質遺伝子の変異により、L遺伝子によるウイルス抵抗性が打破されています。そこで、トウガラシ類の栽培起源地（中南米）などで収集されたカブシクム属植物の遺伝子源の中から、新規なウイルス抵抗性素材を選抜し、抵抗性の遺伝様式、育種素材としての利用の可能性などについて解析してみたいと考えています。さらに、ウイルス病以外の病害抵抗性、すなわち糸状菌病、細菌病に対する抵抗性素材の検索についても取り組んでみたいと考えているところです。

3. 病原糸状菌の侵入・発病機構の解析

各種作物に感染する炭そ病菌、とくにウリ類炭そ病菌や滋賀県の重要な野菜である各種のアブラナ科作物に感染する炭そ病菌を材料として、付着器侵入や感染・発病機構の解析を実施することにより、病害防除につながる新しい知見を得たいと考えています。新しい防除薬剤の開発につながる新しい現象とか農業に頼らない新しい病害防除技術の開発が期待されます。

4. 滋賀県内の生産現場での重要な病害の調査

滋賀県では栽培面積こそそれほど多くはないが、環境問題に配慮した農業生産や関西の大都市のニーズに対応した都市近郊型作物栽培がさかんです。作物保護を考える上では病害の総合防除（薬剤防除、抵抗性育種、耕種防除、生物的防除）を適切に実施することが重要であり、その大前提となる病害の正確な検出・診断や薬剤耐性菌の出現、新病害の発生などに留意して実際の生産現場で問題になっている病害をみてみたいと考えています。その中で滋賀県という地域に根ざした新しい研究テーマをみつけることも期待されます。

大学における学生の教育や研究連携などについて普段考えていることを最後に取り上げます。

1. 農業現場をみることの重要性

植物病理学や作物保護学の分野にも分子生物学、遺伝子工学などバイオテクノロジーの波が押し寄せていますが、遺伝子がわかれば我々が親しんでいる生命現象をすべて解き明かせるというものでもありません。初歩の学生にとって最も大切なことは、生物の世界で作物と病原体との間で繰り広げられる様々な興味深い現象を自らの目で見分ける力を養うことだと思います。植物病理学や作物保護学は農業現場でおこる病気の被害を少なくする必要性から発達してきた学問であり、学生たちには実際の田や畑で何が起きているか観察することを教えたいと考えています。農業現場での病害発生の実態をまず正しくみてもらい、さらに進んで宿主～病原体の相互作用、特異性の成立を魅力ある生物現象として把握して欲しいものです。

2. 地域連携、ネットワークづくりの重要性

大学の研究は地域に根ざした研究を推進し、また外部から競争的資金を取ってこなければ十分な研究活動ができない状況になってきています。専門分野が異なる研究者が結集して総合的・組織的な研究に取り組むことや、大きなテーマによってはそれぞれの専門家を集めてプロジェクト研究に挑戦することが求められています。さらに、公的試験研究機関や民間企業の研究者と大学の研究者間を結びつけることも大きな意義があると思われます。お互いの知的財産を基盤にして研究開発のシーズを出しあい、地域に隠れているニーズを掘り起こし、それらの情報を共有化し共同利用することはまさに滋賀県という地域に根ざした研究テーマの掘り起こしであり、大きく地域貢献や人材育成につながるものと思われます。

3. 環境科学部生物資源管理学科における自分の研究の位置づけ

自分の専門分野（植物病理学、作物保護学）を環境科学や生物資源管理学科の中でどう位置づけていくか考えていきたいと思っています。生物資源の生産を最適な条件で行ない環境への影響をより少なくするには、生物資源そのものである植物（作物）と病原体を熟知し、その生産の場をとりまく環境を適切に管理する技術とシステムが必要です。植物病理学的な観点からすれば環境は植物、病原体だけでなく植物と病原体の相互作用にも影響を及ぼし、さらに病原体は環境ストレスそのものであるとも云えます。

病害を防除するいろいろな手段のうち、化学農薬は環境に付加を与えてきているのも事実であり、化学農薬だけに頼らない病害防除すなわち総合的病害管理が重要であるわけです。

したがって、当面は病原体の病原性発現機構の解析にもとづく新しい病害防除技術の開発や病害抵抗性素材の探索・解析にもとづく新規な病害抵抗性育種素材の開発をめざしたいと考えています。病原体の病原性発現の研究は病原体の作物に病気を引き起こす能力そのものをコントロールする理想的な（環境に配慮した）病害防除技術、防除薬剤などの開発につながる新しい新知見が得られることが期待できます。また、植物の病害抵抗性発現の研究は新規な抵抗性遺伝子源、生物資源の探索、その育種素材としての有効利用につながるものと考えています。

低投入持続型農業のためのイネ育種

清水 顕 史
生物資源管理学科

私は大学時代、農学部農学科の育種学研究室というところで勉強してきました。今回、「私の環境学」という機会をいただきましたので、これまで学び研究してきたことと環境問題への応用について述べ、今後の研究展望についても記してみたいと思います。

まず最初に、育種(breeding)というのは、品種改良ともいいますが、「生物を、人間にとって都合が良いように遺伝的に改変すること」と定義されている農業技術の一つをいいます。遺伝的な改変と大きく、今問題になっている作物への除草剤耐性遺伝子などの導入が頭に浮かぶかもしれませんが、しかし、改良法の一つとしての遺伝子導入はここ10年の新しい技術で、それよりずっと以前から人類は交配や選抜という生物の遺伝的改変を行ってきました。この従来法による育種は、私たちが無意識の内に”知っている” “遺伝という現象に根ざした技術です。例えば私たちは、犬からは犬が生まれチワワという犬種からはチワワが生まれることを強く期待します。チワワの子犬の容姿が犬種の特徴と大きく異なれば別の犬種との雑種の子だと思ってしまうでしょう。よい成績を残した競争馬は次の世代の親馬として高額で取引されるそうです。速く走る馬の子は速く走るという考えに、私たちは違和感を持ちません。人間の場合でも、親子や血縁関係者の容姿や性質は似るはずだと思っていますから、「他人の空似」とか「鷹が鷹を産む」という言い回しが成り立つのです。遺伝や進化ということが自然科学の対象となり様々な研究がなされるようになるずっと以前から、私たちはこの親から子への性質(形質)の継承を”知って”いました。そして実際に、野生の生物種の中から自分たちに都合がよいものを選び、保護し、近交交配(または自殖交配)を進めることで栽培植物や家畜への品種改良、原始的な育種を行ってきました。遺伝学の研究が始まるずっと前の、恐らく有史以前から行われていたであろう育種技術は、農耕による安定的な食料供給を可能にし、人類の繁栄と文明の発展に大いに寄与したことでしょう。

現代の育種では、生物の持つ遺伝の仕組みをより意識的に利用し効率的な品種育成を行うための研究が進められています。遺伝によって子孫に伝わる情報は遺伝子という単位に分けられ、そしてその実体

はDNA(デオキシリボ核酸)という生体高分子であることが解明されています。遺伝子の情報は生物の形質を決める設計図そのものなのだという認識が得られたことで、子は親に似るという現象にも科学的に明解な説明を与えられるようになりました。目が黒くなるという形質は目を黒くする遺伝子によってもたらされ、目が黒い親から目を黒くする遺伝子が伝わることによって子の目も黒くなる、という説明です。遺伝子の総体をゲノムという言葉で表しますが、ここ最近のゲノム研究は飛躍的な発展をしました。ゲノム研究から得られた様々な情報や科学技術を援用することで、交配や選抜という従来法による育種は、より効率的で計画的な手法として再利用することができるようになりました。

大学の育種学研究室では、イネを材料として研究を行ってきました。イネは世界人口の半分以上を支える最重要穀物で日本人にとっても馴染みの深いものですが、2倍体の自殖性植物であるという遺伝育種学の研究に適した性質も持っていました。研究室分属時(1995年)の研究テーマは、「イネの鉄過剰害耐性に関する遺伝分析」というものでした。

鉄過剰害というのは、水田のような湛水土壤に特有の栄養障害(=栄養ストレス)の一つで、過剰の鉄を吸収したイネは葉先から褐色の斑点ができ(bronzingという)、更に症状が悪化すると葉身全体が褐変しやがて植物体全体が枯死するなど収量減少の要因になります。日本の稲作で問題になることは少ないですが、東南アジア・アフリカ・南アメリカなどの熱帯・亜熱帯地域の中の広範な面積で起こる栄養ストレスであるため、客土や土壤の改良による問題解決は経済的にも物理的にも困難です。この栄養ストレスに耐性を持つイネを育種することができれば、肥料や土壤改良剤などの投入資源の少ない(つまり低投入型)の持続可能な解決策が実現できるはずです。そのため鉄過剰害耐性に関する遺伝解析をはじめることになりました。この研究テーマは、当時の指導教授である池橋宏先生に、私の熱帯地域への農業貢献に対する希望を汲んで頂いた結果立ち上がったものでした。

遺伝解析とは、遺伝マーカーと連鎖を利用して農業上の様々な有用形質を解析する手法をいいます。20世紀初頭には、遺伝子には染色体上の位置(遺伝

子座)があり、遺伝子座の相対的な位置関係は連鎖解析によって連鎖地図にまとめられることが解明されていきました。遺伝マーカーはこの連鎖地図の作成に便利な指標で、特にDNA配列の多型に基づくDNAマーカーが普及することによって全ての遺伝情報を網羅する連鎖地図の作成が可能になりました。農業上の有用形質の遺伝子は連鎖地図のどの位置にあるかが判明することで、育種への応用が容易で確実に行えるようになります。DNAマーカーの技術革新が進み連鎖地図の利便性が高まることによって、遺伝解析は、有用形質を地図に乗せる作業(マッピングという)へと帰結することができるようになりました。

ストレス耐性の遺伝解析には、耐性形質の評価も重要な仕事でした。まず鉄過剰害ストレスを再現するために、大学の圃場に面積20m²×深さ40cm程度の穴を掘ってシートを張った簡易プールを作成し、山からとってきた土(酸化鉄を多く含む花崗岩土壌)を詰めたポットを沈めて還元状態にし過剰の二価鉄によるストレス処理を試みました(図1)。



図1 鉄過剰害ストレス処理用ポット試験の様子

この方法で確かにポット中の二価鉄濃度は上昇し、供試したイネは鉄過剰害ストレス特有の症状を見せました。しかし、土壌バクテリアの鉄還元作用に頼って過剰の鉄が生成されるため、気温など環境要因によりストレス強度が変動すること、鉄濃度のポット間差も大きく均一なストレス処理を行うことができないなど問題点も判明しました。

修士に進学してからは、水耕栽培による鉄過剰害のスクリーニングを行いました。1996年から始まった日本の外務省と国際イネ研究所(IRRI)とのシャトルリサーチプロジェクト(第3期)に参加し、故D.Senadhira先生の下で鉄過剰害の研究を続けました。再現性が高く効率のよいスクリーニング法を確立するための工夫を試み、分離集団を評価してQTL解析を行いました。

博士課程へ進学し研究を続けた結果、過剰害に対する耐性や鉄の過剰吸収に関する遺伝子座が検出でき(図2)、最終的には投稿論文としても発表しました。しかし、鉄の過剰害は、イネが持つ根の過剰鉄排除能と吸収された過剰鉄に対する耐性が互いに関係する非常に複雑な形質であることも分かり、耐性遺伝子の探求は頓挫してしまいました。その代わりに、研究の過程で発見したリン欠乏ストレスに应答する形質やホウ酸過剰に対する耐性遺伝子の研究は、その後も続ける機会を得、成果を上げつつあるところです。

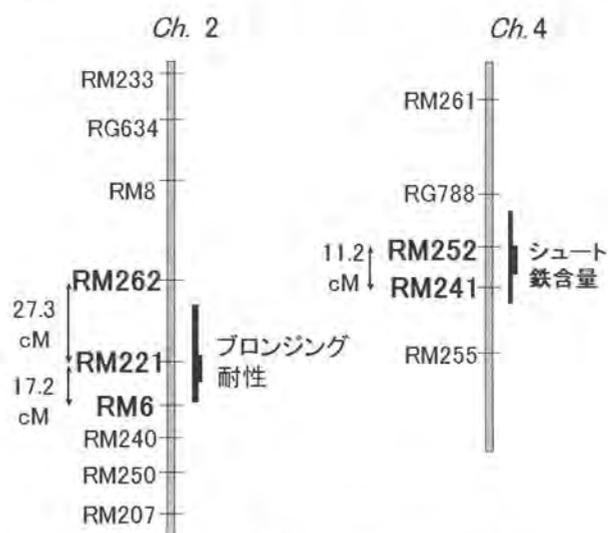


図2 イネの鉄過剰害ストレス耐性のQTL

90年代後半はイネの育種学研究の大きな変革期でもありました。イネはその他の重要な穀物をも含むイネ科グループの中で最もゲノムサイズが小さく、コムギやトウモロコシなどのゲノム研究を進める上でも都合のよい便利なモデル作物であるとの認識が広がっていきました。1997年にイネ塩基配列の完全解読のための国際プロジェクトが設立されると、それまで日本や他のアジア諸国を中心に行われてきたイネの育種研究が世界中で注目され研究されるようになりました。DNAマーカーの利用やQTL解析を通じてゲノム研究に興味を持っていた私は、一度栄養ストレスの研究から離れ、(独)農業生物資源研究所の川崎信二博士の下でゲノム解析の研究を始めました。そこで、生物の高密度連鎖地図作成法、物理地図作成の研究にたずさわって、コンピュータを用いた生物研究も勉強しました。

再び栄養ストレスの研究に戻ったのは平成15年度の日本大学COEプロジェクトの特別研究員としてでした。日大では学生の頃に手を出していたリン欠乏ストレス応答形質の研究を進め、その遺伝子を解明するための研究は現在も続いています。

ストレス耐性品種を育成し、低投入持続型農業を実現するという10年前の希望は、未だ果たせていません。しかし、この間に蓄積したゲノム情報や分子生物学的ツールなど、人間にとってより都合のよい育種を実現するための道具が揃いつつあります。今、携わっている研究を発展させリン利用効率の高いイネを育成できれば、環境を汚染しにくい低投入持続型農業の実現に近づくでしょう。ゲノム情報を利用したDNAマーカー選抜による交配育種は、遺伝資源の中の遺伝子情報を有効利用する新しい育種法であり、生態系への不自然な攪乱の恐れがない遺伝的改良法です。生物遺伝資源側からの環境学への貢献のため、これからも研究を続け成果を出したいと思えます。

学位論文の概要

イネおよびヨシの高親和性硝酸輸送システムに関わる 遺伝子の構造と発現

荒木 良 一
環境動態学専攻

一般的に、限られた窒素源を効率的に利用し高い生産性を示す植物が重要であると考えられる。それは、限りある田畑に投入されている肥料も限りある資源の一部であるためである。そのため、植物の窒素同化能力は大きな意味での環境科学とも密接に関わっている。

本研究では植物の生育に重要な窒素源のひとつである硝酸と硝酸同化の第1段階であるイネ科植物の根の表皮細胞における硝酸吸収メカニズムに注目し、イネ(*Oryza sativa*)とヨシ(*Phragmites australis*)の硝酸吸収メカニズムの解析を植物生理学および分子生物学レベルで行なった。本博士論文は4章から構成されており、概要は以下の通りである。

第1章では硝酸濃度に依存して働く低親和性輸送システムおよび高親和性輸送システムを支配する遺伝子NRT1およびNRT2の現在までの研究の流れについて概説した。また、近年明らかにされつつあるNRT2の機能活性を制御すると考えられるNAR2についてもふれ、本研究で注目すべき部分を明らかにした。

第2章ではイネのゲノムデータベースからイネのNRT2およびNAR2(それぞれOsNRT2およびOsNAR2)を単離し、それらの配列から推測される4つのOsNRT2(OsNRT2.1~OsNRT2.4)および2つのOsNAR2(OsNAR2.1とOsNAR2.2)の基礎的データを*in silico*解析により取得した。その結果、OsNRT2.1とOsNRT2.2はORFの配列が同一であるが、5'-および3'-UTRが異なる遺伝子であることを明らかにした。さらに、各々の遺伝子の5'-UTRにおいて転写制御機構に関わるTATAボックスあるいはGATAモチーフの配置の違いを明らかにし、それら遺伝子間の転写制御の違いを予測した。また、さまざまな生物種のNRT2のアミノ酸配列を元にして系統樹を作成した結果、OsNRT2sが単子葉植物のNRT2グループに含まれるものと、シロイヌナズナのAtNRT2.7が含まれる単純に進化系統的に分類できないグループに含まれた。このようなOsNRT2ファミリーの構成は、すでにシロイヌナズナで報告されていたものと同様であった(図1)。

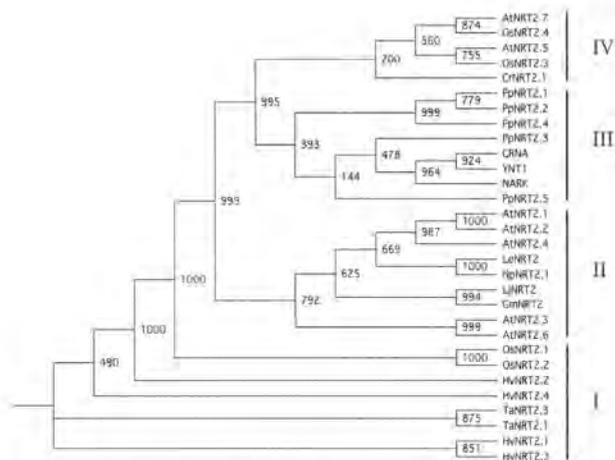


図1. 生物のNRT2の系統樹。NRT2sの推定アミノ酸配列をClustalWとTree Viewを用いて系統樹解析を行った。系統樹上のそれぞれ数字はその分岐の確からしさを表しており、1000が最も確からしい(bootstrap = 1000 replicates)。Iは単子葉植物、IIは双子葉植物、IIIはコケや酵母を含む下等生物、IVは上記のように進化系統的に分かれなかったそれぞれのNRT2のグループを示す。

第3章では、前章で抽出・同定した4つのOsNRT2と2つのOsNAR2の機能を明らかにするため、硝酸誘導時における硝酸吸収とそれらの遺伝子の発現パターンを、硝酸処理前に窒素飢餓前処理またはアンモニア前処理(それぞれ積極的誘導条件または抑制的誘導条件)を行なった幼植物体を用いて経時的に解析した(図2と図3)。積極的誘導条件では、OsNRT2.1、OsNRT2.2、OsNRT2.4とOsNAR2.1

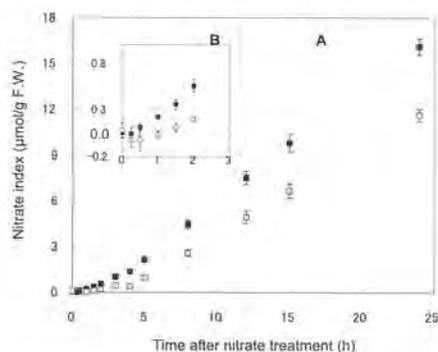


図2. 経時的な硝酸吸収量の増加(AとB)。幼植物体を500 μM (NH₄)₂SO₄で前処理を行なった処理区(□)と行っていない処理区(■)を設け、その後200 μM KNO₃溶液で24時間処理を行ない経時的に硝酸吸収量を測定した。Aは硝酸処理後24時間の経時的な増加を示し、Bは0から2時間の増加を示している。それぞれ6反復行なった。

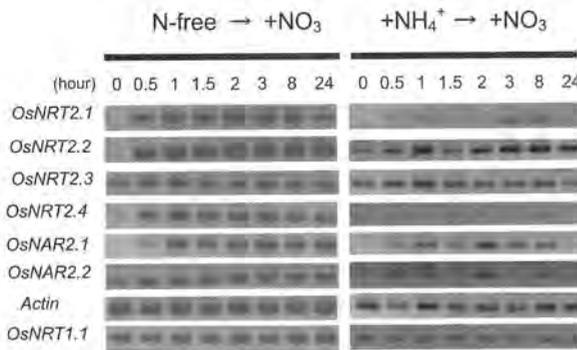


図3. 硝酸誘導処理直後からの根におけるOsNRT2sとOsNAR2sの発現パターン。処理区は図2と同様に設定し、硝酸誘導処理後の任意の時間で発現解析を行なった。Actinは内部標準遺伝子。

の発現および硝酸吸収は硝酸処理後ほぼ同じ時間から誘導され、上記遺伝子の硝酸吸収への関与が示唆された。しかし、抑制的誘導条件の幼植物体では、OsNRT2.1およびOsNAR2.1の発現と硝酸吸収は遅れて誘導され、OsNRT2.2は硝酸処理開始前から発現していた。異なる二つの前処理条件でもOsNRT2.1およびOsNAR2.1は硝酸吸収とともに誘導されていたので、両遺伝子が根における硝酸吸収に重要な役割を果たしている結論した。

また、積極的誘導条件における幼植物体のOsNRT2.1およびOsNRT2.2の発現量は、抑制的誘導条件時と比較して劇的に増加していた。しかし、それぞれの同時刻のOsNAR2.1の発現量は上記両遺伝子とは異なり、両前処理区間で劇的な発現量の差異が認められなかった。一方、積極的誘導条件または抑制的誘導条件時の硝酸吸収量の増加速度には大差がなく、NRT2の発現量と根における硝酸吸収の活性には正の相関が認められないことを示唆した。以上の結果から、過剰に硝酸誘導されたOsNRT2.1およびOsNRT2.2は転写後あるいは翻訳後調節を受けていること、さらに他の植物で報告されているように、OsNRT2.1の活性化にOsNAR2.1が関与することを示唆した。今後は、タンパク質レベルでの研究が必要であろう。

第4章では、琵琶湖周辺の水際に生息するヨシの硝酸吸収能力に注目し、ヨシの硝酸吸収速度の評価とNRT2の単離を行なった。ヨシ集団内で硝酸吸収能力の指標となるKmとVmaxの差異を認め、硝酸誘導後のKmとVmaxの差異が大きい2つのヨシクローン株(W-6およびW-8)を選抜した(図4)。両ヨシクローンについて分子生物学的手法を用いて研究した結果、両クローンのNRT2は硝酸誘導時に異なる発現パターンを示すことおよび両クローン間のNRT2

のアミノ酸残基が3つ異なっていることを明らかにした。以上の結果を総合し、自然集団のヨシの硝酸吸収能力には遺伝的差異があり、硝酸吸収能力の高いヨシを選抜・育種することが可能であると結論した。

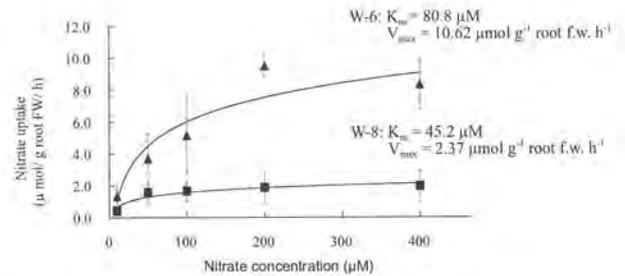


図4. ヨシ小植物体の硝酸吸収の遺伝的差異。クローンW-6は▲で、クローンW-8は■で示す。

本博士研究論文は未解明であったイネおよびヨシの硝酸吸収に関与する遺伝子を明らかにしたものである。イネではOsNRT2.1およびOsNAR2.1に焦点を絞り、根における硝酸の吸収効率を高めて窒素源の利用効率を高める育種戦略の可能性を示した。ヨシではNRT2を単離し、ヨシの硝酸除去能力を人為的に向上させる可能性を明示した。

本研究成果を応用すれば、冒頭の部分で述べた植物とは相対する形質を持つ窒素源を多量に吸収するだけの「燃費の悪い」植物が育種されるかもしれない。しかし、硝酸吸収量に見合った硝酸同化能力を付与すれば、硝酸利用効率をさらに高めた植物の育種も期待される。一方、限られた窒素源を最大限に活用することや過剰な窒素源をある系から効率的に取り除くために、相反する形質を持つ植物を必要に応じて使い分ける「環境科学的アプローチ」も考えられる。

森林からの水質汚濁物質の流出と琵琶湖の沈水植物群落の水質改善機能の評価

浜 端 悦 治
環境動態学専攻

要 旨

本研究では琵琶湖の保全において、植物群落の視点から最も重要と考えられる集水域における森林生態系と湖沼における沈水植物群落という2つの植物群落を取り上げた。森林群落については溪流として流れ出す汚濁負荷量の推定精度を向上させるとともに、森林伐採が渓流水質に及ぼす影響を野外実験によって明らかにすることを試みた。さらに汚濁負荷を受け止める琵琶湖においては、特に南湖を研究対象とし、ほぼ壊滅状態にあった沈水植物群落の回復状況を把握するとともに、その回復が湖沼水質に及ぼす影響を調査した。これらの研究から、森林の伐採や沈水植物群落の回復といった群落の劇的な変化が、湖沼環境に重大な影響を及ぼす可能性のあることを明らかにした。

森林の物質流出機構と皆伐・植林の影響

森林からの汚濁負荷量の原単位の精度を高めるために、琵琶湖集水域で基岩の異なる2地域の森林流出水で、N, Pの栄養塩などの観測を行った。調査流域は湖南中部の花崗岩地の3小流域、湖西北部の古生層の地域の2小流域であった。渓流水を毎週調査した結果、花崗岩地の油日-N, 油日-S, 妙光寺での全窒素(TN)の年間平均濃度は0.408, 0.589, 0.349mg/lであり、全リン(TP)の年間平均濃度はそれぞれ0.0074, 0.0046, 0.0096mg/lであった。また年間の流出量の平均値は油日-N, 油日-S, 妙光寺のそれぞれで、TNは、5.85, 3.99, 8.37kg/ha・年、TPでは0.131, 0.044, 0.280kg/ha・年であった。TN, TPの浄化率を求めると、油日-N, 油日-S, 妙光寺それぞれについて、TN: 55, 76, 36%, TP: 77, 95, 59%となった。古生層を母岩とする朽木-R流域、朽木-L流域でのTN, TPの濃度はそれぞれTN: 0.136, 0.138mg/l, TP: 0.0090, 0.0095mg/lであった。花崗岩地の濃度と比較すると、P濃度には大きな違いは無かったが、N濃度は古生層の朽木2流域ではかなり低かった。またR流域からの流出負荷量はN, Pそれぞれ1.95, 0.129kg/ha・年、浄化率はN, Pそれぞれ86%, 77%と推定された。花崗岩と古生層の森林地帯の5小流域での調査から、TNやTPの栄養塩類については森林が浄化に働いていることが示された。しかし流出量の変動は同一流域での変

動より流域間での変動の方が大きく、森林流域の原単位を明らかにするためには、さらに多くの流域での測定が必要と考えられた。



写真1 伐採前の朽木村麻生の実験地
伐採予定のL流域と対照区としてのR流域(1996年7月撮影)。尾根部にはアカマツが見られるが、大部分はコナラ・クリの落葉樹が占める。

森林伐採が渓流水質等に及ぼす影響を定量的に明らかにすることを目的とした日本で初めての試みとなる野外での流域規模での森林伐採実験を、朽木実験地で行った。この実験地は隣り合うL, Rの2流域からなり(写真1)、ともに落葉広葉樹二次林が優占する流域で、それぞれ流末端に量水堰を設け、水量・水質等の測定を行い、実験期間半ばにL流域(L流域)の森林全てを伐採(皆伐)し、手を加えないもう一方の流域(R流域)との渓流水質等の比較を行った。2流域に生育する胸高直径4.5cm以上の全ての個体8,334本について毎木調査を実施するとともに、伐採前には115本の樹木について伐倒調査を行い、部位の測定、幹、枝、葉の重量測定、葉面積測定を行い、現存量の推定式を求めた。方形区ごとの現存量を用い、植生に基づく地形区分を試みた。現存量推定式から地上部現存量を求めると、L流域が88.2 t/ha, R流域が111 t/haと推定された。地上部現存量におけるN, Pは、L流域, R流域それぞれについてN: 231kg/ha, 295kg/ha, P: 15.1kg/ha, 19.3kg/haと推定された。葉量を現存量推定式を用いて求めるとL流域が3.01t/ha, R流域が3.92t/haと

なった。これらの値はリタートラップによって測定した落葉枝量の、L流域3.61t/ha・年、R流域4.62t/ha・年に近い値となり、現存量推定式を用いての落葉枝量の推定の可能性が示された。

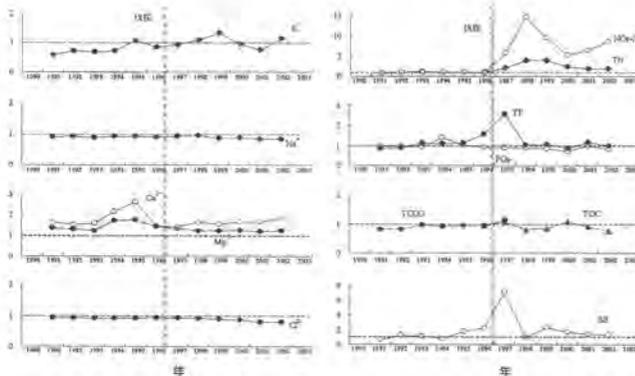


図1. L, R流域から流出する渓流水の水量加重年平均水質の比の経年変化

L流域の全樹木を伐採するいわゆる皆伐を行った結果、伐採直後にTNやTPの増加が見られた。さらに伐採後9ヶ月を過ぎたところからTNの濃度上昇が始まり、その後3年間、0.5mg/l前後の高濃度が継続した。この濃度上昇の主因はNO₃-Nの増加であった。この高濃度は季節にかかわらず通年で高い状態を維持した。2000年後半から徐々に低下し始めたが、伐採6年後の2002年でもR流域の濃度レベルには戻らなかった(図1)。前者の伐採直後の増加は、伐採時における土壌攪乱や森林がなくなり降雨が直接土壌表面にあたること等の物理的な原因によると考えられた。後者のNO₃-Nの増加は、土壌呼吸の低下や、メタン吸収速度の低下の現象が現れる時期などと一致し、伐採流域の土壌中での環境の変化、物質

代謝などの変化が硝化細菌の活性を高めた結果と考えられた。また、これらのNO₃-Nは斜面の中下部で生産されている可能性が高いことがわかった。

森林伐採のこうした渓流水質への影響は、夏の成層期には生産層では窒素についても不足する琵琶湖にとっては富栄養化に寄与する恐れがあると考えられた。それを軽減するために、伐採時の表土攪乱をできるだけ抑えること、伐採後の裸地状態を早く回復させることが重要であり、伐採・植林後の下刈り方法を検討する必要があることがわかった。また斜面中・下部でのNO₃-Nの生成を考えると、斜面下部の樹木、溪畔林の取り扱いについて検討が必要であり、山地の土地利用にあたっては、斜面下部といった土地の条件などを勘案してのゾーニングや、溪畔林の保護育成なども今後の重要な施策となると考えられた。

沈水植物群落の回復とその影響

琵琶湖では1994年9月15日に-123cm水位を記録した。これは1939年以来、実に55年ぶりの夏の低水位記録となった。これを契機に南湖を中心に沈水植物群落の回復を始め、それに呼応するかように水質の改善が見られた。琵琶湖全域での沈水植物群落の現況を明らかにするとともに、群落の回復が水質等に及ぼす影響を明らかにすることを目的とした研究を行った。

琵琶湖では1994年の大渇水に続いて、2000年(-97cm)、2002年(-99cm)と夏期の低水位が近年頻発している。こうした渇水年を利用して、1994年と2000年には航空写真を利用しての沈水植物群落の分布面積の把握を、2002年には南湖を対象に種類組成の把握を行った。その結果、琵琶湖には、100%の被度に換算して1994年には1,441ha、2000年には2,831haの沈水植物群落が存在し、6年間で分布面積が倍増していることがわかった(表

表1 琵琶湖における沈水植物群落の被度階級別面積

年	南湖					北湖					琵琶湖全域 合計	
	被度階級(%)					被度階級(%)						
	100-75	75-50	50-10	10>0	小計	100-75	75-50	50-10	10>0	小計		
1994	分布面積	20.2	208	236	158	622	24.4	1,130	1,510	723	3,390	4,010
	群落面積	17.7	130	70.9	7.9	227	21.4	703	453	36.1	1,210	1,440
2000	分布面積	2.4	1,740	585	599	2,930	42.4	1,670	1,300	1,130	4,140	7,070
	群落面積	2.1	1,090	175	30.0	1,300	37.1	1,050	390	56.4	1,530	2,830

注) 群落面積 = 分布面積 × 被度階級中央値

表2 各区水質項目の濁水以前（1990-1994年）と近年（2000-2003年）の地域グループ別の平均値の比較

水質項目	調査期間	G1 (n=20)			G2 (n=24)			G3 (n=12)			G4 (n=20)		
		Mean	CV(%)	S.L.									
透明度 (m)	1990-1993	2.39	23	***	1.40	31	***	1.69	30		1.76	17	***
	2000-2003	3.04	16		2.05	24		1.87	19		2.55	12	
クロロフィル-a (μg/l)	1990-1993	6.97	43	***	12.83	31	***	11.21	33	***	12.3	22	***
	2000-2003	3.59	34		5.97	50		4.70	32		4.61	40	
TP (mg/l)	1990-1993	0.0173	36	***	0.0301	24	***	0.0229	18	***	0.0260	18	***
	2000-2003	0.0116	12		0.0199	23		0.0168	12		0.0170	18	
TN (mg/l)	1990-1993	0.288	14	***	0.353	14	**	0.317	11	**	0.374	22	*
	2000-2003	0.236	18		0.302	22		0.265	20		0.311	27	

G1, G2, G3, G4の各区は、それぞれ南湖北湖、中部沿岸部、中部中央区、南部地域の採水点から成る。

CV: 変動係数

S.L.: 有意レベル, ***: 0.1%; **: 1%; *: 5%

1). そしてその面積増加の大部分が南湖での増加であることが明らかになった。出現頻度の高い種類はクロモ、センニンモ、マツモの在来種であり、それに外来種のオオカナダモが続いた。

沈水植物群落の過去の分布資料を検討した結果、南湖では1950年代から1970年代にかけて急速に分布面積が減少し、1994年以降増加に転じていることが明らかになった。また1980年代の南湖での調査結果との比較から、かつての優占種である外来種のコカナダモや、そして在来種ではイバラモの減少が顕著となった。同様に過去の水質データとの比較から、南湖では沈水植物群落の増加に伴い、透明度をはじめとして、クロロフィル-a、TP、TNの濃度などの水質項目に改善がみられた。特に南湖の南部地域(G4)では、透明度は1.8 mから2.6mに上昇し、クロロフィル-a、TP、TN（唐橋流心を除く）についてはそれぞれ 12.3 μg/lが4.61 μg/lに、0.026mg/lが0.017 mg/lに、0.35mg/lが0.28mg/l（TNのみ1%で有意、他は0.1%で有意: t検定）へと低下し、水質の改善傾向が明らかとなった（表2）。

山東町の三島池で隔離水界を用いた沈水植物の植栽実験を行ったところ、群落が発達し、また大きな降雨もなく水界が安定した状態にあった6月末から7月末までの間で、植栽区と非植栽区とで平均値を求めると、クロロフィル-aでは24.2と72.1 μg/l、濁度では16.4と46.0NTU、TNでは0.37と0.61mg/l、TPでは0.048と0.086mg/lとなり、いずれも植栽区は半分程度、あるいはそれ以下の濃度しかなかった（0.1 %で有意: t検定）、以上の結果から、沈水植物群落が発達するとクロロフィル-a、TP、TN、濁度の濃度が低下することが、実験的に確かめられた。

これらの結果から、南湖は沈水植物群落の回復に伴い、水質にもその影響が及び、水質の改善が進んでいると考えた。沈水植物が水質を改善する機構を

明らかにすることが出来なかったが、単独の原因で水質が改善されると考えるのは困難であり、生態系構造を形作る沈水植物群落の発達がより豊かな生態系を創出し、系全体として生産性が向上し、それによって水質が改善されると考えた。

本研究は、琵琶湖、特に南湖において、1970年代、1980年代の富栄養化によって壊滅状態にあった沈水植物群落が回復したことを初めて明らかにした。こうした56 km²もの大面積を持つ湖盆での水草帯の回復と、それに伴う水質改善が報告された事例は日本のみならず諸外国でも知られていない。

結 論

琵琶湖の水質を保全するためには、湖沼内にある沈水植物群落を、陸域にあっては集水域の6割を占める森林生態系を安定的に維持しなければならないことがわかったが、各生態系内の構成要素の相互作用の重要性も明らかになった。しかし湖沼生態系は、強力な運搬因子である水を介して、集水域の各生態系とつながっている。これら生態系は集合として景観（域）を構成しており、景観は生態系同様に密接に相互作用を及ぼしあっている。このような景観を総合的に捉えることによって、琵琶湖のような湖沼の保全が実現できると考えられる。

環境科学部・環境科学研究科
— この1年 —

環境科学部

環境生態学科の一年

倉 茂 好 匡
環境生態学科長

本年度の独立法人化に伴い、本学はめまぐるしい変革の中にある。環境生態学科ではこの変革の時代にさらなる発展を遂げるべく、将来構想を検討している。そして、2008年度に計画されている学部再編に合わせて新たなスタートを切るべく準備中である。

1. 学生の動き

2006年4月には30名の新生を迎えた。この中には、2006年3月より大きく入学試験科目を変更した後期試験を突破した入学生9名も含まれている。本学科では、2006年度より後期入試の試験科目を従来の「数学」と「理科2科目」から「理科1科目」と「総合問題」に変更した。これは、さまざまな環境問題に関心を強く持ち、データ解析能力や分析能力を持つ学生を選抜したいとする本学科の意志を実現するためのものである。特に本学科で課した「総合問題」は、受験生のデータ解析能力や計算能力などを知るために工夫された全く新しい形式の試験である。この試験を突破してきた学生が今後どのように実力を伸ばしていくのか楽しみである。

2. 教員の動き

4月から浜端悦治助教授と長谷川直子助手が着任された。浜端助教授はこれまで琵琶湖研究所で研究されていた研究者であり、琵琶湖とその周辺の水草等に造詣が深い方である。また長谷川助手はフランスで湖沼の物理について研究されてきた新鋭である。彼らの着任により、学生にもよい刺激があたえられている。本学科の教育・研究に活躍が期待される。

本学の独立法人化に伴い、本学全体の将来計画を実現されるための人事を行うべく、「学長管理枠」と称する人事管理枠が設けられることになった。本学全学部より11名の教員定員を減員してこれを学長が管理し、将来計画に沿った人事を行おうとするものである。これに伴い、本学科では2007年度より1名の教員定員減を余儀なくされた。後述する「学科の将来構想」への影響は計り知れない。これまで15名の教員で行ってきた教育・研究を14名でカバーせざるを得ない状況であり、我々の一層の奮闘が必要な状況である。

3. 学科をめぐる動き

昨年度の本稿で前学科長が報告しているように、2005年度の段階で本学科は学科名を変更したいとする意思表示を行った。これは、本学科の理念を「琵琶湖とその集水域を主なフィールドとし、ここにおける環境問題を総合的に把握して、問題解決に向けての原理と方法論を教育・研究するとともに、その成果を国内外における環境の修復・再生に広く応用できる能力を備えた人材を養う」と定めたためである。一方、従来の「環境生態学科」という名称では、とすれば「生態学を主とした教育・研究を行う学科」と受験生に誤解されることがあった。そこで「環境問題を総合的に把握する」ことを本学科が目指していることを象徴するような学科名に変更したいと考えた。そして、2005年度の段階では学科名称を「琵琶湖環境学科」に変更したいとする学科の意思表示を行った。

一方、本学の独立法人化に伴い、各学部では2008年度より再編するべく準備を開始した。環境科学部でも2008年度より4学科体制に再編される予定である。そのため、本学科のみがその理念変更に伴って学科名変更するのではなく、これを学部再編の中に位置づけて行う必要に迫られた。このため、本学科の学科名変更は当面は留保せざるを得ないことになった。

一方、新たな本学科の理念を具現するためには、学科のカリキュラム自体を改変する必要がある。学生がある分野の科目ばかりを履修したりすることがないように、また幅広い環境問題を総合的に学習できるようなカリキュラムを実現しなくてはならない。相当に大きなカリキュラム変更になる予定である。2008年度からの実現を目指して作業を進めている。

環境計画学科環境社会計画専攻の一年

仁 連 孝 昭
環境計画学科長
環境社会計画専攻主任

2006（平成18）年度は42名の新生を受け入れた。昨年（平成17）年度の新入生数より1名上回っている。学生の休学は通年休学2名、前期休学2名、後期休学3名であり、経済的理由による休学者が増えてきている。なお今年度の後期から杉山優太君がMichigan Technological Universityに1年間留学することとなった。環境社会計画専攻では、3回生後期に卒業研究のために研究室への配属を行っている。研究室に配属される対象はその年度内に3回生まだに課せ

られている履修条件を満たす見込みのある学生であるが、今年度は47名の学生がそれぞれ研究室に配属され、卒業論文作成に向けてスタートをきった。また本年度卒業論文に取り組んだ学生は40名であり、全員が無事卒業できることをめざしたい。(この文章を書いている時点ではまだ卒業判定が終わっていないので、このような書き方をしている。)

公立大学法人化にともなって大学の経営主体として理事会が組織され、土屋正春教授が環境社会計画専攻教授を退任し2006年4月1日理事に就任した。土屋教授の後任として10月1日に磯田尚子助教授が赴任された。また4月1日に香川雄一講師が着任した。本年度後期から、文部省「地域再生人材創出拠点の形成」プログラムとして大学院博士前期課程の教育コースの地域再生学座「近江環人」が設けられたことにともない、このコースを主に担当する鶴飼修助教授が11月1日に赴任された。磯田尚子助教授は学部では「環境法I」「環境法II」「環境倫理学」大学院では「環境政策運営論」を担当することとなった。香川雄一講師は学部では「地域調査法」「地域環境政策論」を担当することとなった。鶴飼修助教授は地域再生学座の「コミュニティマネジメント特論」「地域診断法特論」を担当し、学部では「市民参加論」の一部を担当することとなった。また、近藤隆二郎助教授が7月23日から10月21日までオーロヴィル・エコビレッジ(インド)に長期研修に出かけた。

環境社会計画専攻では、平成20年度に専攻を学科へ昇格させる予定をしており、また平成19年度から生物資源管理学科の富岡昌雄教授、高橋卓也講師の移籍を予定している。それに対応するため、新学科のカリキュラム体系についての議論を進めてきた。新学科では環境マネジメント系の科目群を充実させるとともに、環境政策系の科目に地球環境政策論を新たに設けるなどのカリキュラムの充実を行い、新学科開設に先立ち平成19年度より新しいカリキュラムを実施することとした。かなり大幅なカリキュラム変更となったが、学生の学習意欲をそそる内容にしていきたい。

環境計画学科環境・建築デザイン専攻の一年

布野修司
環境・建築デザイン専攻主任

2006年3月で、藤原悌三先生が御退官、名誉教授

となられました。ただ、引き続き、非常勤講師としてお世話になっております。藤原先生の退官記念祝賀会は、3月26日に、彦根プリンスホテルで、教え子たちの参加も加えて盛大に執り行われ、記念論文集『安全・快適・まちづくり』、論文集『我が歩み』、研究史『耐震構造から総合防災へ、そして、いま環境防災』の全三冊が刊行されました。御業績等の詳細については、この記念刊行物に譲りたいと思います。滋賀県立大学には、1998年に語着任以来、熱心に教育研究に当たられ、多くの人材を育てられると同時に、特に、耐震構造、地域防災に関する研究で、大きな足跡を残されました。

人事としては、岡田哲史助教授が千葉大学工学部助教授として5月1日付で転任になられ、後任として、高柳英明助教授が10月1日付で着任されました。また、同じく10月1日付で、藤原先生の後任として、陶器浩一先生が教授に昇任されました。専攻は、大きく若返ったこととなります。両先生の、ますますの御精進とご活躍を期待したいと思います。

カリキュラム改定に伴い、今年から新たに太田浩史先生(東京大学COE研究員、「環境技術」)、金多隆先生(京都大学助教授、「建築生産施工」)に非常勤として講義を担当していただくことになりました。お二人は、新進気鋭の建築家、研究者として活躍されており、学生たちに大きな刺激を与えて頂いています。

4月より、独立法人(公立大学法人)化がスタートしたわけですが、それに先立って、滋賀県立大学全体の地域貢献プログラムの一環として、文部科学省の「地域再生人材創出拠点の形成」プログラム(科学技術振興調整費)に応募することとなり、年初より、その基本理念、方法、応募書類の作成に、奥貫隆教授を中心に環境・建築デザイン専攻は忙殺されることになりました。

地域診断からまちづくりまでをオルガナイズできるコミュニティ・アーキテクト「近江環人」を育成することを基本理念とする、この応募は、学長自ら中心となったプレゼンテーションも含めて評価され、全国から80近くの応募がある中、最終的に公立大学としては唯一10拠点の一つに選ばれました。

結果として、「近江環人地域再生学座」という大学院コースを設置することになったわけですが(詳細な報告は、学長報告、環境計画学専攻報告等に譲ります)、10月の開講を目指しての学生募集、学則改定、教員人事など、ほとんど夏休みもない状況で、開講後も、環境・建築デザイン専攻は、「近江環人地域再生学座」教員会議の中心として大きな役割を果たしてきました。

法人化とともに大学改革、学科新設を含む学部再編が進められつつあります。中期目標が認められて、一丸となって目標達成を求められているわけですが、様々な問題があって、とまどいもあるようです。

建築環境デザイン学科独立へ向けての作業は、昨年度、カリキュラム改訂などの骨格を決定してあるため、とりたててありませんでしたが、大田新学部長のもとで他専攻、他学科と連携して準備を進めてきました。

大学全入時代を迎え、また、昨今の「建設不信」の風潮の中、環境・建築デザイン専攻の応募者の減少が心配されます。充実した教育研究を展開することが基本ですが、対外的なアピール、高大連携など考慮する必要があります。議論とともに具体的試みを進めていかなければと考えております。

教員の活動については、それぞれの活動記録に委ねますが、受賞もあり、都市計画学会、建築学会を中心として、学科全体としてはいい評価を頂いていると思っています。

学生の自主的運営による「談話室」活動は今年も活発に行われました。また、対外的活躍が目立ちます。3月に卒業し、京都工芸繊維大学の大学院に進学した磯貝直紀君が卒業制作で MITSUBISHI CHEMICAL JUNIOR DESIGNER AWARD大賞(賞金200万円)受賞しました。石井幹子、栄久庵憲司、柏木博、日比野克彦、茂木健一郎といった錚々たる顔ぶれの審査員が名を連ねた権威ある賞です。また、4回生の高橋溪君が、日本建築学会創立120周年記念建築文化事業Student Summer Seminar 2006「佐藤淳賞」、そして第23回日本建築家協会(JIA)東海支部建築設計競技銀賞の両賞を受賞しました。さらに、三回生の小川智史君がランドスケープ七大展で入賞、京都CDL”ミテ・キテ・ツクッテ”即日設計コンクールで、四回生の中濱春洋君、高橋溪君が金賞・銀賞を受賞しました。高橋溪君は、立て続けに賞をとっており、将来が楽しみです。

生物資源管理学科の一年

川 地 武
生物資源管理学科長

行事関係

- 2月 卒業研究発表会
- 3月 学位授与式(卒業式)
泉助教授が日本作物学会論文賞を受賞
- 4月 入学式、新任教員2名が着任
- 7月 オープンキャンパス(参加者38名)

- 8月 高大連携講座(参加者15名)
- 9月 須戸講師が日本陸水学会2006年度学会賞(吉村賞)を受賞
- 11月 高校への出前講義(守山高校、大垣南高校)
- 12月 研究成果発表会
(滋賀県農林水産技術会議と共催)

学生の動向

3月には卒業生64名を送り出し、4月に新入生61名を迎える。17年度入学者に2名の退学者が出たが、理由は他大学受験の意向であった。平成18年12月現在の休学者はゼロであり、入学後の迷いや頓挫はないようで、ありがたいことである。なお、現在2名の留年者がいるが、若干の単位不足や進路変更によるものであり、卒業に向けたさらなる支援が必要である。(その結果、19年3月に卒業の運びとなった。)

18年3月卒業生の就職状況であるが、就職希望者43名、卒業時の内定者39名(内定率90.7%)であり、世間でいわれる就職戦線の好転がまだ反映されていない。19年3月卒業予定学生の内定率はこれより好転しており、卒業時には100%となることを期待している。

学科運営

4月から当大学は公立大学法人となり、大学の運営、意思決定方式が変わりました。しかし、学科レベルでは変化を感じる局面は少なく、法人化の中身はこれから作って行くのかも知れません。

学科のあり方、理念についてあいまいさを残す状態が続きます。環境か、環境農学か、生物機能の活用かとゆれ、これが学生の履修科目の多さと、卒業研究や進路選択の迷いにもつながります。今年度は19年度からのカリキュラムの見直しを行いました。金木教授をリーダーとして学科カリキュラム委員会を立ち上げ、この委員会から3つの履修コースが提案されました。その3つとは①生物生産、②生物機能利用、③地域環境管理です。19年度から入学する学生はこのいずれに進むかを意識しつつ履修科目を選択することになります。理念問題がこのような具体的な課題を通じて徐々に明確になり、着地することを期待したい。

長年の懸案であった環境計画学科の2専攻の独立問題に解決のメドが立ち、環境建築デザイン学科と環境政策計画学科としてスタートする。これに伴い、当学科で環境経済学を専門領域としてきた富岡教授と高橋講師が19年度から環境計画学科に移動することになった。生物資源管理学科の学生定員に変化はなく、また生物資源の学生が両教員の科目選択をす

るのにも支障はありません。

教員の出入り

本年は但見教授と西尾助教授が定年退職された。3月3日に両教員による最終講義が行われ、卒業生や現役学生、教職員で講義室は満室であった。当大学に9年勤続された但見教授は、農林水産省の研究機関から当大学に移動し、植物病理の教育・研究に携われ、温和な性格で慕われていた。西尾助教授は短大時代から野菜の教育・研究に当たられ、県内を中心に教え子も多い。最終講義では滋賀の特産固有の赤カブについて話され、地域密着の県立大学ならではの研究をされていたことを初めて知る。

4月から新たに鈴木教授と清水助手が着任された。鈴木先生は専門の微生物関係分野の教育・研究で新風を送り込んでくれると思われ、また吹奏楽の達人（吹奏学部の学生の弁）とのことで、課外活動を通じた学生指導も期待している。清水先生はまだ30代前半、分子生物学手法を駆使した先端的研究で学生諸君を引っ張ってくれることを期待したい。

環境科学研究科

環境動態学専攻の一年

長谷川 博
環境動態学専攻長

法人化された体制の第1年目は、前年度までに退職された教員に代わり、新たに4名の教員が4月から加わってスタートした。法人化により研究費の配分等、研究活動に大きな変化がでるものと予想されたが、本年度の研究、教育活動は前年の体制がほぼ継続されて実施された。

滋賀県立大学のような地方の小さな大学は特色を出さねば生き残れないだろう。それは資格試験の合格率を上げる等の教育中心か、主に地域の問題解決のための研究、技術開発を中心とするかの両方向であると思われる。環境科学部・環境科学研究科としては、ことに環境動態学専攻は後者の道を歩まざるをえない。大学院の教育、研究指導を今後も強化し、研究を通じた人材の育成を図らなければならない。

研究科の活動状況のバロメーターとして博士後期課程の院生の研究活動、学位授与数があげられる。2006年には文末に記した4名に博士（環境科学）の学位が授与されたが、博士後期課程に3年を越えて在籍する院生の数は年度当初9名であった（1名は7月に学位取得）。環境動態学専攻で学位を目指し

た研究には時間を要するものが多いこと、博士取得後の就職難等の問題は存在するが、やはり研究指導を強化し、博士後期課程3年で学位を授与できるよう指導教員は努力しなければならない。

平成18年度博士前期課程の合格者が定員を割ったことから心配された平成19年度の入試は、無事定員を上回る進学予定者が確保された。しかしながら、院生確保は他大学大学院でも懸案事項となっており、今後とも油断を許さない。試験日や試験方式の見直しも必要になるかも知れないが、一番必要なのは魅力ある研究テーマで学内外から院生を集める努力である。教員の個人的努力だけに帰すのではなく、研究活動を支える組織のありかた、研究費配分等の制度の整備が必要と思われる。

法人化の影響は2007年度から現れるはずである。4月には助手ポストの助教への切り替えがなされる予定である。専攻に所属する助手全員が助教の有資格者であるが、これは学部の講義担当についての評価であり、大学院における研究指導ならびに講義担当に関しては2006年内には決着がつかなかった。

平成21年度からは大学院の改組が予定されている。ただし、予定されるその内容は博士後期課程の定員割れ（ことに工学研究科）の手当という色彩が強く、博士前期課程は現状維持との方針である。専攻内ではこの方針に対する異議、疑義の声も少なくない。学部将来構想のなかに、学部と大学院のねじれ解消を主張する意見もあるが、単に学科組織と大学院組織を同一にするだけでは、新たなねじれを生むことになる。はじめに記したように、環境科学研究科、ことに環境動態学専攻は特色ある研究を中心にこれからの大学間競争を生きて行かねばならない。そのために、どのような研究を通じて、大学院生の研究指導・教育を行わねばならないのか、大学全体の組織から考えねばならない2007年になりそうである。

2006年における学位授与者：柳田直樹、三木聡子、荒木良一（以上、課程博士）、浜端悦治（論文博士）

環境計画学専攻の一年

水原 渉
環境計画学専攻長

本専攻は環境意匠コース（以下：意匠コース）と地域環境経営コース（以下：地域経営コース）から構成されている。学部の方は環境計画学科の2専攻が2学科に独立する方向で進んでいるが、大学院の

専攻はこのままの体制でしばらく進んでいく。現在、他研究科との合併など上部からの大学院の再編の主導の動きもあるが、その理念を明確にすることが教員の間から意見として出されている。組織的枠組みなどは案として先行的に示されているが、利点は何かなど、まだ未解明な点も多く、これらを明確にしていく必要がある。

学生の状況

在籍者は環境意匠コースではD2、D1各1名、M2以上19名、M1：20名、環境地域経営コースではD4：1名、D3：2名、D2：1名、D1：2名、M2以上6名、M1：5名という状況である。意匠コースでは在籍者数が定員に比して多いが、M2以上では留学や実務活動経験のための休学者が何人かいたことによるもので、本年度にはその殆どが修了予定である。

なお日本建築学会計画系論文集に、意匠コースD2の趙 聖 民君の論文「日本植民統治期における韓国密陽・三浪津邑の都市形成と土地所有変化に関する考察: 旧日本人町に着目して」が採用されている(計画系論文集NO.607、P.79、2006年9月)。

また、日本建築学会の大会での発表は、環境意匠コースの在籍生、卒業生合わせて、5名が行っている。

教育

2006年度は、環境意匠コースで昨年度に見直したカリキュラムの実施の年であった。個々の教員の専門性をより生かす方針で、これまで多くオムニバス方式で行われていた授業を見直し、1,2回生混合の授業を促す意味で隔年開講の増設も含めて行われたものである。効果を評価するのはもう少しの時間が必要だが、小さな大学院であって授業選択の幅を広げるための一つの方法と言え、専門的大学院教育を進めていくために効果を期待したい。

この間の大きな動きとしては本県立大学大学院での「近江環人地域再生学座」の設立があった。これは、文部科学省が平成18年度新規課題として募集した「地域再生人材創出拠点の形成」プログラム(科学技術振興調整費)に採択され、大学と行政等との連携によって地域再生をはじめとする様々な地域課題の解決に貢献する人材の育成を目的とする全学的大学院教育プロジェクトである。

この学座第一期生として、環境意匠コースから6名の院生が合格し、10月から学座に新設された講義、実習カリキュラムでコミュニティ・アーキテクト(近江環人)を目指し、勉学に励んでいる。

これは社会人(大学院には所属しない)も対象としたもので、土曜開講も行っている。大学院の更なる活性化を考えると、留学生と並んで社会人入学も視野に入れる必要があり、このような体制も必要となってくる可能性がある。

教員の活動資料編

環境科学部・環境科学研究科人事等

1. 教員の移動

採用 2006年4月1日付け

浜端 悦治 環境生態学科(環境科学研究科環境動態学専攻) 助教授
 長谷川直子 環境生態学科(環境科学研究科環境動態学専攻) 助手
 香川 雄一 環境計画学科環境社会計画専攻(環境科学研究科環境計画学専攻) 講師
 鈴木 一実 生物資源管理学科(環境科学研究科環境動態学専攻) 教授
 清水 顕史 生物資源管理学科(環境科学研究科環境動態学専攻) 助手

採用 2006年10月1日付け

磯田 尚子 環境計画学科環境社会計画専攻(環境科学研究科環境計画学専攻) 助教授
 高柳 英明 環境計画学科環境・建築デザイン専攻(環境科学研究科環境計画学専攻) 助教授

採用 2006年11月1日付け

鶴飼 修 環境計画学科環境社会計画専攻(環境科学研究科環境計画学専攻・近江環人地域再生学座担当) 助教授

昇任 2006年4月1日付け

泉 泰弘 助教授へ昇任(生物資源管理学科、環境科学研究科環境動態学専攻)

昇任 2006年10月1日付け

陶器 浩一 教授へ昇任(環境計画学科環境・建築デザイン専攻、環境科学研究科環境計画学専攻)

退職 2006年3月31日付け

藤原梯三、但見明俊、西尾敏彦

異動 2006年4月1日付け

土屋正春 理事(教育担当)に就任

2. 非常勤講師の派遣

環境生態学科

大田 啓一 筑波大学 海洋環境学
 名古屋産業大学 環境科学
 三田村緒佐武 大阪教育大学 水圏科学I
 環境科学
 大阪府立大学 生物科学特別講義H

倉茂 好匡 北海道大学大学院

地球圏環境科学特別講義I

野間 直彦 長浜バイオ大学 環境影響評価論
 丸尾 雅啓 奈良教育大学 基礎環境科学
 籠谷 泰行 滋賀県立農業大学校 生物
 基礎統計学
 肥田 嘉文 滋賀県立農業大学校 環境概論・前期

環境計画学科環境社会計画専攻

石川 義紀 中部大学大学院 環境影響評価論
 仁連 孝昭 龍谷大学 チェーンレクチャー
 秋山 道雄 奈良教育大学 自然地理学
 龍谷大学 人文地理学
 井手 慎司 立命館大学 地球環境システム
 錦澤 滋雄 長浜バイオ大学 環境影響評価論

環境計画学科環境・建築デザイン専攻

布野 修司 京都大学 地理学
 村上 修一 京都市立芸術大学 造園学2
 京都造形芸術大学 環境デザイン
 [ランド]I-3 103Kアースワークとランドアート1
 高柳 英明 千葉大学 施設計画マネジメント演習
 建築デザイン基礎
 伊丹 清 京都橋大学 室内環境デザイン
 滋賀文化短期大学 設備環境学
 山本 直彦 立命館大学 世界都市史
 建築デザイン演習I

生物資源管理学科

秋田 重誠 滋賀県立農業大学校 作物概論
 長谷川 博 滋賀県立総合保険専門学校
 環境人間学
 富岡 昌雄 南九州大学 環境経営・会計学
 岡野 寛治 京都教育大学 動物資源利用学
 小谷 廣通 京都大学 測量学
 泉 泰弘 滋賀県立農業大学校 環境概論・後期
 上町 達也 滋賀県立農業大学校 園芸用施設

3. 学部長室訪問者

チョイ・ジュンキル サンチ大学理工学部長、表敬訪問、2007年2月28日。

環境生態学科

1. 著書

坂本充, 熊谷道夫編 (2006) 東アジアモンスーン域の湖沼と流域－水源環境保全のために－, 伏見碩三, 「内陸アジア湖沼群への温暖化影響－生態的水河学の観点から－」, 名古屋大学出版会, 名古屋.

坂本充, 熊谷道夫編 (2006) 東アジアモンスーン域の湖沼と流域－水源環境保全のために－, 浜端悦治, 「流域生態系の変化と湖沼影響」, ; 李恒, 浜端悦治, 「雲南高原湖沼の水生植物群落とその生態」, 名古屋大学出版会, 名古屋.

熊谷道夫, 石川可奈子編 (2006) 世界の湖沼と地球環境, 長谷川直子, 第5章「レマン湖の低酸化」, 古今書院, 東京.

丸山宗利編 (2006) 森と水辺の甲虫誌, 近雅博, 第10章「タマオシコガネの自然史」, 東海大学出版会, 神奈川.

Lobl, I and A. Smetana (eds.) (2006) Catalogue of Palaearctic Coleoptera Volume 3. M. Kon, "Passalidae". Apollo Books, Copenhagen.

日本水環境学会編 (2006) 水環境ハンドブック, 國松孝男, 第1章 2 「河川水質及び汚濁負荷の特性」, 朝倉書店, 東京.

S. Fujii, K. Yamada and T. Kunimatsu (eds.) (2006) Water Science and Technology-Diffuse Pollution VIII. IWA Publishing.

坂本充, 熊谷道夫編 (2006) 東アジアモンスーン域の湖沼と流域－水源環境保全のために－, 坂本充, 村瀬潤, 丸尾雅啓, 宋学良, 第3章 4 「湖の富栄養化の現状, 変動経過, 原因」(4) 「撫仙湖, 星雲湖のN, P動態－琵琶湖との比較において」, 名古屋大学出版会, 名古屋.

C.E. Goulden, T. Sitnikova, J. Gelhaus, B. Boldgiv (eds.) (2006) "The Geology, Biodiversity and Ecology of Lake Hovsgol (Mongolia)". Chapter 6, Kumagai M, J. Urabe, C.E.Goulden, N. Soninkhishig, D Hadbaatar, S. Tsujimura, Y. Hayami, T. Sekino and M. Maruo, Recent rise in water level at Lake Hovsgol in Mongolia, p. 77-91. Chapter 8, Hayami Y., M. Kumagai, M. Maruo, T. Sekino, S. Tsujimura and J. Urabe, Review of some physical processes in Lake Hovsgol, p. 115-124. Chapter 24, Urabe J., T. Sekino, Y. Hayami, M. Maruo, S. Tsujimura, M. Kumagai, B. Boldgiv and C.E. Goulden, Some

biological and chemical characteristics of Lake Hovsgol, p. 387-402, Backhuys Publishers, Leiden, Nederland.

2. 論文 (学会誌およびそれに準じる学術、技術雑誌およびプロシーディングに掲載されているもの)

Goto, N., H. Terai and O. Mitamura (2006) Production of extracellular organic carbon in the total primary production by freshwater benthic algae at the littoral zone and inflow river of Lake Biwa. Verhandlungen Internationale Vereinigung fur Theoretische und Angewandte Limnologie 29: 2021-2026.

Anbutsu, K., T. Nakajima, Y. Takemon, K. Tanida, N. Goto and O. Mitamura (2006) Distribution of biogeochemical compounds in interstitial and surface standing water bodies in the gravel bar of the Kizu River, Japan. Arch Hydrobiology 166: 145-167.

Anbutsu, K., Y. Inoue, N. Goto and O. Mitamura (2006) Seasonal changes of nutrient concentration and algal biomass in the stagnant water system on sand bar of Kizu River, Japan. Verhandlungen Internationale Vereinigung fur Theoretische und Angewandte Limnologie 29: 1871-1876.

Matsuura, Y., N. Goto and O. Mitamura (2006) C:N:P ratios of epilithic periphyton in Lake Biwa and its catchment basin. Proceedings of Second Japan-Korea Joint Symposium on Limnology, Online System: 30-36.

西野麻知子, 大野朋子, 前中久行, 浜端悦治, 佐久間維美 (2006) 土と基礎の生態学4, 琵琶湖周辺水域の生物多様性と微地形. 土と基礎 54: 78-86.

Hasegawa (Ishiguro), N. and K. Okubo (2006) Double-diffusive convection in the thermocline of lake Geneva. Verhandlungen Internationale Vereinigung fur Theoretische und Angewandte Limnologie 29: 1833-1836.

長谷川 (石黒) 直子, 大久保賢治 (2006) 夏季のレマン湖内ローヌ川河口付近での湖水と河川水の混合状態について, お茶の水地理 46: 21-28.

Kon, M. (2006) New records of *Leptaulax loebli* Kon, Johki et Araya (Coleoptera, Passalidae) from Laos and Myanmar. Elytra 34: 152.

Kon, M., K. Araya and M. Mohamed (2006) Two new species of *Aceraius* (Coleoptera,

- Passalidae) from Borneo, with a key to the Bornean species of *Aceraius*. *Elytra* 34: 107-117.
- Kon, M., M. Ohara, T. Ochi and S. Hartini (2006) A new record of *Onthophagus (Sunenaga) wallacei* (Coleoptera, Scarabaeidae) from Halmahera, Maluku. *Elytra* 34: 396.
- Akamine, M., P. Moretto, T. Ochi and M. Kon (2006) Dung beetles (Coleoptera, Scarabaeidae) collected from a tropical rain forest of Kakamega, Kenya, with some new distributional records. *Elytra* 34: 327-335.
- Hanatsuka, M., K. Masumoto and M. Kon (2006) Two new alleculine species (Coleoptera, Tenebrionidae, Alleculinae) from Japan. *Elytra* 34: 179-183.
- Ochi, T. and M. Kon (2006) Notes on the coprophagous scarab-beetles (Coleoptera, Scarabaeidae) from Southeast Asia (X). Four new species of *Onthophagus (Obthophagus)* from Borneo. *Entomological Review of Japan* 61: 1-10.
- Ochi, T. and M. Kon (2006) Description of the female of *Onthophagus (Phanaeomorphus) johkii* Ochi et Kon (Coleoptera, Scarabaeidae). *Elytra* 34: 118.
- Ochi, T. and M. Kon (2006) Notes on the coprophagous scarab-beetles (Coleoptera, Scarabaeidae) from Southeast Asia (XII). Six new species of *Onthophagus (Indachorius)* from Borneo. *Entomological Review of Japan* 61: 169-180.
- Ochi, T. and M. Kon (2006) Notes on the coprophagous scarab-beetles (Coleoptera, Scarabaeidae) from Southeast Asia (XIII). Seven new species of *Onthophagus (Onthophagus)* from Borneo. *Entomological Review of Japan* 61: 181-194.
- Ochi, T., M. Kon and A. Kashizaki (2006) A new species of the genus *Cyobius* (Coleoptera, Scarabaeidae, Onthophagini) from Borneo. *Elytra* 34: 145-152.
- Ochi, T. and M. Kon (2006) Notes on the coprophagous scarab-beetles (Coleoptera, Scarabaeidae) from Southeast Asia (XI). Four new species and a subspecies of *Onthophagus* from the Philippines. *Kogane* 7: 41-48.
- Ochi, T., M. Kawahara and M. Kon (2006) A new species of the genus *Teuchestes* (Coleoptera, Aphodiidae) from China. *Kogane* 7: 37-40.
- Ochi, T., A. Ueda and M. Kon (2006) *Ochicanthon* (Coleoptera, Scarabaeidae) from Borneo, with descriptions of four new species and a key to the Bornean species. *Elytra* 34: 309-325.
- Kunimatsu, T. and M. Sudo (2006) Long-term fluctuation and regional variation of nutrient loads from the atmosphere to lakes. *Water Science and Technology* 53: 53-62.
- Kunimatsu, T., T. Otomori, K. Osaka, E. Hamabata and Y. Komai (2006) Evaluation of nutrient loads from a mountain forest including storm runoff loads. *Water Science and Technology* 53: 79-92.
- Maruo, M., T. Doi and H. Obata (2006) Anion chromatographic determination of submicromolar nitrate in seawater with a high-capacity anion exchanger and lithium chloride eluent on shipboard. *Analytical Sciences* 22: 1175-1178.
- Maruo, M. and K. J. Orians (2006) Determination of Copper Complexation in Freshwaters of West Canadian Lakes by Electrochemical Analysis. *Verhandlungen Internationale Vereinigung für Theoretische und Angewandte Limnologie* 29: 1481-1486.
- 南秀樹, 小畑元, 藤谷直樹, 中村智巳, 副島広道, 丸尾雅啓 (2006) インド洋, アンダマン海および南シナ海における懸濁粒子の化学組成. *北海道東海大学紀要 理工学系* 18: 1-4.
- Nouda, C., M. Maruo, S. Ban and K. Ohta (2006) *In situ* generation of refractory organic compounds in Lake Biwa, Japan. *Proceedings of Second Japan-Korea Joint Symposium on Limnology, Online System*: 18-23.
- Mitamura, O., H. Maeda, Y. Seike, K. Kondo, N. Goto and T. Kodama (2006) Seasonal changes in carbon and nitrogen productivity in the north basin of Lake Biwa, Japan. *Verhandlungen Internationale Vereinigung für Theoretische und Angewandte Limnologie* 29: 1913-1920.
- Ishida, N. and O. Mitamura (2006) Epilithic algal community on a wave-exposed rock at the upper littoral area in the north basin of Lake Biwa. *Proceedings of Second Japan-Korea*

- Joint Symposium on Limnology Online System: 11-17.
- Nakajima, T., M. Ochiai, K. Anbutsu and O. Mitamura (2006) Denitrification and nitrous oxide production in a stream. *Verhandlungen Internationale Vereinigung für Theoretische und Angewandte Limnologie* 29: 1461-1466.
- Satoh, Y., T. Katano, T. Satoh, O. Mitamura, K. Anbutsu, S. Nakano, H. Ueno, M. Kihira, V. Drucker, Y. Tanaka, T. Mimura, Y. Watanabe and M. Sugiyama (2006) Nutrient limitation of the primary production of phytoplankton in Lake Baikal. *Limnology* 7: 225-229.
- Seike, Y., K. Kondo, O. Mitamura, S. Ueda, Y. Senga, R. Fukumori, K. Fujinaga and M. Okumura (2006) Seasonal variation of nitrogen nutrient in the stratified brackish Lake Nakaumi, Japan. *Verhandlungen Internationale Vereinigung für Theoretische und Angewandte Limnologie* 29: 1959-1965.
- Miyake, T., F. Nakazawa, H. Sakugawa, N. Takeuchi, K. Fujita, K. Ohta and M. Nakawo (2006) Concentrations and source variations of n-alkanes in a 21m ice core and snow samples at Belukha glacier, Russian Altai mountains. *Annals of Glaciology* 43: 142- 147.
- Urabe, M. (2006) Demonstration of migration of juvenile cyprinid fish using parasite biomarkers. *Landscape and Ecological Engineering* 2: 209-216.
- Urabe, M. and E. Higa (2006) A new trematode species *Neoplagioporus kajika* sp. n. (Digenea: Opecoelidae), parasitic in the Japanese fluvial sculpin, *Cottus pollux* (Osteichthyes: Scorpaeniformes: Cottidae), from Japan. *Folia Parasitologica* 53: 208-210.
- 林村, 浦部美佐子, 吉塚和治 (2006) 淡水魚腸内寄生虫に対する重金属毒性検出の試み. *水環境学会誌* 29: 333-337.
- 兒玉裕美子, 浦部美佐子 (2006) 吸虫セルカリアにおける銅・亜鉛および塩素の毒性. *水環境学会誌* 29: 157-162.
3. 報告書, その他著作, 一般向け記事
- 1) 科研費他外部研究費による研究の成果報告書
- 三田村緒佐武 (2006) 沈降粒子束の組成と季節変動 (p. 7-19) , Distribution of nutrients and Chl.a in southern Lake Bikal in early summer (p. 76-84). 研究代表者: 杉山雅人, 科学研究費補助金基盤研究 (A). バイカル湖の物質負荷・循環過程が駆動する巨大湖の生物生産・生態変動システム.
- 三田村緒佐武, 紀平征希, 安佛かおり (2006) バイカル湖の生産層における尿素の分解 (p. 28-45) , Nutrient limitation in the primary production of phytoplankton in Lake Bikal (p. 62-75), Abundance and composition of the phytoplankton community along a transect from the Barguzin River to the central basin of Lake Bikal in summer (p. 147-164). 研究代表者: 杉山雅人, 科学研究費補助金基盤研究 (A). バイカル湖の物質負荷・循環過程が駆動する巨大湖の生物生産・生態変動システム.
- 2) 受託研究等の報告書
- 三田村緒佐武, 安佛かおり (2006) 木津川下流砂州上のタマリにおける水生動物相の季節変化. 河川生態学術研究木津川グループ平成17年度研究成果報告書. リバーフロント整備センター.
- 三田村緒佐武, 安佛かおり (2006) 木津川の砂州内間隙水における生元素化合物の分布変動 -人工水路実験および培養実験による検証-. 河川生態学術研究木津川グループ平成18年度研究成果報告書. リバーフロント整備センター.
- 三田村緒佐武, 丸尾雅啓, 後藤直成 (2006) 河川・湖沼におけるシリカ循環の生物地球化学過程に関する研究. 地球環境研究総合推進費「グローバル水循環系のリン・窒素負荷増大とシリカ減少による海洋環境変質に関する研究」報告書.
- 3) ハンドブック, 辞典, 図鑑などへの執筆
- 伏見碩二 (2006) 日本陸水学会編, 陸水の事典, 項目「氷河」等, 講談社サイエンティフィック, 東京.
- 後藤直成 (2006) 日本陸水学会編, 陸水の事典, 項目数24, 講談社サイエンティフィック, 東京.
- 肥田嘉文 (2006) 日本陸水学会編, 陸水の事典, 項目数6, 講談社サイエンティフィック, 東京.
- 倉茂好匡 (2006) 日本陸水学会編, 陸水の事典, 項目数約40, 講談社サイエンティフィック, 東京.
- 丸尾雅啓 (2006) 日本陸水学会編, 陸水の事典, 講談社サイエンティフィック, 東京.
- 三田村緒佐武ほか (2006) 陸水の事典, 講談社サイ

エンティフィク, 東京.
大田啓一 (2006) 日本陸水学会編, 陸水の事典, 項目数10, 講談社サイエンティフィク, 東京.
浦部美佐子 (2006) 日本陸水学会編, 陸水の事典, 項目「寄生」, 「中間宿主」, 講談社サイエンティフィク, 東京.

4) 新聞, 一般向け雑誌等への解説記事など

伴修平 (2006) 連載記事「琵琶湖と環境」プランクトンのはなし, 2006年4月24日~5月15日 (全4回), 中日新聞.
後藤直成 (2006) (書評) 南川雅男・吉岡崇 (編) 生物地球化学, 陸水学雑誌 67:161-162.
浜端悦治 (2006) 水草の功罪, H₂O (琵琶湖会議機関誌) vol. 35.
井上欣勇, 近雅博 (2006) 木津川におけるホソオチヨウとジャコウアゲハの季節消長, 昆虫と自然 41: 33-37.

4. 学会等への発表

伴修平, 田上琢白, 田辺 (細井) 祥子, 石川可奈子 (2006) 琵琶湖北湖堆積物からの *Uroglena americana* シストの収集とreal-time PCRによる定量法の検討. 日本陸水学会第71回大会, 松山.
増本喜久, 伴修平 (2006) 代掻き水が琵琶湖沿岸堆積物に及ぼす影響. 日本陸水学会第71回大会, 松山.
酒井陽一郎, 伴修平 (2006) 漁獲量変動とプランクトンの動態. 日本陸水学会第71回大会, 松山.
更井紀一, 市井涼子, 田辺 (細井) 祥子, 森司, 伴修平 (2006) オオミジンコ *Daphnia magna* のこみ合い環境下において発現する遺伝子の探索. 日本生態学会第53回大会, 新潟.
澤辺智雄, 三宅絵理, 松崎雅弘, 伴修平, 伊村智 (2006) クローンライブラリー法による南極超高塩分湖の細菌群集構造解析. 平成18年度日本水産学会, 高知.
田村愛, 伴修平 (2006) オオミジンコの資源配分にみられる込み合い効果. 日本生態学会第53回大会, 新潟.
田辺 (細井) 祥子, 伴修平, 木村成子, 工藤栄, 伊村智, 松崎雅弘 (2006) クローンライブラリー法による南極昭和基地周辺湖沼の真核微生物群集構造解析. 日本陸水学会第71回大会, 松山.
占部城太郎, 加藤恵理子, 伴修平, 日野修次 (2006) 景観化学量論: 湖沼代謝と集水域土地利用の視点

から. 日本生態学会第53回大会, 新潟.
Zhang, H., S. Tanabe-Hosoi, S. Ban, S. Kudo, S. Imura and M. Matsuzaki (2006) Molecular analysis of microbial diversity and temperature adaptability in Antarctic lake. 29th Symposium on Polar Biology, Tokyo.
伏見碩二 (2006) ヒマラヤ環境史 (3), 2006年度日本雪氷学会全国大会, 秋田.
赤塚徹志, 後藤直成, 三田村緒佐武 (2006) 琵琶湖沿岸域湿地帯における脱窒に及ぼすヨシ群落の役割Ⅱ. 日本陸水学会第71回大会, 松山.
安佛かおり, 後藤直成, 三田村緒佐武 (2006) 木津川砂州内間隙水における生元素化合物の動態Ⅱ. 日本陸水学会第71回大会, 松山.
安積寿幸, 後藤直成, 三田村緒佐武 (2006) 琵琶湖における堆積物からの溶存態ケイ素の回帰とそれに影響を及ぼす要因. 日本陸水学会第71回大会, 松山.
安積寿幸, 後藤直成, 三田村緒佐武 (2006) 琵琶湖における堆積物からの溶存態ケイ素の回帰速度とそれに影響を及ぼす要因. 第17回日本陸水学会近畿支部会研究会, 堺.
堀内伸世, 後藤直成, 三田村緒佐武 (2006) 琵琶湖湖底堆積物における硫酸化細菌 *Thioploca* の分布とその動態に関する研究. 第17回日本陸水学会近畿支部会研究会, 堺.
石田典子, 後藤直成, 三田村緒佐武 (2006) 琵琶湖北湖岩礁帯における糸状緑藻の生息状況. 日本陸水学会第71回大会, 松山.
紀平征希, 後藤直成, 野崎健太郎, 三田村緒佐武 (2006) サイズ別植物プランクトンのリン制限に対する各評価法の比較. 日本海洋学会2006年度秋期大会, 名古屋.
紀平征希, 後藤直成, 野崎健太郎, 三田村緒佐武 (2006) 琵琶湖におけるサイズ分画した植物プランクトンの栄養塩添加による増殖特性. 日本陸水学会第71回大会, 松山.
黒田智映子, 後藤直成, 三田村緒佐武 (2006) 密度勾配法を用いた淡水植物プランクトンの炭素:クロロフィルa比の測定. 第17回日本陸水学会近畿支部会, 堺.
中江禎, 後藤直成, 三田村緒佐武 (2006) 琵琶湖内湖堆積物の有機物含量と粒子径に関する研究. 第17回日本陸水学会近畿支部会, 堺.
中井拓, 後藤直成, 三田村緒佐武 (2006) 琵琶湖流入河川の溶存態ケイ素濃度と地質との関係. 第17回日本陸水学会近畿支部会, 堺.
中村奈々, 後藤直成, 三田村緒佐武 (2006) クロロ

- フィル励起法により測定した植物プランクトンの光合成活性, 第17回日本陸水学会近畿支部会研究会, 堺.
- 傲欄, 小林正雄 (2006) 愛知川扇状地における浅層地下水の流動系, 日本地下水学会春季大会, 東京.
- 高島貴聖, 浜口寛, 上田徹, 柴原藤善, 浜端悦治 (2006) 琵琶湖周辺における湖底土の埋土種子ポテンシャルについて, 国際湿地再生シンポジウム.
- 谷本和久, 浜端悦治, 前中久行, 西川博章 (2006) 水生植物群落における内湖の生物多様性—琵琶湖内湖とモンゴル・フブスグル湖との比較, 国際湿地再生シンポジウム.
- 肥田嘉文, 蔵田高大, 山田祐輝, 金桂花, 國松孝男, 白石不二雄, 白石寛明, 小林徹 (2006) 水環境中における内分泌攪乱作用の検出と因子解析 (1) —下水道処理水が流入する休耕田におけるエストロゲン活性と魚類への影響評価—, 第40回日本水環境学会年会, 仙台.
- Hida, Y., Y. Yamada, H. Okura, T. Kurata, T. Kunimatsu, S. Ban (2006) A natural estrogen exposure scenario: what does the estrogenic activity of algae mean?. SETAC North America 27th Annual Meeting, Montreal, Quebec, Canada.
- 山田祐輝, 肥田嘉文, 國松孝男, 伴修平 (2006) 水環境中における内分泌攪乱作用の検出と因子解析 (2) —ある養殖池のエストロゲン活性とニゴロブナへの影響評価—, 第40回日本水環境学会年会, 仙台.
- 鈴木俊介, 北村俊平, 近雅博, P. Pilai, C. Phitaya, P. Kamol, 湯本貴和, 野間直彦, 丸橋珠樹, S. Chumphon (2006) タイ・カオヤイ国立公園の林床における哺乳類・鳥類の果実訪問パターン, 第53回日本生態学会, 新潟.
- 國松孝男, 杉本好崇, 駒井幸雄 (2006) 環境こだわり農業の評価と農林地研究の課題, 第9回日本水環境学会シンポジウム.
- 西川宏幸, 國松孝男, 駒井幸雄, 肥田嘉文 (2006) 林地溪流水の窒素濃度と地質 9. 岩石中窒素安定同位体比と溪流水中硝酸塩濃度との関係, 第40回日本水環境学会年会, 仙台.
- 杉本好崇, 國松孝男, 肥田嘉文 (2006) 水稲から小麦への転作が栄養塩流出に及ぼす影響 2, 第40回日本水環境学会年会, 仙台.
- Y. Sugimoto, G. Jin, T. Kunimatsu (2006) Change of Nutrient Loads of Paddy-Fields Caused by Crop Rotation from Rice to Wheat, 5th International Conference on Management of Paddy and Water Environment for Sustainable Rice Production, Tochigi, Japan.
- 左部智子, 倉茂好匡, 大田啓一, 丸尾雅啓 (2006) 滋賀県犬上川の水質形成に与える湧水の影響, 第17回日本陸水学会近畿支部会, 堺.
- 丸尾雅啓, 森岡真知, 登田真行, 倉茂好匡, 大田啓一, 小畑元 (2006) 琵琶湖北湖における銅錯化容量, 日本陸水学会第71回大会, 松山.
- Maruo M., K. Ohta, and H. Obata (2006) Variation in copper complexing capacity in Lake Biwa (Japan) and inflowing rivers, ASLO Summer Meeting, Victoria, BC, Canada.
- 松本真理子, 丸尾雅啓, 大田啓一 (2006) 琵琶湖溶存腐植物質の分布について, 第17回日本陸水学会近畿支部会, 堺.
- 松本真理子, 丸尾雅啓, 大田啓一 (2006) 琵琶湖における溶存腐植様物質の鉛直分布について, 日本陸水学会第71回大会, 松山.
- 長縄祐佳, 丸尾雅啓, 大田啓一 (2006) 湿原水に溶存する腐植物質のキャラクタリゼーション, 第17回日本陸水学会近畿支部会研究会, 堺.
- 三田村緒佐武 (2006) 「陸水の事典」誕生裏話, 日本陸水学会第71回大会, 松山.
- 鈴木智代, 杉山裕子, 和田千弦, 熊谷哲, 片野俊也, 中野伸一, 三田村緒佐武, 松浦嘉樹, V. V. Drucker, V. A. Fialkov, 杉山雅人 (2006) バイカル湖に溶存する有機物の分子サイズ別分布と蛍光スペクトルの特徴について, 日本陸水学会第71回大会, 松山.
- 橋淳治, 三田村緒佐武, 小山修平 (2006) 廃棄物原点処理を重視した水質分析 —大阪府教育センターの理科研修における実践事例—, 日本環境教育学会第17回大会, 札幌.
- 大田啓一, 丸尾雅啓 (2006) 溶存腐植様物質の化学特性, 日本陸水学会第71回大会, 松山.
- 大田啓一, 苗田千尋, 伴修平, 丸尾雅啓 (2006) 難分解溶存有機物の起源について, 第17回日本陸水学会近畿支部会, 堺.
- 戸田全則, 大田啓一, 丸尾雅啓 (2006) 琵琶湖表水層・流入河川における鉄 (II) の定量と分布, 第17回日本陸水学会近畿支部会, 堺.
- 浦部美佐子 (2006) 宇治川の魚類に寄生する外来寄生虫・その後, 日本生態学会第53回大会, 新潟.
- 浦部美佐子, 比嘉枝利子 (2006) 福岡県那珂川産カジカから得られた *Neoplagiopus* 属の一新種, 日本寄生虫学会第75回大会, 弘前.
- Urabe, M., K. Ogawa and T. Nakatsugawa (2006) An outbreak and subsidence of a fish

disease caused by an alien bucephalid trematode in the Uji River, central Japan. International Congress of Parasitology, Glasgow, UK.

5. 研究会等、講演会、特別講義での発表

1) 研究会等における発表

長谷川(石黒)直子, 大久保賢治 (2006) レマン湖へ流入する融氷起源河川水の挙動について. 日仏海洋学会学術研究発表会, 日仏会館.

南秀樹, 中口護, 小畑元, 丸尾雅啓, 加藤義久 (2006) 東太平洋における懸濁粒子および堆積物の化学組成について. 京大海洋研究所共同利用シンポジウム: 太平洋および南極海の微量元素・同位体と生物地球化学サイクル (GEOTRACES計画), 東京大学.

三田村緒佐武, 安佛かおり, 山口祐二, 中島拓男 (2006) 水平伏流水流動中の栄養塩動態. 河川生態学術研究木津川グループ平成18年度研究会, 京都.

三田村緒佐武, 安佛かおり, 中島拓男 (2006) たまりでの一次生産と栄養塩動態. 河川生態学術研究木津川グループ平成18年度研究会, 京都.

中島拓男, 安佛かおり, 三田村緒佐武 (2006) 流路河床での脱窒による窒素除去. 河川生態学術研究木津川グループ平成18年度研究会, 京都.

大田啓一 (2006) バイオエアロゾルと琵琶湖集水域環境. バイオエアロゾル研究会, 金沢.

2) 講演会

Fushimi, H. (2006) Water circulation of Lake Biwa catchment area and acid snow. UNEP・ILEC Training Course, 彦根, 2月9日.

三田村緒佐武 (2006) 私たちが守る水環境. シルバーカレッジ生活環境講座, 神戸市教育委員会, 神戸シルバーカレッジ, 6月27日.

三田村緒佐武 (2006) おいしい水を飲むために. シルバーカレッジ生活環境講座, 神戸市教育委員会, 神戸シルバーカレッジ, 6月28日.

三田村緒佐武 (2006) 琵琶湖淀川水の旅. 彦根市老人会教養講座. 彦根, 9月28日.

三田村緒佐武 (2006) 生物地球化学入門「湖沼の物質代謝に関する実験」. 平成18年度サイエンス・パートナーシップ・プロジェクト教員研修, 文部科学省, 大阪府教育センター, 10月13日.

大田啓一 (2006) 難分解溶存有機物の化学と機能. 京都化学者クラブ, 京都, 7月1日.

3) 授業

伏見碩二 (2006) 自然環境との共存. 草津レイカディア大学, 12月1日.

浜端悦治 (2006) 自然環境と生態との関係理解のために. 長浜高校, 10月25日.

肥田嘉文 (2006) 環境概論. 滋賀県農業大学校, 5月12日, 6月15日, 6月29日, 7月5日

大田啓一 (2006) 難分解性有機物. 中部大学, 6月28日.

6. 競争的研究資金の導入

1) 本学特別研究

後藤直成. 奨励研究. 陸水域におけるシリカ循環の生物地球化学過程に関する研究. 平成18年度, 50万円.

2) 科学研究費補助金

伴修平, 大田啓一, 須戸幹, 熊谷道夫, 「代かき水」が琵琶湖生態系に与える影響. 基盤研究 (B), (2) 平成16~18年度, 430万円.

伊村智, 伴修平, その他6名. 大規模地球環境変動に対する極域湖沼生態系の応答機構. 基盤研究 (B), 平成18~21年度, 490万円 (初年度分).

長沼毅, 伴修平, その他13名. 南北両極の微生物相の多様性と系統に関する調査研究—国際極年計画の中核として. 基盤研究 (A), 平成18~21年度, 3030万円.

浜端悦治, 安藤元一, 金子有子, 西野麻知子, 矢部徹. 東アジアにおける水鳥のフライウェイ中継湿地での水生生物相の分布と遺伝的多様性. 基盤研究 (A), 平成16~19年度, 850万円.

長谷川直子. 琵琶湖へ流入する融雪深層密度流の定量的な把握に関する研究. 若手研究, 平成18~19年度, 138万円.

肥田嘉文. 農村下水道処理水導入休耕田のニゴロブナのエストロゲン作用影響からの回復過程. 基盤研究 (C), 平成16~18年度, 370万円

近雅博 (研究代表者), 前川清人. 分子にもとづく日本産オオセンチコガネの地理的変異の研究. 基盤研究 (C), 平成18年度~20年度.

近雅博, 高久元, 岩佐光啓. アジア熱帯における生

物の分断と分散・獣糞にすむ動物群集の生物地理学的研究. 大原昌宏 (研究代表者), 基盤研究 (B) (2), 平成17年度~19年度.

近雅博, 北出理, 前川清人, 梶村恒, 小島弘昭, ゴンドワナ起源の陸塊に隔離分布する食材性昆虫類の分子に基づく系統生物地理学的研究. 荒谷邦雄 (研究代表者), 基盤研究 (B) (2), 平成18年度~20年度.

丸尾雅啓, 琵琶湖水中有機配位子の同定と物質循環に与える効果に関する研究. 基盤研究 (C), 平成16~18年度, 50万円 (H18年度).

三田村緒佐武, その他9名, バイカル湖の物質負荷・循環過程が駆動する巨大湖の生物生産・生態系変動システム. 杉山雅人 (研究代表者), 基盤研究 (A), 平成14~18年度.

三田村緒佐武, その他4名, 教育センター及び高校・NPO連携による環境安全に配慮した実験法の開発と研修. 橘淳治 (研究代表者), 特定領域研究 (2), 平成16~18年度.

三田村緒佐武, その他4名, 学校の環境教育における定量化実験法の開発と現職教員への研修. 橘淳治 (研究代表者), 学術振興会科学研究費補助金 (C), 平成18~20年度.

三田村緒佐武, その他7名, 超長大水系フプスグルーバイカルーエニセイ流域における物質動態と生態遷移. 杉山雅人 (研究代表者), 基盤研究 (A), 平成18~21年度.

大田啓一, 伴修平, 須戸幹, 丸尾雅啓, 自然水域における光化学反応の環境科学的評価. 基盤研究 (B), 平成17~19年度, 1510万円.

3) その他財団からの研究補助金

後藤直成, 植物プランクトンのクロロフィル蛍光を指標とした水圏環境の監視・保全に関する研究. 財団法人河川環境管理財団, 平成18年度, 100万円.

長谷川直子, 琵琶湖の全循環の継続期間とそれに伴う深層溶存酸素供給の解明. ニッセイ財団若手研究助成, 平成18~19年度, 90万円.

7. 研究員の受入

巖靖子, 浜端悦治. 客員研究員, 琵琶湖とフプスグル湖 (モンゴル) における付着糸状藻類藻類の類似性と水質との比較研究等. 2006年9月~2007年3月.

西村知義, 近雅博. 学術振興会特別研究員, 亜社会

性昆虫モンシテムシの親による幼虫数調節機構の生理学的・生態学的研究. 2006年4月~2009年3月.

8. 社会への貢献

1) 各種委員会等

伴修平 (2006) 滋賀県水産振興対策協議会.

伴修平 (2006) 琵琶湖環境とエネルギー検討委員会委員.

伴修平 (2006) 琵琶湖環境とエネルギー検討委員会, 生態系, 水質専門部会委員.

伏見碩二 (2006) 犬上川を豊にする会, 会長.

伏見碩二 (2006) 探検の殿堂運営協議会, 会長.

伏見碩二 (2006) ネパール環境教育開発センター, 監査委員.

浜端悦治 (2006) 滋賀県生きもの総合調査専門委員.

浜端悦治 (2006) 近江八幡市環境審議会委員.

浜端悦治 (2006) 早崎内湖再生計画検討委員.

浜端悦治 (2006) 滋賀県生物環境アドバイザー.

浜端悦治 (2006) 科学研究費委員会専門委員.

肥田嘉文 (2006) 独立行政法人国立環境研究所 (環境リスク研究センター) 客員研究員.

國松孝男 (2006) 湖沼流域水環境保全手法確立調査検討会委員, 中四国農政局.

國松孝男 (2006) 信州大学山岳科学総合研究所外部評価委員.

三田村緒佐武 (2006) 滋賀県環境影響評価審査会委員.

三田村緒佐武 (2006) びわ湖フローティングスクール運営委員会委員.

三田村緒佐武 (2006) 滋賀県科学教育振興委員会委員.

三田村緒佐武 (2006) 国際湖沼環境委員会理事, 国際湖沼環境委員会.

三田村緒佐武 (2006) 淀川水系流域委員会委員, 国土交通省.

三田村緒佐武 (2006) 水圏環境動態調査評価委員会委員長, 環境科学技術研究所.

三田村緒佐武 (2006) 琵琶湖博物館総合研究共同研究審査委員会委員.

三田村緒佐武 (2006) 琵琶湖及び周辺河川環境に関する専門家グループ制度・委員, 国土交通省.

三田村緒佐武 (2006) 滋賀県国土利用計画審議会委員.

三田村緒佐武 (2006) 河川保全利用委員会・委員, 国土交通省.

三田村緒佐武 (2006) 河川レンジャーアドバイザー委員会・委員, 国土交通省.

三田村緒佐武 (2006) 理数大好き推進協議会・委員, 文部科学省.

三田村緒佐武 (2006) 姉川・高時川河川環境ワーキング・委員, 国土交通省.

2) 学会貢献

伴修平 (2006) 日本陸水学会Limnology編集委員.

伴修平 (2006) 日本プランクトン学会和文誌編集委員.

伏見碩二 (2006) 雪水学会, 理事.

浜端悦治 (2006) 日本景観生態学会専門幹事 (生態).

肥田嘉文 (2006) 日本水環境学会関西支部幹事.

近雅博 (2006) European Journal of Entomology, Editorial Board.

近雅博 (2006) 日本鞘翅学会・編集委員.

國松孝男 (2006) 日本水環境学会近畿支部会理事.

國松孝男 (2006) 水資源・環境学会理事.

丸尾雅啓 (2006) 日本分析化学会近畿支部幹事.

丸尾雅啓 (2006) 日本陸水学会近畿支部会庶務幹事.

丸尾雅啓 (2006) 日本分析化学会第55年会実行委員.

三田村緒佐武 (2006) 日本陸水学会, 幹事長.

三田村緒佐武 (2006) 日本陸水学会, 評議員.

3) 国際貢献・海外調査等

浜端悦治 (2006) モンゴルでの湖沼調査, 9月18日～10月3日.

近雅博 (2006) マルク諸島 (テルナテおよびハルマヘラ) 調査, 8月21日～9月2日.

三田村緒佐武, 赤塚徹志, 安積寿幸 (2006) 環境負荷が環日本海汽水湖の生態系変動と地球温暖化システムに及ぼす影響解析, 大韓民国・江原道, 永郎湖, 花津湖で共同観測, 2006年10月15日～10月22日.

9. マスメディアとの対応

1) TV、ラジオ番組への出演等

浦部美佐子 (2006) 「リアルタイム」リアル特集「憤激ルポ・異常繁殖! カワヒバリガイに襲われた街」, 日本テレビ, 2006年4月24日.

環境計画学科 環境社会計画専攻

1. 受賞

吉田徹, 石本貴之, 井手慎司 (2006) 環境システム計測制御研究発表会奨励賞, 水質汚濁負荷量の汚濁負荷原単位の算定と減少要因の特定に関する研究—滋賀県の産業系汚濁負荷を対象として—.

鶴飼修 (大成建設) (2006) 選定, 田園再生機構 持続可能なコンパクト都市モデルの創造, 既存共同住宅団地の再生に関する提案募集 (実施主体: 財団法人ベターリビング (国土交通省及び独立行政法人都市再生機構の委託により実施) (協力) 独立行政法人建築研究所, マンション再生協議会, 公共住宅事業者等連絡協議会).

2. 著書

金田章裕・石川義孝編 (2006) 日本の地誌8 近畿圏. 秋山道雄, II. 3. 6)「環境問題・自然保護」, II. 5. 1)「行政」, II. 5. 3)「エネルギー供給圏」, II. 5. 4)「地域開発と環境」, III. D. 2. 3)「湖西・湖北」, 朝倉書店, 東京.

土屋正春・伊藤達也編 (2006) 水資源・環境研究の現在. 毛徳華・秋山道雄・焦春萌「洞庭湖区における洪水・浸水災害の変動特性」, 成文堂, 東京.
(財)環境科学総合研究所編 (2006) みんなの環境シリーズ6「水と暮らす 遠い水, 近い水」, 井手慎司, 第1章「水を守る」, (財)環境科学総合研究所, 静岡県.

磯野弥生・除本理史編 (2006) 地域と環境政策—環境再生と「持続可能な社会」をめざして—, 除本理史・山内昌和・香川雄一, 第7章「沿岸域の環境再生に向けた市民の役割 神奈川県川崎市を事例として」, 勁草書房, 東京.

鹿沼市史編さん委員会 (2006) 鹿沼市史 通史編 近現代. 香川雄一, 2部1章4節 4章7節 3部2章4節・5節 5部1章1節 6部1章概説・1節・2節 2章概説・1節 3章概説・1節・2節・3節・4節 4章概説 付録「人口統計」, 鹿沼市, 鹿沼市.

宮内泰介編 (2006) コモンズをささえるしくみ—レジティマシーの環境社会学—. 近藤隆二郎, 3章「写されたシナリオの正統性と更新」, 新曜社, 東京.

土屋正春・伊藤達也編 (2006) 水資源・環境研究の現在. 仁連孝昭, 第1章「流域管理から流域ガバナンスへ」, 成文堂, 東京.

3. 論文(学会誌およびそれに準じる学術、技術雑誌およびプロシーディングに掲載されているもの)

井手慎司, 今井章雄, 田中佐代子(2006)湖沼における有機物汚濁指標の歴史的背景と問題点, 用水と廃水488(3):235-245.

米沢高明, 井手慎司(2006)滋賀県内における自然を活用した環境学習と学校ビオトープ整備の実態について, 環境システム研究論文集34:117-122.

二村昌輝, 井手慎司(2006)野洲川流域における森林および河川ボランティア団体メンバーの流域環境保全意識の違いについて, 環境システム研究論文集34:89-96.

木村道徳, 井手慎司(2006)インターネット上のPRTR情報ネットワーク構造の把握に関する研究—ネットワーク分析を用いた分析手法の提案—, 環境システム研究論文集34:267-276.

松尾さかえ, 井手慎司(2006)小中の湖の干拓前の状況と機能, 維持管理手法に関する調査研究—弁天湖を中心として—, 環境システム研究論文集34:75-82.

吉田徹, 石本貴之, 井手慎司(2006)水質汚濁負荷量の汚濁負荷原単位の算定と減少要因の特定に関する研究—滋賀県の産業系汚濁負荷を対象として—, 第18回環境システム計測制御(EICA)研究発表会34(2/3):227-234.

木村道徳, 井手慎司(2006)環境活動のためのソーシャルキャピタルの形成を目指したソーシャルネットワーク構築Webサイトに関する研究—びわこ市民研究所を事例として—, 環境情報科学論文集20:403-408.

福江岬, 井手慎司(2006)環境リスク削減に対する支払意思額(WTP)に関する研究—WTP比を用いた政策決定ツールの提案—, 環境システム研究論文発表会講演集34:91-98.

石本貴之, 井手慎司(2006)琵琶湖集水域における下水道終末処理場のマテリアルフロー解析, 環境システム研究論文発表会講演集34:223-229.

山内昌和, 除本理史, 香川雄一(2006)埋立と漁業世帯の経済状態—戦後の川崎市のノリ養殖業を事例に—, 漁業経済研究50-3:53-73.

金谷健, 宮腰裕章(2006)企業における環境報告書等の公表媒体選択の実態と理由, 公表内容の推移, 環境システム研究論文集34:327-334.

近藤隆二郎, 仁賀崇之(2006)「舎廬夢ヒュッテ」におけるホスピタリティに関する研究—エコセンターとしてのペンションの可能性—, HOSPITALITY第13号:39-50.

村上浩継, 近藤隆二郎(2006)環境基本計画策定後における市民参加型ワークショップに関する研究—旧野洲町「環境フェスタ」と彦根市「市民環境フォーラム」を対象として—, 環境システム研究論文集 Vol.34:9-19.

樋口幸永, 近藤隆二郎(2006)『婦人之友』誌におけるライフスタイル提案の変遷—「家庭生活の合理化」の100年—, 環境システム研究論文集 Vol.34:353-363.

小田憲治, 近藤隆二郎(2006)市民による「色彩参画」と街並みの景観イメージとの関係に関する研究, 日本都市計画学会学術研究論文集41:511-516.

西村洋子, 近藤隆二郎(2006)墨田区「小さな博物館」における館長意識の継続性と世代交代に関する研究, 日本都市計画学会学術研究論文集41:653-658.

近藤隆二郎(2006)誰のための歴史・文化遺産なのか?—歴史・文化のシナリオ・デザイン, 環境情報科学35-1, 41-48.

錦澤滋雄(2006)地域の環境共生に向けた社会的合意形成—対話の場の形成と運用—, 計画行政:29(4):29-35.

林玲子, 原科幸彦, 錦澤滋雄(2006)ステークホルダー会議への分科会導入による議論ダイナミクスの分析—屋久島将来計画を議題とした社会実験での議論—, 環境情報科学論文集:20:165-170.

鶴飼修(大成建設)(2006)CO2ポイント制度を活用した既存共同住宅団地再生の可能性, アーバンインフラ・テクノロジー推進協議会第18回技術研究発表論文集CD.

4. 報告書、その他著作、一般向け記事

1) 科研費他外部研究費による研究の成果報告書

仁連孝昭, 金谷健, 井手慎司, 高橋卓也, 小幡範雄, 若井郁次郎, 志賀文昭, 前川昭, 米田稔, 小松直樹, 市木繁和, 吉田徹, 林周(2006)滋賀県の産業とマテリアル・フロー, 滋賀県地域結集型共同研究事業「シーケンシャル・ユース評価手法の開発」研究グループ中間報告書, 1-80, 2006年11月.

錦澤滋雄(2006)平成17年度ものづくり交流支援事業 ひこね元気のタネ発見ワークショップ報告書(環境編), 彦根商工会議所:31-45.

鶴飼修(タイセイ総研)(2006)新たなセルフデマンドコミュニティを創造するコミュニティビジネ

- スモデルの構築, 諏訪商工会議所・諏訪TMO (平成17年度中小企業庁補助事業「中小商業ビジネスモデル連携支援事業」).
- 鶴飼修 (タイセイ総研) (2006) 新たなセルフデマンドコミュニティを創造するコミュニティビジネスモデルの構築, 平成17年度中小商業ビジネスモデル連携支援事業報告書, 11-12.
- 2) 受託研究等の報告書
- 井手慎司 (2006) (財)国際湖沼環境委員会 平成17年度環境省請負業務報告書, 湖沼管理における住民と地方自治体とのパートナーシップの促進に関する調査.
- 近藤隆二郎 (2006) 高野町における「シナリオ」と「場」, 歴史街道モデル事業評価検討報告書, 歴史街道推進協議会, 2006年3月.
- 3) 新聞、一般向け雑誌等への解説記事など
- 井手慎司 (2006) 「特集：琵琶湖総合保全に果たす流域協議会の役割～流域協議会の特徴と可能性について～」, 環境科学部年報第10号, 2006年3月.
- 香川雄一 (2006) (書評) Judy Allen (2001) The Blue Death, Hodder Children's Books, London, 地理科学61-1: 50-52.
- 香川雄一 (2006) (書評) 中谷友樹・谷村 晋・二瓶直子・堀越洋一編著 (2004) 保健医療のためのGIS, 古今書院, 東京, 地理学評論79-10: 542-543.
- 香川雄一 (2006) (翻訳) 幕末から明治にかけての川崎地域における地方指導者 (Neil L. Waters (1981) Local Leadership in the Kawasaki Region From Bakumatsu to Meiji, The Journal of Japanese Studies 7-1: 53-83), 京浜歴史研年報18: 37-57.
- 金谷健 (2006) 心を育てるリサイクル, Nocco: 監修2-9, 執筆6-7, 2006年11月号.
- 近藤隆二郎 (2006) 自転車生活., 毎日新聞文化面「風の響き」, 2006年1月20日.
- 近藤隆二郎 (2006) 身体的参加と五感, 毎日新聞文化面「風の響き」, 2006年2月17日.
- 近藤隆二郎 (2006) 想像力, 毎日新聞文化面「風の響き」, 2006年3月18日.
- 近藤隆二郎 (2006) 野洲エコツアーを是非!, 環境を考える会広報紙「すいんきんぐ」No.15, 2006年3月30日.
- 錦澤滋雄 (2006) 「私の環境学: 和製合意形成手法の構築を目指して」, 環境科学部年報第10号, 2006年3月.
5. 学会等への発表
- 香川雄一, 財城真寿美, 小口 高, 小池司朗, 山内昌和, 江崎雄治 (2006) 東京大都市圏における駅の乗降客数の分布に関する分析, 日本地理学会2006年春季学術大会, さいたま市.
- 香川雄一, 財城真寿美, 小口 高, 小池司朗, 山内昌和, 江崎雄治 (2006) 京阪神大都市圏における駅の乗降者数の分布に関する分析, 日本地理学会2006年秋季学術大会, 浜松市.
- York Ostermeyer and Takaaki Niren (2006) Passive house in Japan, 10th Conference of Passive Houses, Hannover, 19 May 2006.
- 仁連孝昭 (2006) 流域システムの価値と流域ガバナンス, 流域政策研究フォーラム設立総会及び講演会, 流域政策研究フォーラム, 草津市, 2006年9月24日.
- 錦澤滋雄 (2006) 計画づくりにおけるフォーラムの役割, 日本計画行政学会シンポジウム講演, 2006年4月1日, 中央大学駿河台記念館.
6. 研究会等、講演会、特別講義での発表
- 1) 研究会等における発表
- 秋山道雄 (2006) 河川と湖沼の持続可能な流域ガバナンスについて, 滋賀大学環境総合研究センター2005年度公開研究会, 草津市立市民交流プラザ, 2006年3月25日.
- 秋山道雄 (2006) 国土総合開発法から国土形成計画法への転換をめぐって, 地域政策研究会, ピアザ淡海, 2006年3月31日.
- 秋山道雄 (2006) 琵琶湖沿岸域における自然修復・再生の課題—沿岸域管理の視点から—, 琵琶湖ラムサール研究会, 滋賀県立大学, 2006年7月17日.
- 秋山道雄 (2006) 地域問題と環境計画, 地域政策研究会, シーパル須磨, 2006年8月22日.
- 秋山道雄 (2006) 琵琶湖集水域の水環境と住民の環境保全活動, 第1回環境用水研究会, ひと・まち交流館 (京都市), 2006年9月9日.
- 秋山道雄 (2006) 転換期の地域政策, 都市政策研究会, ひょうご震災記念21世紀研究機構, 2006年9月28日.
- 秋山道雄 (2006) イギリスとドイツの地域構造と地

- 域政策, 都市政策研究会, ひょうご震災記念21世紀研究機構, 2006年11月27日.
- 秋山道雄 (2006) 地域政策と環境政策の接点について, 地域政策研究会, ライズヴィルつがやま, 2006年12月29日.
- 仁連孝昭 (2006) 琵琶湖生態系へのヒューマンインパクト, ヒューマンインパクトセミナー, 総合地球環境学研究所, 京都市, 2006年7月14日.
- 林周, 仁連孝昭 (2006) マテリアル・フローから見た産業政策の課題, 滋賀県地域結集型共同研究事業平成18年度研究発表会, 滋賀県・(財)滋賀県産業支援プラザ・(独)科学技術振興機構, 2006年9月14日.
- 仁連孝昭 (2006) コメンテーター, 国際ワークショップ「琵琶湖の流域管理から始める地球環境学」, 総合地球環境学研究所プロジェクト3-1, 京都市, 2006年9月23日.
- 仁連孝昭 (2006) 経済と環境を結びつけた滋賀県産業分析, 持続可能な社会をめざす滋賀の産業—その現状と政策課題—(「シーケンシャル・ユース評価手法」研究グループ中間成果報告会), 財団法人滋賀県産業支援プラザ地域結集型共同研究事業プロジェクト推進室, 大津市, 2006年11月10日.
- 鵜飼修 (大成建設) (2006) CO2ポイント制度を活用した既存共同住宅団地再生の可能性, アーバンインフラ・テクノロジー推進協議会第18回技術研究発表会, 2006年11月9日.
- 2) 講演会
- 秋山道雄 (2006) 琵琶湖と集水域の現状と課題, 豊田地理学会巡検現地解説, 滋賀県立大学, 2006年8月11日.
- 秋山道雄 (2006) 環境地理, NPO環境技術支援センター2006年環境技術指導者養成講座, 大阪産業大学梅田サテライト, 2006年11月18日.
- 井手慎司 (2006) Lake Biwa-Environmental Education and Community Initiatives, Lake Balaton Partnership Programme-Connecting Partners in Tourism and Environmental Protection for Sustainable Lakes, Lake Balaton Development Coordination Agency, Balatonfured, Hungary, 2006年9月13日.
- 金谷健 (2006) 資源循環型社会の構築について—自治体の事業系ごみ対策—, 滋賀県廃棄物適正管理協議会合同部会, 滋賀県廃棄物適正管理協議会, 大津市, 2006年12月18日.
- 近藤隆二郎 (2006) 実践者/専門家—市民調査の可能性と課題—, 環境社会学会第34回セミナー, パネラー, 2006年12月9日(立教大学).
- 近藤隆二郎 (2006) 先進自治体の取り組みと将来シナリオ, 彦根市議会議員研修会講師, 2006年3月27日(彦根市役所).
- 近藤隆二郎 (2006) わがまちの「ものがたり」に参画していく方法, 愛荘町百人委員会発足記念講演会, 2006年6月24日(愛荘町).
- 近藤隆二郎 (2006) おうみ市民活動フォーラム『新しい公益を考えるマルチパートナーシップの時代』, パネラー, 淡海ネットワークセンター, 2006年11月7日(ピアザ淡海).
- 近藤隆二郎 (2006) わがまちの「ものがたり」に参画していく方法, 愛荘町百人委員会発足会講演, 2006年6月24日(愛荘町公民館).
- 近藤隆二郎 (2006) わがまちの再発見とものがたりづくり, 第8回近江歴史回廊大学, 2006年11月18日(滋賀会館).
- 近藤隆二郎 (2006): グループ討議「歴史を活かしたまちづくりのヒント」, ファシリテーター, 第8回近江歴史回廊大学近江戦国の道・実践クラス, 2006年6月3日(大津勤労福祉センター).
- 仁連孝昭 (2006) 滋賀県におけるエコ村プロジェクト, 日独シンポジウム「持続可能なコミュニティとエコ建築」, NPO法人エコ村ネットワーク, 大津市, 2006年2月13日.
- 仁連孝昭 (2006) エコ村の自前エネルギー計画, エコ村がめざす脱温暖化社会, 小舟木エコ村推進協議会, 近江八幡市, 2006年3月25日.
- 仁連孝昭 (2006) 環境と経済の好循環に向けて, 滋賀県化学職員同友会総会, 大津市, 2006年6月30日.
- 仁連孝昭 (2006) 環境分野における新たな政策手法の導入—小流域の視点から—, シリーズ「びわこ環境セミナー」, 滋賀県琵琶湖環境部, 大津市, 2006年8月23日.
- 仁連孝昭, 村上修一 (2006) 長浜米原まんなかまちづくり, コンパクト・コミュニティをめざして, 長浜米原まんなか夢のまちづくり会議, 長浜市, 2006年9月20日.
- 仁連孝昭 (2006) 環境に負荷を与えない社会・経済の構築に向けて, 持続可能な滋賀社会づくりフォーラム, 滋賀県琵琶湖環境部, 米原市, 2006年10月25日.
- 仁連孝昭 (2006) 環境情報, 環境技術指導者養成講座, NPO環境技術支援センター, 大阪産業大学梅田サテライト, 2006年11月18日.
- 仁連孝昭 (2006) 暮らしを包むまちづくり, 長浜米

原まんなかまちづくりシンポジウム, 長浜米原まんなか夢のまちづくり会議, 長浜市, 2006年12月2日.

仁連孝昭 (2006) 今なぜLOHASか (小舟木エコ村開発計画), 海外デザインマネジメント研究会第1回研究会, ?国際デザイン交流協会, 大阪市, 2006年12月6日.

錦澤滋雄 (2006) 協働による持続可能社会の構築, 彦根市民環境スクール講演, 2006年1月14日, ひこね燦ばれす.

錦澤滋雄 (2006) 市民意向の聴取と社会的合意形成, 淀川水系流域委員会・意見聴取反映WG作業検討会講演, 2006年8月24日, 京都ばるるプラザ.

鵜飼修 (2006) 「コミュニティ・ビジネス」 起業のポイント, 荒川区コミュニティ・ビジネス起業講座, 2006年11月17日, 11月24日.

3) 授業

近藤隆二郎 (2006) インドと日本, 若葉小学校特別講演会, 講師, 2006年3月6日 (彦根市立若葉小学校).

近藤隆二郎 (2006) 滋賀県立環境科学部ってこんなにおもしろい, 講師, 2006年12月7日 (滋賀県立彦根翔陽高校).

仁連孝昭 (2006) Taking into account of stakeholder interests and restoration of resource values, JICA研修, 総合的湖沼環境管理コース, 草津市, 2006年2月3日.

仁連孝昭 (2006) 持続可能な社会・経済システムをエコ村から展望する, 理工学部特別講義, 龍谷大学理工学部, 2006年11月29日.

7. 競争的研究資金の導入

1) 科学研究費補助金

秋山道雄 (研究代表者) 他7名. 地域再生に寄与する新たな地域政策の可能性に関する研究, 基盤研究(B)(2), 2005~2006年度, 310万円.

浜谷正人・大西宏治・香川雄一. 都市近郊農村における社会的・政治的ポリティクス, 萌芽研究, 平成18~19年度, 280万円.

原科幸彦, 錦澤滋雄, 松本安生. 戦略的環境アセスメントにおける評価手法に関する研究, 基盤研究(B)(2), 研究分担者, 2004~2006年度, H18:470万円.

原科幸彦, 坂野達郎, 錦澤滋雄. 戦略的環境アセス

メントにおける参加制度と手法の国際比較, 基盤研究(A)(海外学術調査), 研究分担者, 2006~2008年度, H18:780万円.

籠義樹, 原科幸彦, 村山武彦, 錦澤滋雄ほか10名. 環境計画・政策研究の展開, 研究成果公開促進費, 執筆分担者, 2006年度, H18:100万円.

2) 政府および地方公共団体 (関連法人を含む) からの補助金

仁連孝昭, 金谷健, 井手慎司, 高橋卓也, 小幡範雄, 若井郁次郎, 吉田徹, 林周. 環境調和型産業システム構築のための基盤技術の開発 (研究3-②シーケンシャル・ユースの評価手法の開発), 滋賀県地域結集型共同研究事業 ((独) 科学技術振興機構), 2003年1月~2007年12月, 1754.1万円.

8. 研究員の受入

吉田徹, 林周, 仁連孝昭. (財)滋賀県産業支援プラザ・地域結集型共同研究事業プロジェクト推進室・主任研究員, 産業廃棄物を含む産業連関表の構築, 2007年12月まで.

York Ostermeyer, 仁連孝昭. 客員研究員, エネルギー効率性とパッシブ・ソーラー, 2006年9月まで.

9. 社会への貢献

1) 各種委員会等

秋山道雄 (2006) 彦根市公共交通機関検討委員会委員, 彦根市, 2回.

秋山道雄 (2006) ひょうご震災記念21世紀研究機構上級研究員, 3回.

井手慎司 (2006) 世界湖沼ビジョン行動集作業部会委員, (財)国際湖沼環境委員会, 1回.

井手慎司 (2006) 琵琶湖・淀川流域圏再生有識者委員会委員, 国土交通省近畿地方整備局, 1回.

井手慎司 (2006) 赤野井湾流域流出対策推進会議会長, 滋賀県環境管理課, 55回.

井手慎司 (2006) 滋賀県国民保護協議会委員, 滋賀県総合防災課, 2回.

井手慎司 (2006) 滋賀県施策・事業仕分け会議委員, 滋賀県行政経営改革室, 9回.

井手慎司 (2006) 大津市環境審議会 (+ 専門委員会) 委員, 大津市, 5回.

井手慎司 (2006) 近江八幡市環境審議会 会長, 近

- 江八幡市, 2回.
- 井手慎司 (2006) 愛荘町環境基本計画審議会 会長, 愛荘町生活課, 2回.
- 井手慎司 (2006) おうみNPO活動基金運営委員会 委員長, 淡海文化振興財団, 3回.
- 井手慎司 (2006) 琵琶湖流域ネットワーク委員会 運営委員長, 滋賀県水政課, 5回.
- 井手慎司 (2006) 滋賀県エコ・スクール評価委員会 委員長, 滋賀県エコライフ推進課, 1回.
- 井手慎司 (2006) インド湖沼会議国内調整会議 委員, (財)国際湖沼環境委員会, 1回.
- 香川雄一 (2006) 総合地球環境学研究所 共同研究員, 3回.
- 香川雄一 (2006) 国立歴史民俗博物館 共同研究員, 4回.
- 香川雄一 (2006) 東京大学空間情報科学研究センター客員研究員, 2回.
- 金谷健 (2006) 滋賀県不法投棄防止対策検討委員会 委員長代理, 滋賀県, 2回.
- 金谷健 (2006) 廃棄物の資源化仲人事業検討会 委員, 滋賀県, 1回.
- 金谷健 (2006) 廃棄物の地域内循環システム構築事業検討委員会 委員長, 滋賀県湖東地域振興局, 1回.
- 金谷健 (2006) 「クリーンセンター淡海」環境監視委員会委員長, 滋賀県環境事業公社, 3回.
- 金谷健 (2006) 企業間連携によるゼロエミッションの推進に関する調査検討委員会 委員, 滋賀県産業支援プラザ, 2回.
- 金谷健 (2006) 彦根市総合発展計画審議会 委員, 彦根市, 1回.
- 金谷健 (2006) 彦根市総合発展計画審議会 調整会議, 委員, 彦根市, 1回.
- 金谷健 (2006) 彦根市総合発展計画審議会 環境・安全部会 部会長, 彦根市, 1回.
- 金谷健 (2006) ごみゼロプラン推進委員会 委員, 三重県, 4回.
- 金谷健 (2006) 産業廃棄物処理施設変更許可申請に関する共同調査会議 専門委員, 三重県, 1回.
- 金谷健 (2006) 土壌汚染対策専門委員, 三重県, 1回.
- 金谷健 (2006) 不法投棄等の是正推進事業補助金交付認定審査会 委員, 三重県, 1回.
- 金谷健 (2006) 草津市廃棄物減量等推進審議会 委員, 草津市, 4回.
- 金谷健 (2006) 敦賀市リサイクル推進対策検討委員会 委員, 敦賀市, 1回.
- 金谷健 (2006) 敦賀市リサイクル推進対策検討委員会 資源ごみ部会 部会長, 敦賀市, 3回.
- 金谷健 (2006) 八幡市環境審議会 委員, 八幡市, 2回.
- 近藤隆二郎 (2006) 旧街道を活用した道路整備に関する勉強会, 座長, 国土交通省滋賀国道事務所, 2回.
- 近藤隆二郎 (2006) NPO法人五環生活, 代表理事 35回.
- 近藤隆二郎 (2006) NPO法人環境を考える会, 理事 1回.
- 近藤隆二郎 (2006) NPO法人+arts(プラスアーツ), 理事 1回.
- 近藤隆二郎 (2006) 歴史街道評価ワーキング, 委員, 歴史街道推進協議会, 3回.
- 近藤隆二郎 (2006) シーニック・パイウェイ琵琶湖・中山道検討会, 委員, 歴史街道推進協議会, 2回.
- 近藤隆二郎 (2006) 近江中山道を楽しむ会, 代表, 5回.
- 近藤隆二郎 (2006) 湖東地域交通安全ワークショップ, アドバイザー, 滋賀県湖東地域振興局, 3回.
- 近藤隆二郎 (2006) 琵琶湖塾, 企画員/アドバイザー, 滋賀総合研究所, 11回.
- 近藤隆二郎 (2006) ひこね自転車生活を考える会, 代表→運営委員, 15回.
- 近藤隆二郎 (2006) 滋賀県顔出し看板発掘再生新規開発委員会, 委員, 5回.
- 近藤隆二郎 (2006) (財)淡海文化振興財団, 理事, (財)淡海文化振興財団, 1回.
- 近藤隆二郎 (2006) 滋賀県地球温暖化防止活動推進センター運営委員会, 委員長, (財)淡海環境保全財団, 1回.
- 近藤隆二郎 (2006) 彦根市環境パートナー委員会, 委員長, 彦根市生活環境課, 4回.
- 近藤隆二郎 (2006) 野洲市環境審議会, 委員, 野洲市環境経済部環境課, 2回.
- 近藤隆二郎 (2006) 彦根市環境団体ネットワーク (仮称)企画委員, 彦根市生活環境課/彦根市環境市民会議, 4回.
- 近藤隆二郎 (2006) 和歌山市まちなか街道案内サービス研究協議会, アドバイザー, 和歌山市まちおこし推進課, 5回.
- 仁連孝昭 (2006) 滋賀県基本構想審議会委員, 1回.
- 仁連孝昭 (2006) 滋賀県環境審議会専門委員, 2回.
- 仁連孝昭 (2006) 滋賀県持続可能な社会づくり構想検討委員会 委員, 2回.
- 仁連孝昭 (2006) 滋賀県琵琶湖水環境ビジョン検討委員会 委員, 2回.

仁連孝昭 (2006) 京都市環境審議会 委員, 5回。
仁連孝昭 (2006) 地下水検討専門委員会 委員, 愛知郡広域行政組合・東近江市, 3回。
仁連孝昭 (2006) 彦根市工場設置奨励審査会 委員, 1回。
仁連孝昭 (2006) 米原市環境審議会 委員, 3回。
仁連孝昭 (2006) 長浜市地域経営改革会議委員, 6回。
仁連孝昭 (2006) 滋賀県琵琶湖・環境科学研究センター評議員会委員 (外部評価委員会委員長), 2回。
仁連孝昭 (2006) 環境フォーラム湖東 代表, 4回。
仁連孝昭 (2006) 滋賀県地域結集型共同研究事業共同研究推進委員会委員, 2回。
仁連孝昭 (2006) 企業間連携によるゼロエミッション化の推進に関する調査検討委員会 委員, 4回。
仁連孝昭 (2006) NPO法人エコ村ネットワーク 理事長, 12回。
仁連孝昭 (2006) 小舟木エコ村推進協議会 会長, 2回。
仁連孝昭 (2006) 関西エコステージ研究会第3者評価委員会 委員, 4回。
土屋正春 (2006) 彦根市環境審議会 委員長, 1回。
土屋正春 (2006) 京エコロジーセンター 部会コーディネーター, 1回。
土屋正春 (2006) グリーン購入ネットワーク 理事, 1回。
土屋正春 (2006) 滋賀県産業廃棄物不法投棄対策委員会 委員長, 1回。
土屋正春 (2006) 大阪府職員研究研修センター 部会コーディネーター, 1回。
鶴飼修 (2006) NPO法人大森まちづくりカフェ 代表理事, 4回。
鶴飼修 (2006) NPO法人大森コラボレーション 理事, 理事会3回。
鶴飼修 (2006) CBNコミュニティ・ビジネス・ネットワーク 事務局長, 4回。
鶴飼修 (2006) NPO法人大牟田・荒尾炭鉱のまちファンクラブ 副理事長, 4回。

2) 学会貢献

秋山道雄 (2006) 日本地理学会代議員会代議員, 2回。
秋山道雄 (2006) 人文地理学会評議員会評議員, 3回。
秋山道雄 (2006) 人文地理学会公開セミナー企画委員会委員長, 3回。

秋山道雄 (2006) 経済地理学会評議員会評議員, 1回。
秋山道雄 (2006) 水文・水資源学会編集出版委員会編集出版委員, 2回。
秋山道雄 (2006) 地域地理科学会関西支部副部長, 1回。
秋山道雄 (2006) 歴史地理学会第49回大会実行委員会委員, 3回。
井手慎司 (2006) 環境システム計測制御学会, 編集委員長, 12回。
香川雄一 (2006) 人文地理学会選挙管理委員会委員, 4回。
香川雄一 (2006) 人文地理学会編集委員会委員, 3回。
近藤隆二郎 (2006) 土木学会環境システム委員会, 委員兼幹事 1回。
仁連孝昭 (2006) 水資源・環境学会 事務局長, 6回。
仁連孝昭 (2006) 環境技術学会 編集委員, 1回。
仁連孝昭 (2006) 流域政策フォーラム 代表, 3回。

3) 国際貢献

井手慎司 (2006) Conservation and Citizen activities for Environment, JICA湖沼環境保全のための統合的湖沼流域管理コース, (財)国際湖沼環境委員会, (財)国際湖沼環境委員会, 2006年2月8日。
井手慎司 (2006) Fundamental Knowledge of Water Quality, Data Processing, JICA湖沼環境保全のための統合的湖沼流域管理コース, (財)国際湖沼環境委員会, (財)国際湖沼環境委員会, 2006年3月2日。
井手慎司 (2006) Lake Modeling, JICA湖沼環境保全のための統合的湖沼流域管理コース, (財)国際湖沼環境委員会, (財)国際湖沼環境委員会, 2006年3月3日。
井手慎司 (2006) Final Report Presentation & Synthesis Discussion, JICA湖沼環境保全のための統合的湖沼流域管理コース, (財)国際湖沼環境委員会, (財)国際湖沼環境委員会, 2006年3月10日。
井手慎司 (2006) 環境問題基礎 (琵琶湖の水管理), JICA水環境を主題とする環境教育研修, (財)国際湖沼環境委員会, (財)国際湖沼環境委員会, 2006年9月8日。

4) その他

近藤隆二郎 (2006) 平成18年度第2回[現代GP]地域と大学を考えるシンポジウム／パネルトーク、コーディネーター、2006年2月23日(滋賀県立大学交流センター)。

近藤隆二郎 (2006) 平成18年度第3回[現代GP]地域と大学を考えるワークショップ／ファシリテーター、2006年3月23日(滋賀県立大学環境科学部談話室1)。

近藤隆二郎 (2006) 木匠塾シンポジウム／パネラー、2006年2月17日(滋賀県立大学)。

近藤隆二郎 (2006) 第2回シガリントク!(滋賀に輪タクを走らせるプロジェクト)、コーディネーター、2006年2月26日(彦根市民会館)。

近藤隆二郎 (2006) 中山道宿場会議、コーディネーター、2006年3月25日(愛知川公民館)。

近藤隆二郎 (2006) 「私たちが考える彦根築城400年祭!」作品展—滋賀県立大学生による企画提案事例作品展、コーディネーター、2006年2月20日～27日(滋賀中央信用金庫銀座支店2階ギャラリー)+2006年3月6日～9日(彦根市役所1階ロビー)。

近藤隆二郎 (2006) グループ討議／ファシリテーター、第7回近江歴史回廊大学、2006年6月3日(大津市勤労福祉会館)。

近藤隆二郎 (2006) イベント演習in「フリーマーケットコミュニティ2006」、コーディネーター、2006年7月15日(滋賀県立文化産業会館)。

近藤隆二郎 (2006) 彦根市庁内環境フォーラムワークショップ「エコシティ彦根のものがたりづくり」、ファシリテーター、彦根市生活環境課、2006年11月10日(彦根市役所)。

錦澤滋雄 (2006) ひこね元気の「タネ」発見ワークショップ、コーディネーター、2006年2月24日、3月10日、彦根商工会議所。

鵜飼修 (2006) 都市再生モデル調査 弥彦村景観デザインガイドライン策定ワークショップ、ファシリテーター、2006年11月15日、11月26日。

鵜飼修 (2006) エコテクノ2006パネルディスカッション「九州の環境ビジネスとNPOの協働の可能性」、コーディネーター、2006年11月23日。

鵜飼修 (2006) ふれあいパークいろは塾ワークショップ、ファシリテーター、大田区協働実験塾、2006年12月2日。

10. マスメディアとの対応

1) 新聞、雑誌等からの取材による記事

井手慎司 (2006) 琵琶湖からのメッセージ「CODが増加傾向」。京都新聞滋賀版、2006年10月30日。

近藤隆二郎 (2006) 自転車タクシー走れ彦根城下、京都新聞、2006年1月17日。

仁連孝昭 (2006) 人と人を結び、人と環境をつなぎ、生命に共感する「小舟木エコ村」、博報堂 エコソス03 (P18)、2006年8月20日。

仁連孝昭 (2006) 持続可能な社会を実証する日本発のエコ村がこの秋着工、月刊環境ビジネス (P60)、2006年10月1日。

仁連孝昭 (2006) 「持続可能なコミュニティ、琵琶湖畔『エコ村』から考える」、関西電力メールマガジン『時代を解くキーワード・Insight』、2006年11月15日。

2) TV、ラジオ番組への出演等

仁連孝昭 (2006) WATER FOREST 21、森谷威夫のお世話になります、KBS京都ラジオ、2006年12月20日。

仁連孝昭 (2006) 土清水縁の日曜音楽館、MBSラジオ、2006年12月31日。

環境計画学科 環境・建築デザイン専攻

1. 受賞

柴田いづみ, 柴田知彦 (2006) エルザ世田谷 (集合住宅) 環境共生住宅認定.

布野修司 (2006) 日本都市計画学会論文賞 (『近代世界システムと植民都市』, 京都大学学術出版会, 2005年).

松岡拓公雄他2名 (2006) 日本建築学会作品選奨 2006, 札幌市, ガラスのピラミッド.

松岡拓公雄他2名 (2006) 日本建築学会作品選 2006, 札幌市, ガラスのピラミッド.

2. 著書

藤原悌三, 布野修司, 共編著 (2006) 安全・快適・まちづくり 滋賀県立大学環境科学部.

柴田いづみ, 柴田知彦, 以下21名共著 (2006) 「まちへ」日刊建設通信新聞社, 東京.

水原 渉, 他 (編) (2006) 小泉「構造改革」と自律の地域づくり～持続可能な滋賀を求めて～, 2006.03, 滋賀自治体問題研究所.

布野修司 (2006) 『曼荼羅都市—ヒンドゥー都市の空間理念とその変容—』, 京都大学学術出版会, 2006年2月28日, 単著.

布野修司 (2006) 『建築家前川國男の仕事』, 生誕100年前川國男建築展実行委員会, 美術出版社, 2006年4月, 共著.

布野修司 (2006) 『『室内』の52年 山本夏彦が残したもの』, INAX出版, 2006年9月15日, 共著.

布野修司 (2006) 『前川國男 現代との対話』, 松隈洋編, 六曜社, 2006年10月, 共著.

布野修司 (2006) 『都市の暮らしの民俗学3 都市の生活リズム』, 新谷尚紀, 岩本通弥編, 吉川弘文館, 2006年12月, 共著.

布野修司 (2006) 『地域から—私の美し国づくり』, 日刊建設通信社, 2006年12月, 共著.

松岡拓公雄他 (2006) 「団地再生まちづくり」, 水曜社.

日本建築学会編 (2006) 建築デザイン学事典, 高柳英明, 第14章, 井上書院, 東京.

日本建築学会編 (2006) 建築・都市計画のための空間学事典[改定版], 高柳英明, 第9章「ダイアグラム, CG」, 井上書院, 東京.

平尾和洋・末包伸吾編著 (2006) テキスト建築意匠, 山本直彦, 3章「戦後日本の建築」および7章「建築のかたち」, 学芸出版社, 京都.

3. 論文 (学会誌およびそれに準じる学術, 技術雑誌およびプロシーディングに掲載されているもの)

韓勝旭, 布野修司, リムボン (2006) 土地所有関係の変遷から見る在日コリアン集住過程の形成過程に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第599号, pp95-101, 2006年1月.

ナウィット・オンサワンチャイ, 桑原正慶, 布野修司 (2006) アユタヤ旧市街の居住環境特性とショップハウスの類型に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第601号, pp25-31, 2006年3月.

池尻隆史, 安藤正雄, 布野修司, 山根周, 片岡巖 (2006) ネイティブタウン (インド, ムンバイ) におけるチョールの類型に関する研究, 日本建築学会計画系論文集, 第603号, pp37-44, 2006年5月.

柳沢究, 大辻絢子, 布野修司 (2006) マドゥライ (タミル・ナードゥ州, インド) の都市形成と棲み分けの構造, 日本建築学会計画系論文集, 第605号, pp93-99, 2006年7月.

Nawit Ongsavangciiai, Shuji Funo (2006) Spatial Organization of Shop house in Market towns in the Central Plains of Thailand, J. Archit. Plann. AIJ, No. 606, pp9-16, Aug, 2006.

山田協太, 前田昌弘, 村上和, 布野修司 (2006) ヴォルフエンダール (コロンボ, スリランカ) の街区構成と住居類型に関する考察, 日本建築学会計画系論文集, 第607号, pp71-78, 2006年9月.

趙聖民, 布野修司, 韓三建 (2006) 日本植民統治期における韓国密陽・三浪津邑の都市形成と土地所有変化に関する考察—旧日本人町に着目して—, 日本建築学会計画系論文集, 第607号, pp79-86, 2006年9月.

山田協太, 布野修司 (2006) オランダ東インド会社 (VOC) によるフォート・コーチン (ケーララ, インド) の再編に関する考察, 日本建築学会計画系論文集, 第608号, pp81-87, 2006年10月.

陶器浩一, 源田考司, 北村義也 (2006) : ガラス制振壁を用いた伝統木造建物の耐震改修, 日本建築学会技術報告集 2006.12

今村広大, 村上修一 (2006) アクセス性からみた琵琶湖湖岸緑地と隣接集落とのつながりについての研究 (査読付), ランドスケープ研究Vol.69 (5), 623-626.

表谷篤慶, 村上修一 (2006) 棚田景観観賞のための空間条件に関する研究, 都市計画報告集, Vol.4-4, pp.91-94.

松本浩平, 村上修一 (2006) モノレール遺構の都市景観における位置づけに関する研究, 都市計画報

- 告集, Vol.4-4, pp.95-98.
- 村上修一 (2006) 歴史的頭首工の親水空間としての可能性—桂川一の井堰の利用観察調査をとおして, 都市計画報告集, Vol.5-2, pp.59-62.
- 村上修一 (2006) 歴史的頭首工の親水空間としての可能性—仁淀川八田堰の利用観察調査をとおして, 都市計画報告集, Vol.5-3, pp.82-85.
- 富島義幸 (2006) 「平泉柳の御所遺跡の建築についての一考察」, 岩手県教育委員会『平泉文化研究年報』第6号 (2006年3月), 1-10頁.
- 富島義幸 (2006) 「平泉建築の復元—考証と課題—」, 宮城歴史科学研究会『宮城歴史科学研究』第60号 (2006年7月), 38-52頁.
- 富島義幸 (2006) 「推定中川寺成身院指図について」, 醍醐寺文化財研究所『研究紀要』第21号 (法蔵館, 2006年10月), 199-228頁.
- 富島義幸 (2006) 「京都国立博物館蔵『高野山水屏風』にみる大伝法院関係の伽藍・建築」, 根来寺文化研究所『根来寺文化研究所紀要』第3号 (2006年10月), 1-2, 11-20頁.
- 高柳英明, 長山淳一, 渡辺仁史 (2006) 歩行者の最適速度保持行動を考慮した歩行行動モデル-追従相転移現象に基づく解析数理-, 日本建築学会計画系論文集No606: 63-70
- 廣川祐子, 高柳英明, 服部岑生, 鈴木雅之 (2006) 大学キャンパスにおけるリフレッシュ空間の創造に関する研究-ベンチを用いた歩行実験に基づくデザインシミュレーション-, 日本建築学会大会学術講演梗概集E-1: 367-368
- 小島尚人, 後藤信, 高柳英明, 服部岑生 (2006) 大規模小売店舗におけるマクロ流動制御手法に関する研究その1-利用客行動調査とモデル構築について-, 日本建築学会大会学術講演梗概集E-1: 491-492
- 後藤信, 小島尚人, 高柳英明, 服部岑生 (2006) 大規模小売店舗におけるマクロ流動制御手法に関する研究その2-シミュレーション構築とマクロ流動制御手法の検討-, 日本建築学会大会学術講演梗概集E-1: 493-494
- 山田悠子, 高柳英明, 服部岑生 (2006) 地下歩行空間における雑踏制御とそのデザイン・シミュレーション-, 日本建築学会大会学術講演梗概集E-1: 1093-1094
- 飯塚勤, 森藤章光, 高柳英明, 服部岑生 (2006) 駅空間の歩行者流動内における時系列視環境評価に関する研究その1-, 日本建築学会大会学術講演梗概集E-1: 1101-1102
- 東秋沙, 服部岑生, 中山茂樹, 高柳英明, 吉岡陽介 (2006) 近年の団地再生における環境資産の継承を指す計画手法, 日本建築学会大会学術講演梗概集E-2: 123-124
- 山本直彦, 牧紀男 (2006) バンダアチェ市 (インドネシア) におけるスマトラ沖地震後の復興住宅の初期供給プロセス, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (経済・住宅) F-1分冊, 1121-1122.
- 石塚祐至, 小澤雄樹, 山本直彦, 柳沢究, 平尾和洋, 井上真澄 (2006) 伝統的左官技術を用いた薄肉楕円体シェル構造の開発—シェルの概要と鉛直荷重載荷実験—, 日本建築学会大会学術講演梗概集 (構造) B-1分冊, 665-666.
- 平尾和洋, 上田崇博, 井上真澄, 山本直彦 (2006) SMC供試体における物理量 (テクスチャと圧縮強度) と心理量の対応に関する研究, 日本建築学会近畿支部研究報告集 (計画系), 437-440.
- Uetani, K., M. Kobayashi and K. Higuchi (2006) Symmetry limit theory for work-hardening structures in the shakedown region. In: Proceedings of the Fifth International Conference on Behaviour of Steel Structures in Seismic Areas. F. M. Mazzolani and A. Wada (eds.), Taylor & Francis, 549-554.
- Kobayashi, M., K. Uetani and T. Mikami (2006) The occurrence limit of strain nonuniformity of thin-walled cylinders subjected to cyclic torsion, Key Engineering Materials 340-341: 1411-1416.

4. 作品

- 奥貫 隆, 高野裕子: 都市住宅+公共施設, 所沢元町北地区市街地再開発造園実施設計, 所沢市, 都市再生機構埼玉地域支社, 2006.3.
- 柴田いづみ, 柴田知彦: 集合住宅 エルザ世田谷設計・監理 (総合設計制度利用の地区開発計画) 東京都世田谷区 2002~2006.
- 柴田いづみ, 柴田知彦: 集合住宅 プラウド津田沼デザイン監修業務 千葉県船橋市・習志野市 2004~2006.
- 柴田いづみ, 柴田知彦: 集合住宅 プラウド八事石坂デザイン監修業務 愛知県名古屋市 2004~2006
- 柴田いづみ, 柴田知彦: 集合住宅 プラウド新小岩デザイン監修業務 東京都葛飾区 2004~2006.
- 松岡拓公雄: 伊藤邸 (都市住宅), 基本設計, 実施設計指導, 京都市.
- 松岡拓公雄: 三島ゲストハウス基本設計, 実施設計, 三島市

松岡拓公雄：金田邸（郊外型小住宅），実施設計，池田市。

松岡拓公雄：田無印刷工場，基本構想，東京都。

松岡拓公雄：エコ村エコハウスブロック構想，近江八幡市。

松岡拓公雄他1名：世界救世教東京聖堂コンペ（次点），東京都。

松岡拓公雄／新学科コアチーム：工学部電子システム学科棟基本構想。

岡田哲史，陶器浩一：たいさんじ風花の丘（滋賀県立大学受託研究：依頼者：高島市）：木造新工法（CSS）

岡田哲史，陶器浩一：若葉台の家：木造新工法（甲殻構造）

岡田哲史，陶器浩一：赤羽邸：木造新工法（在来＋枠組壁混合新工法）

宮本佳明，陶器浩一：明石の家 基本設計，実施設計：伝統工法建築の再生手法

高柳英明（2006）集合住宅MSA，企画・基本設計，実施設計，愛知県名古屋市，2005-2006。

高柳英明，遠藤寛子（2006）集合住宅SH，基本設計，実施設計，愛知県名古屋市，2005-2006。

5. 報告書，その他著作，一般向け記事

1) 科研費他外部研究費による研究の成果報告書

柴田いづみ（2006）平成17年度学術研究助成金，「自然再生に向けての基礎調査」，大阪市立大学（財）有恒会。

布野修司（2006）『ECO-HOUSE-TOWN報告書：発展途上地域（湿潤地帯）の大都市における居住地モデルの開発に関する研究』（科学研究費 基盤（B）2002-2005），2006年3月。

村上修一（2006）河川整備基金助成事業，平成17年度成果報告書，琵琶湖沿岸域における湖岸と人の関わり方の変化についての研究。

高柳英明，服部岑生（2006）東日本旅客鉄道株式会社，2005-2006研究報告書，駅環境における効果的なデザインシミュレーションに関する研究。

山本直彦（主査）他5名（2006）住宅総合研究財団，平成17～18年度研究成果報告書，伝統技術を活用した災害仮設住宅の建設技術開発に関する研究－左官技術を用いた自助建設型シェル構造ユニット－。

2) 受託研究等の報告書

富島義幸（2006）「地震と木造建築－中世前期にお

ける日本建築技術の一側面－」，『安全・快適・まちづくり』（藤原悌三代表，滋賀県立大学平成15年度特別研究「琵琶湖西岸断層帯を視野に入れた滋賀県および県内各市町村の地震防災対策の再構築」報告書，2006年3月），161-166頁。

小林正実（2006）2000年鳥取県西部地震に学ぶ－建物被害，地盤特性，構法，修理再建，住宅支援－，藤原悌三（研究代表者），平成15～17年度特別研究費，琵琶湖西岸断層帯を視野に入れた滋賀県および県内各市町村の地震防災対策の再構築：73～76。

轟 慎一（2006）滋賀県湖西地域における里山と棚田の景観構造と環境システム，藤原悌三，安全・快適・まちづくり，183-186。

3) 新聞，一般向け雑誌等への解説記事など

藤原悌三（2006）「想い」耐震構造から総合防災へそして，いま環境防災，自費出版。

藤原悌三（2006）「一期一会」我が歩み－藤原悌三論文集－ 自費出版。

奥貫 隆（2006）「特集：環境科学部の地域貢献と教育・研究／現代GPを活用した地域活性化への貢献」，環境科学部年報第10号，2006.3。

奥貫 隆（2006）湖国景観論／次代に引き継ぐ景観，藤原悌三退官記念論文集，安全・快適・まちづくり，滋賀県立大学環境科学部，2006.3

奥貫 隆（2006）「都市公園と景観形成／美しい公園を考える」，公園緑地VOL.66（社）日本公園緑地協会，2006.1

滝田 順，奥貫 隆（2006）「ノルマンディー豊饒の庭」No1-12，企画・構成，NIKKEI NET Living Style，日本経済新聞デジタルメディア，2006.1-12

奥貫 隆（2006）位置指定道路の管理責任，NIKKEI NET住宅サーチ，日本経済新聞デジタルメディア，2006.4。

奥貫 隆（2006）屋上緑化の不動産価値，NIKKEI NET住宅サーチ，日本経済新聞デジタルメディア，2006.5。

奥貫 隆（2006）マンション建設と近隣協議，NIKKEI NET住宅サーチ，日本経済新聞デジタルメディア，2006.12。

布野修司（2006）「前川罔男と戦後近代建築」，『前川罔男建築展 図録』，2006年1月。

布野修司（2006）「インド・イスラーム都市論ノート」，『traverse07』traverse編集委員会，京都大学・建築系教室，2006年。

布野修司（2006）「私の環境学：地域の生態系に基

- づく住居システムに関する研究」, 環境科学部年報第10号, 2006年.
- 布野修司 (2006) 「多様性に欠け, 貧困な日本の住まいと家族のあり方」書評西川祐子, 『図書新聞』, 2006年2月12日
- 布野修司 (2006) 「アジアの都市と集落」, 第七期神楽坂建築塾「講義録」VOL.16, 2006年2月,
- 布野修司 (2006) 「防災と景観—タウンアーキテクトの可能性—」, 藤原悌三退官記念論文集, 2006年3月.
- 布野修司 (2006) 風景のかけら 世界の集落を切りとる 鞍(鞍形屋根), KAJIMA月報, 2006年4月.
- 布野修司 (2006) 都市再生の本質—光と影のはざま—一秩序と混沌—「都市組織」と「都市住居」—私にとって都市の魅力, 『建築と社会』, 2006年4月.
- 布野修司 (2006) 私の紙面批評「再び胸を突く「1年前の衝撃」」, 『京都新聞』, 5月14日.
- 布野修司 (2006) インタビュー, 「ヨーロッパ世界観を覆す」, 『世界住居誌』『曼荼羅都市』をめぐって, 日刊建設工業新聞, 5月19日.
- 布野修司 (2006) 私の紙面批評「環境再生は世界共通テーマ」, 『京都新聞』, 6月11日.
- 布野修司 (2006) 書評「山本理顕『住居論』」, 『図書新聞』, 2006年3月12日.
- 布野修司 (2006) CEL
- 布野修司 (2006) 「近代世界システムと植民都市」, 都市計画学会賞受賞に当たって, 『都市計画』262, 2006年8月.
- 布野修司 (2006) 私の紙面批評「滋賀県知事選, 波乱の背景は?」, 『京都新聞』, 7月9日.
- 布野修司 (2006) 「読書アンケート'06上半期」, 図書新聞, 7月23日.
- 布野修司 (2006) 「審査後のモニタリングも必要」, 『日刊建設通信新聞』, 2006年7月20日.
- 布野修司 (2006) 「四面楚歌の建築家はどこへ向かうべき」居酒屋ジャーナル1, 『建築ジャーナル』No.1104, 2006年06月」.
- 布野修司 (2006) 建築ジャーナル・コンペ・インタビュー, 「「タウンアーキテクト」が選定方法を決め, 審査すればよい」, 建築ジャーナル』No.1104, 2006年06月.
- 布野修司 (2006) 「伊東豊雄論のためのメモランダム」, 『建築ジャーナル』No.1105, 2006年07月.
- 布野修司 (2006) 「藤森照信に問う」, 『ザ・藤森照信』, X-KnowledgeMook, 8月10日.
- 布野修司 (2006) 私の紙面批評「地域版は教材の宝庫」, 『京都新聞』, 8月13日.
- 布野修司 (2006) 私の紙面批評「防災への意識 紙面で検証を」, 『京都新聞』, 9月10日.
- 布野修司 (2006) 「清溪川「再生」の衝撃」, 『建築ジャーナル』, 2006年10月.
- 布野修司 (2006) 「『室内』から「世界」を斬る」, (『『室内』の52年—山本夏彦が残したもの』, INAX出版所収), 2006年9月.
- 布野修司 (2006) 「タウンアーキテクトの可能性 その2」, 『建築ジャーナル』, 2006年10月.
- 布野修司 (2006) 「建築が「文化」として共有されるには」居酒屋ジャーナル4, 『建築ジャーナル』, 2006年10月.
- 布野修司 (2006) 私の紙面批評「「景観と観光」掘り下げて」, 『京都新聞』, 10月8日.
- 布野修司 (2006) 「雛芥子の頃」, 著書の解題『神殿か獄舎か』, INAX REPORT No.168, 2006年10月20日.
- 布野修司 (2006) 「書評・『都市・建築の現在』」, 図書新聞, 2006年11月25日.
- 布野修司 (2006) 「nLDKの誕生—近代日本の都市住宅事情」, (『都市の暮らしの民俗学3—都市の生活リズム』, 新谷尚紀, 岩本通弥編, 吉川弘文館所収), 2006年12月.
- 布野修司 (2006) 「読書アンケート'06下半期」, 図書新聞, 12月23日.
- 松岡拓公雄 (2006) 「空水人のビジョン」/空水人/滋賀空調衛生設備協会機関誌.
- 松岡拓公雄 (2006) 「内井昭蔵の教育施設建築」/季刊文教施設23号.
- 大谷弘明, 陶器浩一, 北条稔朗, 古林桂太 (2006): 「積層の家」, STRUCTURE KANSAI, 2006.1 (社) 日本建築構造技術者協会, pp.2-3
- 岡田哲史, 加藤功, 陶器浩一 (2006): 若葉台の家 解説 新建築住宅特集 2006.10
- 岡田哲史, 陶器浩一 (2006): たいさんじ風花の丘 解説 新建築 2006.11
- 陶器浩一, 眞田大輔, 名和研二 (2006): 対談「普通の材料でつくる」新建築 2006.11
- 今村広太, 村上修一 (2006) 琵琶湖湖岸緑地における空間利用についての研究vol.2, 楓, 滋賀県造園技術者協議会発行, 第90号, pp.5-8.
- 村上修一 (2006) 大学は実践教育をとおして地域活性化にいかにかに貢献できるか—滋賀県立大学「ステューデントファーム近江楽座」の試み, 滋賀の経済と社会, (財)滋賀総合研究所, No.116, pp.36-39.
- 富島義幸 (2006) 平泉の文化遺産をユネスコ世界遺産センターに推薦する文化審議会文化財分科会での決定を受けてのコメント, 毎日新聞 地域のニュース (岩手) (2006年7月22日).

高柳英明, 株式会社AMS (2006) 建築IT -建築現場のプレゼンテーション術-, 日経アーキテクチュア 2006 6-12号(第824号), 80-81.

高柳英明 (2006) アーキファイル&ディテール 2006, 日経アーキテクチュア2006 3-20号(第816号), 88-89.

山本直彦 (2006) 研究の風景「滋賀県立大学山本直彦研究室」, 建築と社会2006年7月号, 日本建築協会, 18-19.

山本直彦 (2006) 「私の環境学：地域性を取り入れた新たな試みへ」, 環境科学部年報第10号, 2006年3月.

6. 学会等への発表

柴田いづみ (2006) 第6回mAAN 国際会議2006 「our modern/われらがモダン：アジア都市遺産を再認識する」第2セッション議長 mAAN (アジア近代建築ネットワーク) 2006.11.1~5.

水原 渉 (2006) ドイツにおける戦略的環境アセスメント制度の導入ー都市計画での適用, 日本建築学会2005年度大会 (関東) 学術講演梗概集 (都市計画), 2006.09.09 (発表番号7299) .

三品実穂 (フリー) ・水原 渉 (2006) 新田集落における町並み景観と住民意識に関する研究ー滋賀県能登川町栗見出在家を事例にして, 2006.09.08 (発表番号6040) .

Shuji Funo (2006) Colonial Urban Heritage and Asian Urban Traditions, Urban-Cultural Research Center, Graduate School of Literature and Human Sciences, The 21st Century COE Program, International Symposium, Osaka City University, 1st Oct., 2006:大阪市立大学大学院文学研究科, COE国際シンポジウム 2006年10月1日.

Shuji Funo (2006) Towards an Architecture based on Vernacular Values in the Regions: On Paradigm of Asian Studies for Architecture and Urban Planning, Keynote Speech, The 6th International Symposium on Architectural Interchange in Asia, "A+T: Neo-Value in Asian Architecture", October 25-28, 2006, Daegu Convention Center, Daegu, Korea.

Nawit Ongsavangchai, Shuji Funo (2006) Formation and Transformation of Shop houses in Khlong Suan Market Town: Proceedings Volume I, pp.9-14: The 6th

International Symposium on Architectural Interchange in Asia, "A+T: Neo-Value in Asian Architecture", October 25-28, 2006, Daegu Convention Center, Daegu, Korea.

Chung-Shin Park, Sung-Min Cho, Shuji Funo (2006) Formation and Residential Quarter Organization of a Korean Resident Village in UTORO of Kyoto, Japan: Poster Sessions, PS1-6: The 6th International Symposium on Architectural Interchange in Asia, "A+T: Neo-Value in Asian Architecture", October 25-28, 2006, Daegu Convention Center, Daegu, Korea.

Yusuke Nakagawa, Masahiro Maeda, Shuji Funo (2006) Consideration on Actual Conditions and Reconstruction Process of JAYAGATO PURA (Moratua, Sri Lanka) Damaged By Sumatra Earthquake and Indian Ocean Tidal Wave in 2004: Poster Sessions, PS1-12: The 6th International Symposium on Architectural Interchange in Asia, "A+T: Neo-Value in Asian Architecture", October 25-28, 2006, Daegu Convention Center, Daegu, Korea.

Masahiro Maeda, Yusuke Nakagawa, Shuji Funo (2006) Consideration on Actual Conditions and Issues of Settlements in South West coast of Sri Lanka Damaged By Sumatra Earthquake and Indian Ocean Tidal Wave in 2004: Poster Sessions, PS1-12: The 6th International Symposium on Architectural Interchange in Asia, "A+T: Neo-Value in Asian Architecture", October 25-28, 2006, Daegu Convention Center, Daegu, Korea.

Kyota Yamada, Masahiro Yamada, Shuji Funo (2006) Considerations on Spatial Formation and Transformation in Pettah (Colombo, Sri Lanka) : Proceedings Volume I, pp.541-548: The 6th International Symposium on Architectural Interchange in Asia, "A+T: Neo-Value in Asian Architecture", October 25-28, 2006, Daegu Convention Center, Daegu, Korea.

Shu Yamane, Shuji Funo, Takeshi Ikejiri (2006) Space Formation and Transformation of the Urban Tissue of Old Delhi, India: Proceedings Volume I, pp.549-554: The 6th International Symposium on Architectural Interchange in Asia, "A+T: Neo-Value in Asian Architecture",

- October 25-28, 2006, Daegu Convention Center, Daegu, Korea.
- 田島喜美恵, 畑中久美子, 布野修司 (2006) 「パキスタン地震における仮設住宅"1 + α temporary housing"の提案と実施について」, pp.185-186, 日本建築学会学術講演会梗概集, 神奈川大学, 2006年9月7日~9日.
- 中川雄輔, 前田昌弘, 布野修司 (2006) 「コロンボ近郊における津波被災シャンティ・セトルメントの復興過程 その1 スリランカにおける居住政策の変遷と津波復興政策の位置づけ」, pp.195-196, 日本建築学会学術講演会梗概集, 神奈川大学, 2006年9月7日~9日.
- 前田昌弘, 中川雄輔, 布野修司 (2006) 「コロンボ近郊における津波被災シャンティ・セトルメントの復興過程 その2 沿岸居住地の被害状況と復興の実態」, pp.197-198, 日本建築学会学術講演会梗概集, 神奈川大学, 2006年9月7日~9日.
- 朴重信, 趙聖民, 金泰永, 布野修司 (2006) 「日本植民地期における韓国の河川の日本人移住漁村について その1 密陽の三浪津邑の事例」, pp.197-198, 日本建築学会学術講演会梗概集, 神奈川大学, 2006年9月7日~9日.
- 趙聖民, 朴重信, 布野修司 (2006) 「韓国密陽市三浪津邑鉄道官舎の形成と空間変容に関する考察—三浪津鉄道官舎の形成と空間変容を中心として—」, pp.139-140, 日本建築学会学術講演会梗概集, 神奈川大学, 2006年9月7日~9日.
- 今村広太 (2006) アクセス性からみた琵琶湖湖岸緑地と隣接集落とのつながりについての研究, 平成18年度日本造園学会全国大会, 大阪芸術大学, 2006年5月21日.
- 今村広太, 村上修一 (2006) 琵琶湖湖岸緑地における空間利用についての研究, 平成18年度日本造園学会全国大会分科会, 大阪市, 2006年5月22日.
- 村上修一 (2006) 第3会場第1セッション「利用者の行動と利用の調査が公園緑地の活性化につながるために」座長, 平成18年度日本造園学会全国大会研究発表会, 大阪芸術大学, 2006年5月21日.
- 村上修一 (2006) 大学における地域連携型の実践教育プログラムが地域再生にもたらす効果と課題について—滋賀県立大学「ステューデントファーム近江楽座」を事例として, 平成18年度日本建築学会全国大会研究発表会, 都市計画部門オーガナイズドセッション—都市と大学の連携による都市・地域の再生, 神奈川大学, 2006年9月7日.
- 富島義幸 (2006) 「平泉柳之御所遺跡の建築についての考察」, 岩手県教育委員会 第6回平泉文化フォーラム, 於一関市ダイヤモンドパレス, 2006年2月19日.
- 富島義幸 (2006) 「現世と浄土をつなぐ景観——平等院鳳凰堂仏後壁画の解釈をめぐって——」, 第4回考古学と中世史シンポジウム, 於帝京大学山梨文化財研究所, 2006年7月1日.
- 富島義幸 (2006) 「柳之御所遺跡の建築について」, 平泉・衣川遺跡群研究会 柳之御所遺跡検討会, 於平泉郷土館, 2006年12月2~3日.
- 宮沢千顕, 倉山千春, 伊丹 清, 田代達一郎, 赤坂裕 (2006) 開口部の遮熱性能の計算法~その10 窓-RC造外壁間の線熱貫流率計算結果と考察~, 日本建築学会大会学術講演梗概集2006(環境工学2).
- 伊丹 清, 澤田篤徳 (2006) 開口部の遮熱性能の計算法~その11 斜め入射に対する検討(その1 計算法)~, 日本建築学会大会学術講演梗概集2006(環境工学2).
- 澤田篤徳, 伊丹 清 (2006) 開口部の遮熱性能の計算法~その11 斜め入射に対する検討(その2 計算結果)~, 日本建築学会大会学術講演梗概集2006(環境工学2).
- 山本直彦 (2006) 「建築計画学における海外集落研究の諸問題」, 日本建築学会大会(関東)建築計画部門研究懇談会「建築計画, その可能性の中心—建築計画は集落を超えることができるか」, 9月7日.

7. 研究会等, 講演会, 特別講義での発表

1) 研究会等における発表

- 奥貫 隆, 近藤隆二郎, 村上修一, 錦澤滋雄, 高橋卓也, 野間直彦, 石川慎治, 徳満勝久, 河崎澄, 黒田末壽, 濱崎一志 (2006) "ステューデントファーム「近江楽座」-まち・むら・くらしふれあい工舎"ワークショップ, 2006.3.23.
- 奥貫 隆, 奥野 修 (2006) 「地域再生人材創出拠点の形成プログラム」10大学事業説明会報告, 独立行政法人科学技術振興機構, 2006.6.8.
- 奥貫 隆 (2006) 佐々木葉二, 杉本正美, 増田 昇, 松久喜樹, 宮城俊作: 関西ランドスケープ7 大学展2006講評会, 京都市中央区元立誠小学校, 2006.10.29.
- 柴田いづみ (2006) 「防災・耐震・まちづくりフォーラム」京都大学+滋賀県立大学 2006.2.4.
- 柴田いづみ (2006) 「防災・耐震・まちづくりフォーラム」京都大学+滋賀県立大学2006.3.12.
- 柴田いづみ (2006) 「第1回防災・耐震・まちづくりフォーラム2006」京都大学+滋賀県立大学+

- NPO彦根景観フォーラム他 防災・耐震・まちづくりフォーラム実行委員会実行委員長2006.11.12.
- 柴田いづみ (2006)「防災・耐震・まちづくりフォーラム2006, まち歩き」, 京都大学+滋賀県立大学+NPO彦根景観フォーラム他 防災・耐震・まちづくりフォーラム実行委員会実行委員長 2006.11.23.
- 柴田いづみ (2006)「第2回防災・耐震・まちづくりフォーラム2006」京都大学+滋賀県立大学+NPO彦根景観フォーラム他 防災・耐震・まちづくりフォーラム実行委員会実行委員長2006.12.3.
- 柴田いづみ (2006)「防災・耐震・まちづくりフォーラム, 木造伝統構法彦根研究会」京都大学+滋賀県立大学+NPO彦根景観フォーラム他 防災・耐震・まちづくりフォーラム実行委員会実行委員長2006.12.18.
- 水原 渉 (2006) ドイツにおける戦略的環境検査の展開-EUの計画・プログラム環境検査指令とドイツでの国内法化, およびその実践, 開発代償研究会拡大研究会, (2006.06.01) .
- 布野修司 (2006) 日本建築学会建築計画委員会春季研究集会, 「都市・建築の再生と建築計画-韓国ソウルの清溪川復元と近・現代建築-」, 主催, ソウル, 漢陽大学, 2006年6月2日~4日.
- 布野修司 (2006) 歴博共同研究第一回研究会「アジア都市建築研究の課題」, 国立歴史民俗博物館, 2006年6月17日~18日.
- 布野修司 (2006) 日本建築学会建築計画部門・研究懇談会, 「建築計画, その可能性の中心-建築計画は集落を超えることができるか-」: コメンテーター, 2006年9月7日.
- 布野修司 (2006) 日本建築学会建築計画部門・研究協議会, 「プロトタイプからプロトコルへ-21世紀の建築計画学のあり方を展望する-」: 主旨説明, 2006年9月7日.
- 山本直彦 (2006) バンダ・アチェ市における復興段階への移行と住宅供給プロセス, 研究フォーラム「2004年インド洋地震津波災害被災地の現状と復興への課題 II」, 国立民族学博物館, 1月8日.
- 山本直彦, 小澤雄樹 (2006) 伝統技術を用いた災害仮設住宅-京都の左官技術を用いた被災者による自助建設の野可能性-, 第2回文化遺産防災シンポジウム「文化遺産の防災-防災まち(地域)づくりをめざして-」, 立命館大学, 2006年12月19日.
- 山本直彦 (2006) インドネシア・バンダアチェ市におけるスマトラ沖地震後の住宅復興, 第4回関西地震防災研究会, 9月16日.
- 2) 講演会
- 奥貫 隆 (2006)「土地利用と景観」滋賀県用地対策連絡協議会講演会: 2006.6.21.
- 柴田いづみ (2006) クラブ卓話 長浜東ロータリークラブ「個の総体がまちをつくる(長浜バージョン)」2006.5.16.
- 柴田いづみ (2006) 全国都市再生まちづくり会議 2006 全国都市再生まちづくり会議事務局 東京都 2006.8.5.6.
- 柴田いづみ (2006) 環境建築連続セミナー2006「東京エコシティー水の都市の再生に向けて」パネルディスカッション JIA (日本建築家協会) 2006.9.30.
- 柴田いづみ (2006) 倉敷市景観フォーラム「都市景観を創る?理念実現と担い手はいかにあるべきか」シンポジウム 岡山県倉敷市 2006.10.4.
- 柴田いづみ (2006) 中央講座「安全・安心な社会を支える先端技術」講演「すまいの安全・安心」日本技術士会 2006.10.28.
- 柴田いづみ (2006) JIA建築家大会2006奈良 時を紡ぐ〜千三百年を継承するテクノロジー〜まちづくり円卓会議「まちへ出でよ...その活動現場から」 JIA (日本建築家協会) 奈良県奈良市 2006.11.10.
- 布野修司 (2006) パネル・ディスカッション, 布野修司, 鬼頭梓, 林昌二, 松山巖: 「前川國男のモダニズム」, 東京海上火災ビル, 2006年01月19日.
- 布野修司 (2006) 日独シンポジウムJapanese-German Symposium『持続可能なコミュニティとエコ建築Sustainable Communities and Ecological Building』, ドイツ連邦環境省・滋賀県・NPO法人エコ村ネットワーク主催, 基調講演, 布野修司「日本とアジアにおけるエコ建築とエコ・コミュニティ: 過去・現在・未来」, コラボしが21, 2006年02月13日.
- 布野修司 (2006) シンポジウム「大震災からの復興への道のり-パキスタン大地震・阪神淡路大震災・インド洋大津波-」布野修司「インド洋大津波調査と復興支援」 大阪府中央公会堂 地階展示室, 2006年04月28日.
- 布野修司 (2006) 鯨の会講演会 裸の建築家/タウンアーキテクトの可能性」, 2006年5月26日.
- 布野修司 (2006) 宮内嘉久著『前川國男 賊軍の将』合評会, 司会, 国際文化会館, 東京, 2006年7月29日.
- 布野修司 (2006) 講演会・シンポジウム「関西の三奇人ふたたび」, 安藤忠雄, 渡辺豊和他, 一心寺・日想殿, 2006年9月16日.

布野修司 (2006) シンポジウム, 「それぞれにとっての前川園男」, 松隈洋, 松山巖, 布野修司, 京都造形大学, 2006年12月2日.

布野修司 (2006) 歴博国際シンポジウム2006「日韓比較建築文化史の構築—宮殿・寺廟・住宅—」, 国立歴史民俗博物館, 2006年12月12日～13日.

布野修司 (2006) 基調講演「東南アジアの住まいの様相」, シンポジウム「アジアの住まい1」, 日本建築学会, 東洋建築史小委員会, 2006年12月16日.

松岡拓公雄 (2006) JIAプロフェッションスクール 2005/06年2月3日「アトリエでの設計」.

松岡拓公雄 (2006) 「宇治の景観」宇治ロータリークラブ講演 06年10月.

陶器浩一 (2006) : 「構造技術が拓く建築空間の可能性」日本大学大学院特別講演: 2006.01.13

大谷弘明, 陶器浩一 : 「積層の家」, J I A 近畿支部住宅部会 講演会 2006.03.03

陶器浩一 (2006) : 「構造デザインについて」, 社団法人滋賀県建築設計家協会 財団法人滋賀県建築住宅センター 主催 講演会 2006.03.08

大谷弘明, 陶器浩一 (2006) : 「積層の家」, PC技術講習会 社団法人日本プレストレストコンクリート技術協会主催 2006.6.2

陶器浩一 (2006) : 構造計画について JIAオープンスクール 社団法人日本建築家協会主催 2006.9.13

陶器浩一 (2006) : 普通の材料で創る 第123回新構法開発研究会 2006.9.15

陶器浩一他 (2006) : 滋賀県建築士会女性部会 伝統工法勉強会 2006.10.14

表谷篤慶, 村上修一, 仁連孝昭 (2006) まちづくり構想報告「長浜米原まんなかまちづくり構想—コンパクト・コミュニティをめざして—」, 長浜米原まんなかまちづくりシンポジウム, 長浜, 2006年12月2日.

伊丹 清 (2006) ライフライン被害と市民の接点から見たまちの安全性, 滋賀県設備事務所協会・(社)滋賀県空調衛生設備協業協会 合同会員研修会, ウェルサンピア滋賀, 2006年11月22日.

3) 授業

藤原悌三 (2006) 最終講義: 見える美しさ, 見えない大切さ, 環境科学部講義室, 2006年2月3日.

柴田いづみ (2006) 耐震診断調査 (指導・助言), 彦根工業高校建築科 滋賀県彦根市河原 2006.6～.

水原 渉 (2006) 環境問題を考える—環境をどう捉

え, どう扱っていけば良いのだろうか, 塔南高校 (京都) 模擬講義, 2006.08.11.

村上修一 (2006) 来訪者が興味をもつ景観要素について, 平成18年度グリーンツーリズムデザイナー育成講座, NPO法人HCCグループ, ウッディバル余呉, 2006年11月10日.

高柳英明 (2006) 慶応大学大学院COE特別講義-人の動きをデザインする-, 慶応大学COEプログラム, 2006年11月16日

伊丹 清 (2006) 建築士のための指定講習会 室内環境, (社)滋賀県建築士協会, ピアザ淡海, 2006年2月24日.

8. 展覧会等

柴田いづみ (2006) 建築家5人展 建築家展 (アーキテクツギャラリー) JIA (日本建築家協会) 東京都渋谷区 2006.11.24～30.

9. 競争的研究資金の導入

1) 本学特別研究

藤原悌三: 滋賀県立大学環境科学部特別研究「滋賀県におけるまちなみ保全・創出と安全・快適住宅創出に関する研究」(第3年度).

水原 渉, 野間直彦, 籠谷泰行, 石川義紀, 村上修二, 矢部勝彦, 高橋卓也: 共同重点, 平成16年度～18年度, 117万3000円.

秋山道雄, 土井崇司, 近藤隆二郎, 迫田正美, 轟 慎一, 亀田彰喜: 特別研究, 公共交通とまちづくりに関する地域学的研究, 平成16～17年度, 167.4万円.

轟 慎一: 奨励研究, 地方都市の街なか・郊外居住と持続可能性に関する計画論的研究—少子高齢時代における市街地再編と都市再生—, 平成18年度, 50万円.

2) 科学研究費補助金

布野修司: 科学研究費補助金, 基盤研究 (B), 「アジア諸都市の都市組織と都市型住宅のあり方に関する研究」(課題番号18360295), 2006～2009年度, 430万円 (2006年度).

布野修司: 科学研究費補助金, 研究成果公開促進費, 学術図書, 「Stupa & Swastika」(課題番号185326), 450万円 (2006年度), 京都大学学術出版会.

村上修一：歴史的固定堰の親水空間としての可能性についての研究，一般研究（基盤C），2006年度，90万円。

富島義幸：平成18年度科学研究費補助金（研究成果公開促進費）課題番号185323。

渡辺秀俊，高橋正樹，林田和人，佐野友紀，高柳英明：ロボットと人間が共存するための建築空間の計画要件，文部科学省科学研究費-基盤(C)，平成17-19年度，160万円。

山本直彦：オランダ領東インドにおける統一都市計画法成立以前の都市計画実態に関する研究，若手研究（B），70万円。

3) 政府および地方公共団体（関連法人を含む）からの補助金

奥貫隆，松岡拓公雄，濱崎一志，印南比呂志，近藤隆二郎，村上修一：「現代的教育ニーズ取組支援プログラム」スチューデントファーム「近江楽座」，文部科学省，2004～2006，1350万円（2006年度）。

奥貫隆，曾我直弘，布野修司，松岡拓公雄，村上修一，仁連孝昭，秋山道雄，鶴飼修，山根浩二，濱崎一志，黒田未壽，奥野修，上田洋平：「地域再生人材創出拠点の形成」プログラム，「近江環人地域再生学座」，文部科学省，2006～2010，2500万円（2006年度）。

柴田いづみ：平成18年度市民活動団体等支援総合事業 内閣府 まちの継続in彦根-防災・耐震・まちづくりフォーラム2006-

松岡拓公雄他：木造建築，木造文化の継承発展および木造文化を基礎とした地域再生をめざす総合的な研究，教育，実践プログラムの構築，平成18年度，100万円，滋賀県。

陶器浩一，岡田哲史，今井隆志：平成18年度 国土交通省建設技術研究開発助成制度：耐震性に優れ，狭小間口で自由な建築空間を可能にする木造新工法，平成18年～19年度，1050万円

4) その他財団からの研究補助金

柴田いづみ：自然再生に向けての基礎調査 平成17年度 30万円 大阪市立大学(財)有恒会。

布野修司：住宅総合研究財団研究助成，「スペイン植民都市の起源・変容・転成・保全に関する研究」（研究番号0602），2006年6月1日～2007年10月31日，180万円。

村上修一：琵琶湖岸景観の保全に対する地域住民の

活動の有効性に関する研究，河川整備基金助成，(財)河川環境管理財団，2006年6月～2007年5月，69万円。

末富孝也，秦憲志，奥野修，浅野智子，戸谷秀子，永橋為介，西本和正，澤哲男，村上修一：大津・志賀地域協働街づくり研究，日本都市計画学会関西支部「都市計画研究会」助成，2006年4月～2007年3月，10万円。

山本直彦（主査）他5名：伝統技術を活用した災害仮設住宅の建設技術開発に関する研究，住宅総合研究財団，45万円。

10. 研究員の受入

布野修司，朴重信，学術振興会特別研究員，2005年10月～2007年9月。

布野修司，ホアン・ヒメネス・ベルデホ，学術振興会特別研究員，2006年4月～2008年3月。

11. 社会への貢献

1) 各種委員会等

藤原悌三（2006）土砂災害防止対策委員会，1/31。

藤原悌三（2006）学校建築耐震診断委員会，2/22。

藤原悌三（2006）耐震診断委員会，3/28。

奥貫隆（2006）現代的教育ニーズ取組選定委員会第4部会（持続可能な社会につながる環境教育の推進），委員，文部科学省。

奥貫隆（2006）滋賀県国土利用審議会，委員，滋賀県。

奥貫隆（2006）滋賀県みずすまし構想推進委員会 景観保全専門部会，会長，滋賀県。

奥貫隆（2006）美しいしがのふるさとづくりこんくーる選定委員会，委員，滋賀県。

奥貫隆（2006）守りたい育てたい湖国の自然100選選定委員会，委員，滋賀県。

奥貫隆（2006）滋賀県東北部浄化センター造成計画検討懇話会，委員長，滋賀県。

奥貫隆（2006）滋賀県土木交通部指定管理者選定委員会，委員，滋賀県。

奥貫隆（2006）大津市都市計画部指定管理者選定委員会，委員，大津市。

奥貫隆（2006）長浜市建築審査会，会長，滋賀県長浜市。

奥貫隆（2006）大津市風致保全に関する懇話会，委員，滋賀県大津市。

奥貫隆（2006）大津市景観審議会，副会長，滋賀

- 県大津市。
- 奥貫 隆 (2006) 自然環境アドバイザー, 国土交通省近畿地方整備局。
- 奥貫 隆 (2006) 彦根市景観アドバイザー, 彦根市。
- 奥貫 隆 (2006) 都市再生機構, 浜甲子園デザイン協議会, 委員, 都市再生機構関西支社。
- 奥貫 隆 (2006) 関西ランドスケープ7大学展実行委員会, 委員。
- 柴田いづみ (2006) 文化庁文化審議会文化財分會第二専門調査会 文化庁。
- 柴田いづみ (2006) 河川保全利用委員会 国土交通省琵琶湖河川事務所。
- 柴田いづみ (2006) 現代的教育ニーズ取組選定委員会におけるペーパーレフェリー 文部科学省。
- 柴田いづみ (2006) 都市計画協会常任理事 (財)都市計画協会。
- 柴田いづみ (2006) 淡海環境保全財団理事会理事 (財)淡海環境保全財団。
- 柴田いづみ (2006) (NPO法人) 東京いのちのポータルサイト理事会理事。
- 柴田いづみ (2006) (NPO法人) 太陽光発電をすすめる大津市民の会 (ソーラーおおつ) 理事。
- 柴田いづみ (2006) (NPO法人) 彦根景観フォーラム副理事長。
- 柴田いづみ (2006) ネット社会と子ども達協議会副運営委員長 東京都 3回。
- 柴田いづみ (2006) 滋賀県土地利用審査会委員 滋賀県。
- 柴田いづみ (2006) 滋賀県公共事業評価監視委員会委員 滋賀県1回。
- 柴田いづみ (2006) 滋賀県施設・事業仕分け会議委員 滋賀県2回。
- 柴田いづみ (2006) 史跡観音寺城跡整備基本構想・基本計画策定委員会 滋賀県安土城郭研究所。
- 柴田いづみ (2006) 彦根市都市景観審議会 彦根市。
- 柴田いづみ (2006) 彦根市景観計画策定委託業者選定委員会 彦根市2回。
- 柴田いづみ (2006) 彦根市都市計画マスタープラン策定委員会。
- 柴田いづみ (2006) 近江八幡市観光振興計画策定委員会 近江八幡市。
- 柴田いづみ (2006) 安土・八幡文化的景観保存活用委員会副委員長 近江八幡市。
- 柴田いづみ (2006) 長浜市都市計画審議委員 長浜市。
- 柴田いづみ (2006) 長浜市商店街活性化検討委員 長浜市産業経済部。
- 柴田いづみ (2006) 湖南省都市マスタープラン・国土利用計画委員会委員長 湖南省 1回。
- 柴田いづみ (2006) 湖南省都市計画審議会 湖南省 1回。
- 柴田いづみ (2006) 唐津市「葦野の棚田」保存管理計画策定委員会委員 佐賀県唐津市 1回。
- 水原 渉 (2006) 彦根市建築審査会 会長 彦根市。
- 水原 渉 (2006) 大津市開発審査会 会長 大津市。
- 水原 渉 (2006) 大津市建築審査会 委員 大津市。
- 水原 渉 (2006) (社) 滋賀県建築士会継続能力開発 (CPD) プログラム評議員会 会長 滋賀県建築士会。
- 水原 渉 (2006) (社) 滋賀県建築士会専攻建築士評議会 会長 滋賀県建築士会。
- 水原 渉 (2006) 滋賀自治体問題研究所 理事長。
- 水原 渉 (2006) 東近江市あいとうウェストランド土地利用研究会 座長。
- 水原 渉 (2006) 大津市住宅マスタープラン改定検討委員会 委員長。
- 水原 渉 (2006) 新建築家技術者集団滋賀支部 代表幹事。
- 布野修司 (2006) 文化庁文化遺産国際協力コンソーシアム委員。
- 布野修司 (2006) 国際技能振興財団専務理事。
- 布野修司 (2006) 米原市駅周辺整備ビジョン策定委員会 (座長)。
- 布野修司 (2006) 宇治市都市計画審議会 (会長)。
- 布野修司 (2006) 宇治市都市景観審議会委員。
- 布野修司 (2006) 淀川水系宇治川河川利用委員会委員。
- 布野修司 (2006) 塔の島地区河川整備に関する検討委員会委員。
- 布野修司 (2006) 大阪府警察金岡単身寮整備等事業の係る選定事業者審査委員会委員。
- 布野修司 (2006) しまね景観賞委員会委員。
- 布野修司 (2006) 大橋川周辺まちづくり検討委員会 (副委員長)。
- 松岡拓公雄 (2006) ガラス再資源協議会副会長, 2回。
- 松岡拓公雄 (2006) 彦根市都市景観審議会委員, 2回。
- 松岡拓公雄 (2006) 宇治市都市景観審議会会長, 5回。
- 松岡拓公雄 (2006) 京都CDL ユニットマスター, 1回。
- 松岡拓公雄 (2006) 京都CDLみてきてつくって審査委員, 1回。
- 松岡拓公雄 (2006) 高月町コミュニティバス検討委員, 4回。
- 松岡拓公雄 (2006) 団地再生協議会委員, 3回
- 松岡拓公雄 (2006) 大沢池環境再生計画委員会副委員長, 2回。

松岡拓公雄 (2006) 札幌市モエレ沼公園運営会議, 1回.

松岡拓公雄 (2006) 滋賀県協働部活プロジェクト/ウッドマイレージ会議, 3回.

陶器浩一 (2006) 滋賀県学校建築耐震判定委員会副委員長.

陶器浩一 (2006) 滋賀県開発許可基準等調査検討委員会 学識経験者部会委員.

陶器浩一 (2006) (財)日本建築総合試験所 建築物構造性能評価委員会 委員.

陶器浩一 (2006) 大阪府下行政連絡協議会 建築確認アドバイザー委員.

陶器浩一 (2006) 大阪建築コンクール 審査委員.

村上修一 (2006) 大津市長等地区都市水路計画協議会コーディネーター, 大津市, 1回.

村上修一 (2006) 長等商店街振興組合への専門知見提供, 大津市, 2回.

村上修一 (2006) 浜大津手しごとと市場実行委員会への専門知見提供, 大津市, 2回.

村上修一 (2006) 大津・志賀地域協働街づくり研究会委員, 大津市, 2回.

村上修一 (2006) 山田21まちづくり推進委員会への専門知見提供, 草津市, 6回.

村上修一 (2006) コトナリエ実行委員会への専門知見提供, 東近江市, 5回.

村上修一 (2006) 五個荘地区まちづくり協議会への調査協力, 東近江市, 2回.

村上修一 (2006) 長浜米原まんなかまちづくり協議会への専門知見提供, 長浜市・米原市, 3回.

村上修一 (2006) 三津海瀬土地利用委員会への専門知見提供, 彦根市, 1回.

村上修一 (2006) 関西ランドスケープ7大学展実行委員会, 京都市, 2回.

富島義幸 (2006) 草津市文化財保護審議会委員.

富島義幸 (2006) 愛知川町史執筆委員.

伊丹 清 (2006) 窓のエネルギー性能評価指標研究プロジェクト 委員, (社)リビングアメニティ協会, 2005年4月~, 5回.

伊丹 清 (2006) ISO/TC163/SC2対応WG 委員, 建築・住宅国際機構, 2003年6月~, 4回.

轟 慎一 (2006) 草津市都市計画マスタープラン策定委員会委員, 草津市.

2) 学会貢献

柴田いづみ (2006) (社)日本建築士会連合会 情報・広報委員会委員 9回.

水原 渉 (2006) 日本建築学会, 都市計画委員会

環境地域計画システム小委員会 委員.

布野修司 (2006) 日本建築学会建築計画委員会 (委員長).

布野修司 (2006) 日本建築学会アジア建築交流委員会 (委員長).

布野修司 (2006) 日本建築学会英文論文集JAABE (Journal of Asian Architecture and Built Environment) 委員会 (委員長 Field Editor).

布野修司 (2006) 日本建築学会学会賞 (業績賞) 部長.

松岡拓公雄 (2006) 日本建築学会司法支援委員会委員, 2回.

陶器浩一 (2006) 日本建築学会 シェル小委員会 鉄筋コンクリート系厚肉床壁構造設計施工WG委員.

陶器浩一 (2006) 日本建築学会 Student Summer Seminar コンテスト審査員.

陶器浩一 (2006) 日本建築学会 関東支部構造デザインテキスト作成委員会委員.

陶器浩一 (2006) 日本建築学会 作品選奨選考委員会 委員.

陶器浩一 (2006) 日本建築学会 設計競技事業委員会 委員.

村上修一 (2006) 日本造園学会 学術委員会委員, 論文集校閲委員会委員.

富島義幸 (2006) 日本宗教文化史学会, 編集委員.

富島義幸 (2006) 建築史談話会, 幹事.

高柳英明 (2006) 日本建築学会 建築計画委員会 空間研究小委員会シンポジウムWG 委員.

高柳英明 (2006) 日本建築学会 情報システム委員会 AIディレクター構築WG 委員.

山本直彦 (2006) 日本建築学会計画委員会比較居住文化小委員会 幹事.

小林正実 (2006) 日本建築学会 不均質・混合体の数理解析手法小委員会委員, 1回.

小林正実 (2006) 日本建築学会近畿支部 災害対応ネットワーク委員.

轟 慎一 (2006) 日本造園学会校閲委員

3) 国際貢献

松岡拓公雄 (2006) ベネチアビエンナーレ日本館オープニングセレモニー招待参加/9月7日.

松岡拓公雄 (2006) IBAエムシャーパークエントリ-2006参加/ツアルファライン/10月17日.

松岡拓公雄 (2006) ドイツ連邦建設省「団地再生シンポジウム」/ライネフェルデ/10月19日.

富島義幸 (2006) 東アジア建築文化国際会議京都

2006, 実行委員.

12. マスメディアとの対応

1) 新聞, 雑誌等からの取材による記事

藤原悌三 (2006) 中日新聞「琵琶湖と環境」12回シリーズ 地震防災と市民の力, ①風光明媚の国—日本の自然災害 ②剛柔論争—耐震構造の歴史 ③建築基準法—安全の指標 ④建物と地盤特性—地面の揺れ方 ⑤ソフト防災—強い建物から安全な町づくりへ ⑥世界の災害を軽減する—日本の役割 ⑦学校の耐震—避難所の運営 ⑧被害推定—東南海地震と琵琶湖西岸断層帯の地震 ⑨自助公助共助—私有財産と社会資産 ⑩地域のリスク—危険な地域から防災対策を ⑪児童に学ぶ地震への備え—瀬田小学校の事例 ⑫環境職能論—建築組織の責任.

奥貫 隆 (2006) 稲村神社春季例大祭環境フィールドワークプレス説明会, 京都新聞社, 中日新聞社ほか, 2006.4.12.

奥貫 隆 (2006) 滋賀県立大学現代GP"スチューデントファーム「近江楽座」-まち・むら・くらしふれあい工舎"平成18年度プロジェクト募集プレス説明会, 朝日新聞社, 読売新聞社, 中日新聞社, 産経新聞社, 京都新聞社ほか, 2006.4.24.

柴田いづみ (2006) 商店街活動に「防災加えて」彦根の商店主30人が参加 専門家から学ぶ 京都新聞 2006.2.5.

柴田いづみ (2006) 滋賀大地域連携センターと県立大 商店街に研究室「市民と交流を」 中日新聞 2006.2.9.

柴田いづみ (2006) 住宅の耐震補強について考える 彦根でシンポ 京都新聞電子版 2006.3.12.

柴田いづみ (2006) 住宅の耐震補強について考えた「防災・耐震・まちづくりフォーラム」彦根でシンポ 京都新聞 2006.3.13.

柴田いづみ (2006) はばたけ滋賀っ子 新病院飾る 立体作品に 近江八幡の子ら 琵琶湖の魚模型 紙粘土で作った 朝日新聞 あいあいAI滋賀 2006.3.15.

柴田いづみ (2006) 町家を無料耐震診断, 実習と地域防災に 京都新聞電子版 2006.3.20.

柴田いづみ (2006) 町家を無料耐震診断 旧城下町で実習と地域防災に 京都新聞 2006.3.20.

柴田いづみ (2006) 彦根の町家地理情報システムに集約 耐震, 景観保全活動へ 京都新聞 2006.3.23.

柴田いづみ (2006) 耐震診断まかせて 彦根工業高生が商店街で町家実測実習 中日新聞電子版 2006.6.10.

柴田いづみ (2006) 耐震診断まかせて 商店街で彦根工業高生が実習 中日新聞電子版 2006.6.10.

柴田いづみ (2006) 黒壁スクエアの成功学ぶ 県立大環境科学部 特別講義「長浜のまちづくり」 読売新聞 2006.6.13.

柴田いづみ (2006) 「耐震補強工事安価な手法を」学者・NPOがシンポ 日本経済新聞 2006.6.18.

柴田いづみ (2006) 耐震診断調査にチャレンジ 読売新聞2006.6.27.

柴田いづみ (2006) 町家を対象に簡易耐震診断 地域の防災強化に一役 中日新聞 2006.8.7.

柴田いづみ (2006) アートで街いきいき 県立大環境科学部「柴田いづみ研究室」「八幡堀まつり」初の試み 読売新聞 2006.6.26.

柴田いづみ (2006) 地震に強い家訴える 彦根でまちづくりフォーラム 読売新聞 2006.12.13.

松岡拓公雄 (2006) 「環境建築デザイン」西日本新聞研究最前線コラム.

松岡拓公雄他7名 (2006) 座談会: テーマ「内井昭蔵の教育施設」.

今村広太, 井上友彩, 木村真也, 正田香澄, 村上修二 (2006) 「児童とヨシあんどん作り・県立大」読売新聞しが県民情報, 2006年2月21日.

今村広太, 井上友彩, 木村真也, 正田香澄, 村上修二 (2006) 「コトナリエ・イルミネーション・デザイン」毎日新聞, 2006年8月3日, 産経新聞, 2006年8月8日, 中日新聞, 2006年8月11日.

森田一弥, 山本直彦他5名 (2006) マイチャレンジ「左官材料だけで自立する空間を—厚さ4mmで80kgの重さに耐える」, 日経アーキテクチュア(52-53) 2006年4月24日号.

2) TV, ラジオ番組への出演等

柴田いづみ (2006) M7, 8の脅威〜琵琶湖西岸断層が動くとき〜 NHK天津放送局 地上波デジタル放送開始1周年記念特別番組 NHK2006.4.7.

布野修司 (2006) 対談, 「菅原文太 日本人の底力」, 菅原文太, ニッポン放送, 2006年12月3日放送.

生物資源管理学科

1. 受賞

飯嶋盛雄, 泉 泰弘, Erwin Yuliadi, Sunyoto, WayanSabe Ardjasa (2006) 第3回日本作物学会論文賞Cassava-Based Intercropping Systems on Sumatra Island in Indonesia: Productivity, Soil Erosion, and Rooting Zone. *Plant Production Science* 7 (3) :347-355.

須戸 幹 (2006) 日本陸水学会2006年度学会賞(第8回吉村賞), 日本陸水学会, 受賞対象論文: Sudo M., Okubo T. and Kaneki R. (2005): Paddy herbicide inputs in the entire river inflow reaching Lake Biwa, Japan, *Limnology*, 6 (2), pp.91-99.

2. 著書

秋田重誠, 塩谷哲夫編著 (2006) 植物生産技術学 1-257 文永堂 東京.

増田佳昭 (2006) 規制改革時代のJA戦略—JA批判を越えて. 家の光協会. 1-258.

Imamura, Y., T. Umezawa and T. Hata (eds.) Sustainable Development and Utilization of Tropical Forests Resources (2006) Watanabe, T., M. Samusuri, R. Amirta, N. Rahmawati, Syafwina, B. Prasetya, T. Tanabe, Y. Ohashi, T. Watanabe, Y. Honda, M. Kuwahara and K. Okano. Lignin degrading fungi as a biotechnology tool for biomass conversion. 167-173. RISH, Kyoto University, Kyoto.

畠山成久編 (2006) 化学物質の生態リスク評価と規制—農業編—. 須戸 幹, アイピーシー出版, pp.53-60.

土屋正春・伊藤達也編 (2006) 水資源・環境研究の現在. 高橋卓也, 第17章「先進国における大都市水源林管理の比較研究—ニューヨーク, バンクーバー, 東京の事例から考える—」, 成文堂, 東京.

土屋正春・伊藤達也編 (2006) 水資源・環境研究の現在. 富岡昌雄, 「滋賀県環境こだわり農業の展開方向—環境こだわり農業から持続可能性農業へ—」, 成文堂, 東京.

3. 論文 (学会誌およびそれに準じる学術、技術雑誌およびプロシーディングに掲載されているもの)

山川宏徳, 秋田重誠 (2006) 水田栽培ナタネの収量

決定過程の解析 近畿作物・育種研究会報告.

Araki, R. and H. Hasegawa (2006) Expression of rice (*Oryza sativa* L.) genes involved in high-affinity nitrate transport during the period of nitrate induction. *Breeding Science* 56: 295-302.

長谷川博, 荒木良一, 野見山誉, 宮角裕喜, 玉井紀子, 伴あずさ (2006) ヨシ (*Phragmites australis*) の遺伝的改良—序論—. 近畿作物・育種研究51: 13-17.

Yanagida, N., T. Irie, E. Tanaka, C. Teramoto, K. Kuwabara and A. Tajimi (2006) New choke diseases and their molecular phylogenetic analysis in *Agropyron ciliare* var. *minus* and *Agropyron tsukushiense* var. *transiens*. *Mycologia* 97 (6) :1313-1317.

岩間憲治, 金木亮一, 谷川寅彦, 矢部勝彦 (2006) 多孔質管地中灌漑の実用性向上について, 一低正圧間断灌漑の実用性と負圧連続灌漑による根巻き防止効果一, 農業土木学会論文集245 : 19-23

岩間憲治, 谷川寅彦, 金木亮一, 矢部勝彦 (2006) 地中連続灌漑における多孔質媒体の差異が給水特性に与える影響, 農業土木学会論文集245 : 13-17 .

Zegada-Lizarazu, W., Y. Izumi and M. Iijima (2006) Water competition of intercropped pearl millet with cowpea under drought and soil compaction stress. *Plant Prod. Sci.* 9: 123-132.

Zegada-Lizarazu W., L. Kanyomeka , Y. Izumi, and M. Iijima (2006) Pearl millet developed deep roots and changed water sources by competition with intercropped cowpea in the semiarid environment of northern Namibia. *Plant Prod. Sci.* 9 : 355-363.

金木亮一, 須戸 幹, 芝原 勉 (2006) 無代かき・減肥栽培による窒素・リン流出負荷の削減, 水文水資源学会誌19 (5), 360-371.

金木亮一, 古川政行, 並河治香, 田中正 (2006) 給排水調節ユニットによる水田からの表面流出負荷の削減, 農土誌74 (12), 23-27.

川地 武 (2006) 電気泳動技術を用いた重金属汚染土壌の修復, 農林水産技術研究ジャーナル29-10, 34-37.

川地 武, 李 泰勲 (2006) 安定型処分場周辺の地下水汚染の事例と修復過程の考察, 第12回地下水・土壌汚染とその防止対策に関する研究集会講演集, 789-791.

小池恒男 (2006) 担い手直接支払いと地域振興直接

- 支払いで日本の食料・農業・農村はどうなる. 農業と経済72(3):44-52.
- 小池恒男 (2006) 品目横断的経営安定対策で担い手確保は実現できるか. 農村ニュース2006年春季特大号:28-31.
- 小池恒男 (2006) 米政策改革2年の評価と提言. 週間農林1952:6-7, 1955:4-5.
- 小池恒男 (2006) 農政改革と農業財政システムの変質. 地域農業と農協36(2):2-3.
- 小池恒男 (2006) 地域農林経済学研究者の役割と評価—社会貢献の視点より—. 第56回地域農林経済学会大会報告要旨:15-16.
- 小池恒男, 國松孝男, 井田秀美 (2006) 冬期湛水・不耕起をはじめとする環境保全型稲作の経営経済分析. 第7回日本有機農業学会大会資料.
- 小池恒男 (2006) 農政改革と地域農政の展開—経営安定対策の問題点と今後の課題—. 農業と経済73(1), 2007年1・2月合併号:46-54.
- 早川文子, 中森正代, 岡崎章子, 小飯塚尚子, 曾我千晴, 増田佳昭, 阿部尚人 (2006) 食事からみた食料自給率—女子大学生の食品摂取実態を中心に—. 日本栄養・食糧学会誌第58巻第6号, 323-328.
- 増田佳昭 (2006) 経済事業改革の評価と課題. 農業と経済第72巻第9号, 58-68.
- 小谷廣通, 土井章宏, 堀野治彦 (2006) 農業用水の多面的機能の経済評価. 平成17年度野洲川沿岸農地防災事業(二期)野洲川地区地域生態系調査検討委託業務報告書, (社)農業土木学会, 47-63.
- Odani, H., S. Takeuchi, K. Sasaki and T. Yano (2006) Evapotranspiration, Transpiration and Evaporation from Soil Surface in a Maize Field, The Advance Report of the Research Project on the Impact of Climate Change on Agricultural Production System in Arid Areas, Research Institute for Humanity and Nature, 75-76.
- 岡野寛治, 種村絵美, 三木聡子, 稲富 聡 (2006) エリンギ (*Pleurotus eryngii*) 栽培後のコーンコブミール廃培地の再培養の温度と期間が廃培地の消化性に及ぼす影響, 日本畜産学会報 77: 225-230.
- Okano, K., Y. Iida, M. Samusuri, B. Prasetya, T. Usagawa and T. Watanabe (2006) Comparison of in vitro digestibility and chemical composition among sugarcane bagasse treated by four white-rot fungi, Animal Science Journal 77: 308-313.
- Watanabe, T., T. Ougi, H. Nishimura, T. Watanabe, Y. Honda and K. Okano (2006) Free radical-mediated lignin biodegradation by selective white rot fungi and its potential use in wood biomass conversion. In; Research progress in pulping and papermaking. H. Beihai, F. Shiyu and C. Fangeng (eds.), South China University of Technology Press, Guangzhou, 864-868.
- Okano, K., A. Nishiyama, N. Ohkoshi and T. Usagawa (2006) Conversion of bamboo into ruminant feed by white-rot fungi. In; New technologies in non-wood fiber pulping and papermaking. Z. Huaiyu, C. Fangeng and F. Shiyu (eds.), South China University of Technology Press, Guangzhou, 375-378.
- 岡野寛治, 三木聡子, 榎野秀俊 (2006) きのこと栽培を教材化するための一考察 トキイロヒラタケを小麦ワラで簡易に栽培するための条件についての検討, 日本農業教育学会誌 37: 89-96.
- 宇佐川智也, 大角雅晴, 岡野寛治 (2006) 屋外の柵内における春季および夏季のサフォーク種双子成雌羊の個体間距離, 日本緬羊研究会誌 43: 1-6.
- 中尾博行, 藤田建太郎, 川端健人, 中井克樹, 沢田裕一 (2006) 琵琶湖北湖における外来魚ブルーギル *Lepomis macrochirus* の繁殖生態. 魚類学雑誌53 (1) : 55-62.
- 中尾博行, 藤田建太郎, 中井克樹, 沢田裕一 (2006) 外来魚ブルーギルの卵・仔魚に対する在来巻貝類による捕食. 魚類学雑誌53 (2) : 167-173.
- Egusa, S., K. Fujisaki and H. Sawada (2006) Spatio-temporal abundance of flushing leaves shapes host selection in the willow leaf beetle, *Plagioderma versicolora*. Entomologia Experimentalis et Applicata 120 (3) : 229-237.
- 西田哲, 荒木ゆう子, 沢田裕一 (2006) 緑化害虫ヒロヘリアオイラガの寄生樹種と繭発生量の季節変動. 関西病虫研報48 : 115-117.
- Yano, K., K. Imai, A. Shimizu and T. Hanashita (2006) A new method for gene discovery in large-scale microarray data, Nucleic Acids Research 35:1532-1539. (equal contribution)
- 須戸 幹, 川地 武 (2006) 琵琶湖流域の水田群における除草剤の流出とその要因, 水環境学会誌, 29 (11), 715-721.
- Shibata, K., T. Fukuwatari, Y. Iguchi, Y. Kurata, M. Sudo and R. Sasaki (2006) Comparison of the Effects of Di (2-ethylhexyl) phthalate, a Peroxisome Proliferator, on the Vitamin

- Metabolism Involved in the Energy Formation in Rats Fed with a Casein or Gluten Diet, *Biosci. Bio Technol. Biochem*, 70 (6) , 1331-1337.
- Sudo, M., M. Nishino and T. Okubo (2006) Decrease in pesticide concentrations and affected factors in lagoons located around Lake Biwa. *Water Science and Technology*, 53 (2) , 131-138.
- Kunimatsu, T. and M. Sudo (2006) Long-term fluctuation and regional variation of nutrient loads from the atmosphere to lakes, *Water Science & Technology*, 53 (2) , 53-61.
- Sugiura, S.H., P.K. Roy and R.P. Ferraris (2006) Dietary acidification enhances phosphorus digestibility but decreases H⁺/K⁺-ATPase expression in rainbow trout. *Journal of Experimental Biology* 209:3719-3728.
- Sugiura, S.H., D.D. Marchant, K. Kelsey, T. Wiggins and R.P. Ferraris (2006) Effluent profile of commercially used low-phosphorus fish feeds. *Environmental Pollution* 140:95-101.
- 鈴木一実, 村井 淳, 富田麗子, 浜田博幸, 三浦由雄 (2006) カプシム属植物のウイルス抵抗性機構の解析, 植物ウイルス病研究会レポート 8 : 21-28.
- 浜田博幸, 岩館康哉, 富田麗子, 村井 淳, 鈴木一実 (2006) 岩手県のL³ 抵抗性導入ピーマンから分離された *Pepper mild mot t le virus* (PMMoV) の解析, 日本植物病理学会報 72 : 53-54.
- 浜田博幸, 富田麗子, 岩館康哉, 小林括平, 鈴木一実 (2006) *Pepper mild mot t le virus* (PMMoV) の外被タンパク質 (CP) アミノ酸変異L13FとG66Vの共同的な作用が *Capsicum* 属植物のL³ 抵抗性を打破させる, 日本植物病理学会報 72 : 299.
- Fuke, K, N. Hozumi, Y. Enami, K. Matsuura and A. Tajimi (2006) Anthracnose of centipede grass caused by *Colletotrichum caudatum*. *J. Gen. Plant Pathology* 72:74-75.
- 高橋卓也 (2006) 森林認証をめぐる社会科学研究—この10年の動向—, 林業経済59 (9) (通巻698号, 2006年12月) : 1-16.
- 横川洋・飯國芳明・富岡昌雄・福田晋 (2006) 環境直接支払いへの取り組み [4] —3報告論文へのコメントと総括—, 農業および園芸, 81の12, 1253-1261.
- Uemachi, T., Kurokawa, M. and Nishio, T. (2006) Comparison of inflorescence composition and development in the lacecap and its sport, hortensia *Hydrangea macrophylla* (Thunb.) Ser. *J. Japan. Soc. Hort. Sci.* 75: 154-160.
- Kesumawati, E., Kimata, T. Uemachi, T., Hosokawa, M. and Yazawa, S. (2006) Correlation of phytoplasma concentration in *Hydrangea macrophylla* with green-flowering stability. *Scientia Horticulturae* 108: 74-78.
- 谷川寅彦, 矢部勝彦 (2006) 造成樹園地における水分消費と下層補給について, 農業土木学会論文集 243 : 113-120.
4. 報告書, その他著作, 一般向け記事
- 1) 科研費他外部研究費による研究の成果報告書
- 長谷川博 (2006) カスミソウの悪臭成分に関わる分子マーカー. 花卉の香りの評価とその制御を目指した分子育種 (研究代表者, 大城閑). 平成15~17年度基盤研究 (B) 研究成果報告書 : 14~23.
- 増田佳昭 (2006) (社) 農業開発研修センター J Aと組合員との関係再構築のあり方に関する調査研究報告書. 増田佳昭. 第5章「JA組織運営における組合員参加のあり方」, 69-81. 増田佳昭. 第6章「支店・事業所再編と『関係再構築』の課題」, 82-104.
- 増田佳昭 (2006) 京都府農業会議 認定農業者等の新たな経営展開・経営多角化に関する調査報告. 増田佳昭「第1章 農業経営多角化をどう考えるか」, 1-6.
- 清水顕史, 池橋宏 (2006) 酸性硫酸塩土壌で問題となる栄養ストレス耐性に関する遺伝育種学的研究, 佐々木恵彦 (拠点リーダー), 平成15年~19年度21世紀COEプログラム, 中間報告書, 環境適応生物を活用する環境修復技術の開発.
- 矢部勝彦, 玉井重信 (2006) Studies on the Salt Tolerant Mechanism of Plant and the Improvement of Saline Soil. Annual Report 2005-2006, Tottori University Arid Land Research Center, 27-28.
- 2) 受託研究等の報告書
- 小池恒男 (2006) 水田農業への対応の現状と問題点, 5(3):176-189. 米麦雑穀等の販売事業へのJAの

対応の現状と課題. 6(3):215-217. 水田農業に関する営農面活動の対応課題と県内系統指導事業の改革方向. 7(2):252-265. JAグループの米販売機農強化・高度化の課題と取り組み方向. 8(3):293-294. JAグループ宮城の地域農業対応戦略確立のための調査研究事業報告.

3) ハンドブック、辞典、図鑑などへの執筆

地盤工学会編(2006)地盤工学用語辞典, 川地 武, 第22章「地盤環境」, 地盤工学会, 東京.

4) 新聞、一般向け雑誌等への解説記事など

川地 武(2006)土の化学試験の変化・変遷と今後、土と基礎, 54-2, 8-10.

川地 武(2006)地盤材料の化学試験はいかにあるべきか、土と基礎, 54-12, 24.

小池恒男(2006)21世紀初頭10年の歴史的位について考える. 連帯通巻180号, 2006年2月, 3-7.

小池恒男(2006)安高澄夫・土屋博・仏田利弘・石田正昭(座談会)JA再生の道を探る. 農業と経済, 第72巻第9号, 2006年8月, 5-34.

小池恒男(2006)『貸し剥がし』問題の深層. 農業と経済第72巻12号, 2006年10月, 3.

小池恒男(2006)(書評)新村洋史著「大学生が変わるー能力主義の囚人から教養の主人公へー」. 大学創造2006第18号, 2006年10月.

小池恒男(2006)「特集:琵琶湖と共生する水田農業のあり方、を求めて」, 環境科学部年報第10号, 2006年3月.

増田佳昭(2006)琵琶湖と水田農業ー農業濁水とゆりかご水田プロジェクトー, ひょうごJCC No.63, 6-7.

増田佳昭(2006)「環境敏感地域」の農業. 水生畑 Vol.19, 1.

増田佳昭(2006)JAへの結集力を強化するために. JA教育文化No.71, 14-15.

増田佳昭(2006)組合員が主人公, ユニークJAの新たな挑戦ー島根県いずも農業協同組合. 家の光ニュースVol.709, 12-14.

西尾敏彦(2006)琵琶湖と環境 野菜栽培(1), 中日新聞, 3月20日.

西尾敏彦(2006)琵琶湖と環境 野菜栽培(2), 中日新聞, 3月27日.

Ferraris, R.P., R. Coloso, S. Sugiura and G. Flimlin(2006) Phosphorus in effluents from rainbow trout (*Oncorhynchus mykiss*) aquaculture,

World Aquaculture 37 (1) :16-20, March 2006.

杉浦省三(2006)「私の環境学:環境にやさしい水産増養殖」, 環境科学部年報第10号, 2006年3月.

高橋卓也(2006)書評・鈴木宣弘著『食料の海外依存と環境負荷と循環農業』, 農業と経済72(8), 2006年7月号:110.

富岡昌雄(2006)動き出す環境直接支払い, 農業と経済, 72(1), 3.

富岡昌雄(2006)見えてきた農業環境政策・地域資源保全政策, 月刊NOSAI, 平成18年2月号, 25-31.

富岡昌雄, 増田佳昭, 須戸 幹(2006)「特集:環境こだわり農産物と環境農業直接支払い制度創設の取り組み」, 滋賀県立大学環境科学部・環境科学研究科年報第10号, 27-31.

富岡昌雄(2006)琵琶湖と環境ー環境こだわり農業ー, 中日新聞, 2006年10月23日~12月18日毎月曜日朝刊「広域滋賀」面.

上町達也(2006)多彩なアジサイ園芸品種を生み出すアジサイ, ヤマアジサイ, エゾアジサイ あじさい 15:2-5. (2006年1月).

5. 学会等への発表

山川宏徳, 秋田重誠(2006)近畿作物・育種研究会講演会.

川口佳則, 秋田重誠(2006)近畿作物・育種研究会講演会.

荒木良一, 横山実果, 奥田友香, 長谷川博(2006)硝酸誘導時において硝酸吸収と同調するイネの高親和性硝酸輸送遺伝子. 第47回日本植物生理学会年会, つくば市.

横山実果, 荒木良一, 小川太郎, 大村典子, 長谷川博(2006)イネの低硝酸還元酵素活性突然変異体の硝酸代謝. 日本育種学会第109回講演会(2006), 府中市.

亀田絵美, 猪飼順子, 伊藤聖子, 新庄康代, 長谷川博(2006)ベニバナカスミソウの花の匂いの強弱に関する純系育成とAFLPマーカーの探索. 近畿作物・育種研究会第161回例会, 奈良市.

宮角裕喜, 森真理, 吉田薫, 清水顕史, 長谷川博(2006)イネのフィチン酸合成関連遺伝子を導入したヨシの特性. 日本育種学会第110回講演会(2006), 松山市.

李紅燕, 田口晴香, 長谷川博(2006)異なる硝酸濃度区におけるイネ幼植物体の生長率に関する遺伝子型間差異. 近畿作物・育種研究会第162回例会,

- 京都市.
- 南 正彦, 呉羽織衣, 森真理, 入江俊一 (2006) SAGE法を用いた白色腐朽菌*Phanerochaete chrysosporium* RP78の遺伝子発現プロファイリング, 日本農芸化学会2006年度大会, 京都市.
- 濱本雄二, 入江俊一, 吉野史彦, 齋藤久美子, 佐藤利次 (2006) シイタケにおける組換えマンガンペルオキシダーゼ遺伝子の発現, 日本農芸化学会2006年度大会, 京都市.
- Minami, M., O. Kureha, M. Mori, H. Kamitsuji, K. Suzuki and T. Irie (2006) Serial analysis of gene expression of *Phanerochaete chrysosporium*, 20th IUBMB International Congress of Biochemistry and molecular Biology, Kyoto city.
- 南 正彦, 林達成, 伊吹隆, 長谷川博, 入江俊一 (2006) 白色腐朽菌*Phanerochaete chrysosporium*におけるeIF5AおよびDHS転写物量の経時変化, 日本菌学会50周年記念大会, 千葉市.
- 南 正彦, 呉羽織衣, 森 真理, 上辻久敏, 鈴木一実, 入江俊一 (2006) リグニン分解酵素発現における*Phanerochaete chrysosporium*の網羅的遺伝子発現プロファイリング, 第56回日本木材学会秋田大会, 秋田市.
- 秋友康夫, 岩間憲治, 矢部勝彦 (2006) 多孔質ホースを用いた自動地中灌漑の実用化に関する研究, 農業土木学会京都支部第63回研究発表会, 大阪市.
- 泉 泰弘, 飯嶋盛雄 (2006) コムギーダイズ連続不耕起輪作における根系発達と収量の経年変化およびサブソイラ耕による心土破碎処理, 第221回日本作物学会, 東京大学.
- 吉田智晴, 泉 泰弘, 飯嶋盛雄 (2006) コムギーダイズ連続不耕起輪作における作物の水吸収: 心土破碎による育成改善, 同上.
- Zegada-Lizarazu, W., L. Kanyomeka, Y. Izumi and M. Iijima (2006) Potential agricultural use of seasonal flooded wetlands in Namibia and the water use of pearl millet, 同上.
- Zegada-Lizarazu, W. L. Kanyomeka, Y. Izumi and M. Iijima (2006) Root growth and source of water used by intercropped pearl millet in a semiarid environment in Namibia, 同上.
- 金木亮一, 古川政行, 並河治香, 田中正 (2006) 給排水調節ユニットによる水田からの表面流出負荷削減, 農土学会大会, 宇都宮市.
- Kawachi, T., H. Nagai and S. Nomura (2006) Direct Measurement of Soil pH using A Semiconductor pH Sensor, PITTCO2006, USA.
- 川地 武, 李 泰勲 (2006) 安定型処分場周辺の地下水汚染の事例と修復過程の考察, 第12回地下水・土壤汚染とその防止対策に関する研究集会, 京都.
- 川地 武 (2006) 市街地の土壤汚染と対策の現状, 土壤肥料学会中部支部講演会, 福井.
- 川地 武 (2006) 地盤材料の化学試験はいかにあるべきか, DS座長, 第41回地盤工学研究発表会, 鹿児島.
- 小池恒男, 國松孝男, 井田秀美 (2006) 冬期湛水・不耕起をはじめとする環境保全型稲作の経営経済分析, 第7回日本有機農業学会大会, 福岡市.
- 増田佳昭 (2006) 組合員の事業利用構造の変化と協同組織性の展望, 日本協同組合学会第26回大会シンポジウム報告集, 28-38.
- Iguni, Y., and Y. Masuda (2006) Features and efficiency of direct payment in Japan. Preceding for mini-symposium "Designing agricultural policy in Net Food Importers: Market Access and Direct Payments", the 56th annual meeting of the Association of Regional Agriculture and Forestry Economics, 70-93.
- 増田佳昭 (2006) 座長改題「日本型総合JAの将来ビジョンを考える」, 近畿農協研究No.223, 4-5.
- 増田佳昭 (2006) 座長改題「生産資材事業改革の具体策を考える」, 近畿農協研究No.224, 3.
- 小谷廣通, 土井章宏, 堀野治彦 (2006) 野洲川用水の多面的機能の経済評価, 平成18年度農業土木学会大会講演会, 宇都宮大学.
- 岡野寛治, 西山亜津子, 三木聡子, 平田和男, 宇佐川智也 (2006) エリンギを栽培した真竹培地のインビトロ消化性, 日本畜産学会第106回講演要旨, 22, 福岡市, 3月.
- 森田真未, 相坂 樹, 岡野寛治, 足立吉敷, 稲富聡 (2006) エリンギ栽培後のコーンコブミール廃培地のヒツジでの消化性, 日本畜産学会第106回講演要旨, 39, 福岡市, 3月.
- 岡野寛治, 大越那津美, 西山亜津子, 平田和男, 宇佐川智也, 北川政幸 (2006) 担子菌培養による竹の飼料価値の向上, 第44回肉用牛研究会長崎大会, 9-11, 長崎市, 10月.
- 宇佐川智也, 大角雅晴, 岡野寛治 (2006) 春季から夏季にかけての屋外におけるサフォーク種めん羊の体表面温度と羊毛の断熱効果, 日本綿羊研究会報, 25, 中津川市, 10月.
- 中尾博行, 中井克樹, 沢田裕一 (2006) 琵琶湖におけるブルーギル繁殖コロニー構成個体の特性, 2006

- 年度日本魚類学会年会, 静岡市.
- 西田哲, 荒木ゆう子, 沢田裕一 (2006) 緑化害虫ヒロヘリアオイラガの寄生樹種と繭発生量の季節変動. 関西病虫害研究会第88回大会, 奈良市.
- 高野裕樹, 南野孝洋, 兼頭淳, 沢田裕一 (2006) ブルーギルの卵, 仔魚に対する魚類の捕食者と保護雄の行動について. 第42回魚類自然史研究会, 草津市.
- 中尾博行, 中井克樹, 沢田裕一 (2006) 琵琶湖におけるブルーギル繁殖個体の摂餌生態. 第42回魚類自然史研究会, 草津市.
- 金子雅典, 野田悟志, 沢田裕一 (2006) 水田におけるホトケドジョウの生活史. 第42回魚類自然史研究会, 草津市.
- 清水顕史・小松亜希子・加藤謙之・長谷川博・池橋宏 (2006) イネのリン酸欠乏ストレスによって誘導される酸性フォスファターゼ活性に関する量的遺伝子座は, 発現遺伝子解析でも確認された, 日本育種学会第110回講演会, 松山市.
- 清水顕史 (2006) パソコンを使った研究支援AFLPによる遺伝解析・発現遺伝子解析の場合, 日本育種学会第110回講演会, 松山市.
- 清水顕史・櫛橋勇介・新名陽平・加藤謙之・宍戸理恵子・野村和成・池橋宏 (2006) イネの低pHストレス耐性に関する遺伝解析, 日本育種学会第109回講演会, 府中市.
- 中江美子, 須戸 幹, 倉茂好匡 (2006) 伏流水中における水田施用農薬の動態第12回地下水・土壌汚染とその防止対策に関する研究集会, 京都.
- 伊庭一磨, 須戸 幹, 増田佳昭 (2006) 水田の春作業期における水質汚濁物質の流出メカニズムとその定量的評価, 日本水環境学会第40回年会, 仙台.
- 佐藤三訓, 川崎悦子, 須戸 幹 (2006) 琵琶湖流域における水田群(白鳥川流域)における除草剤の流出, 日本水環境学会第40回年会, 仙台.
- 岸本淳一, 須戸 幹 (2006) 一筆水田における除草剤の流出特性とその要因, 日本水環境学会第40回年会, 仙台.
- 岡田淳, 大野愉香, 須戸 幹 (2006) ライシメータにおける農薬の分解速度とそれに及ぼす環境要因の検討, 日本水環境学会第40回年会, 仙台.
- 大野愉香, 須戸 幹 (2006) 琵琶湖内湖(志那中内湖)における除草剤の浄化機能に関する研究, 日本水環境学会第40回年会, 仙台.
- Kirchner, S., P. Soteropoulos, S. Sugiura, B. Tian and R. Ferraris (2006) Identification by microarray of dietary phosphorus (P) responsive genes in rainbow trout intestine. (Program/Abstract # 491.1) Experimental Biology 2006, April 1-5, Moscone Convention Center, San Francisco, CA, USA.
- 浜田博幸, 富田麗子, 岩館康哉, 小林括平, 鈴木一実 (2006) *Pepper mild mottle virus* (PMMoV) の外被タンパク質 (CP) アミノ酸変異L13FとG66Vの共同的な作用がCapsicum 属植物のL3 抵抗性を打破させる, 平成18年度日本植物病理学会大会, 札幌市.
- 鈴木一実, 村井 淳, 富田麗子, 浜田博幸, 三浦由雄 (2006) カブシクム属植物のウイルス抵抗性機構の解析, 第8回植物ウイルス病研究会, 札幌市.
- 高橋卓也 (2006) 森林認証材に価格プレミアムは発生するだろうか? 一部分均衡数値モデルによる一考察一, 日本森林学会大会, 東京都.
- Nakamura, M. & T. Takahashi (2006) Operational Complexity, Uncertainty and Environmental Management System Certification Decisions: Japanese Manufacturers, Third World Congress of Environmental and Resource Economists, 京都市.
- 富岡昌雄 (2006) 「壁」に直面する環境農業直接支払い政策—ドイツ・バーデンヴュルテンベルク州のMEKAプログラムを例に一, 第56回知己農林経済学会大会, 大阪.
- 上町達也, 北川めぐみ, 常井秀人, 松本百合香, 西尾敏彦 (2006) アジサイの2種類の小花におけるクラスB遺伝子の発現解析, 園芸学会平成18年度秋季大会, 長崎市.
- Uemachi, T., A. Himeno and T. Nishio (2006) Morphology of the decorative flowers in Hydrangeaceae. 27th International Horticultural Congress, Seoul Korea.
- Kesumawati, E., T. Uemachi, M. Hosokawa and S. Yazawa (2006) Phytoplasma concentration and green-flowering stability in Hydrangea macrophylla. 27th International Horticultural Congress, Seoul Korea.
- 上町達也, 奥村麻未 (2006) アジサイ花房型変異系統の花序構造の解析. 平成18年度園芸学会近畿支部大阪大会, 堺市.
- 谷川寅彦, 矢部勝彦 (2006) 地中連続灌漑の実用化に関する研究 (XI) 平成18年度農業土木学会大会講演会(講演要旨集502-503) .
- 谷川寅彦, 矢部勝彦 (2006) 地中連続灌漑の実用化に関する研究 (XII), 92-93.
- 谷川寅彦, 矢部勝彦, 山本太平 (2006) SIMERUS Soil Integrated Moisture Environment for Rural and Urban Sustainability, 乾燥地研究セ

ンター共同研究発表会（講演要旨集13-16）。

6. 研究会等、講演会、特別講義での発表

1) 研究会等における発表

岩間憲治 (2006) 無代かき・育苗箱全量施肥栽培が水田土壌の理化学性に及ぼす影響、平成18年度農林水産試験研究成果発表会、滋賀県立大学、2006年12月15日

川地 武 (2006) 廃棄物の土壌・地盤材料としての有効利用と問題点、滋賀医科大学ゼロエミッションセミナー、草津、2006年1月12日。

小池恒男 (2006) 大規模環境保全型稲作経営の成立の経営経済条件についての実証的検討—水田における冬期湛水・不耕起栽培をはじめとする環境保全型農業成立の技術的条件的の解明ならびに環境保全機能の定量評価、流域水環境管理システムの構築をめざして—。第7回集水域研究会、天津市、2006年1月5日。

小池恒男 (2006) 地域農業振興にはたす自治体・JAの役割に関する特別研究会座長、2006年1月18、19日。

小池恒男 (2006) LOHASな消費者の持続可能な食のあり方。パネルディスカッション「環境こだわり消費者は食の共同生産者になれるか」コーディネーター、滋賀GPN食のグリーン購入研究会、彦根市、2006年1月27日。

小池恒男 (2006) 地域農業の担い手確保・育成・支援対策をどう考えるか。第30回地域農業振興に関する研究会、座長、京都市、2006年2月7日。

小池恒男 (2006) 水田における冬期湛水・不耕起栽培をはじめとする環境保全型農業成立の技術的条件的の解明ならびに環境保全機能の定量評価、流域水環境管理システムの構築をめざして、農法区分とその形成論理についての考察。平成17年度滋賀県立大学特別研究費第3回公開研究会、滋賀県立大学、2006年3月8日。

小池恒男 (2006) JA改革の課題と大会議案の批判的検討。農業協同組合研究所シンポジウム「農協改革と第24回全国大会の課題」第II報告、東京大学、2006年4月15日。

小池恒男 (2006) 米政策改革における全農県本部のポジショニングを問う。平成18年度第2回近畿農協研究会座長改題、天津市、2006年10月27日。

高橋卓也 (2006) 先進国における大都市水源林管理の比較研究—ニューヨーク、バンクーバー、東京の事例から考える—。環境政策に関わる研究会

(滋賀大経済学部)、彦根市。

上町達也、林憲司、北川めぐみ、高橋協子、常井秀人 (2006) アジサイにおけるがく片の花弁化機構の解明、第3回びわこバイオ国際セミナー、ポスター展示、長浜市、2006年12月20日。

2) 講演会

秋田重誠 (2006) 世界の稲作技術の動向と魚沼稲作の特質 JA北魚沼稲作技術検討会。

長谷川博 (2006) アイソザイム多型を利用したヨシ群落の動態解析—ことに河川環境との関係について。環境科学総合研究所第25回研究助成報告会、環境科学総合研究所、熱海市。

川地 武 (2006) 環境問題の過去・現在・未来、生活に生きる科学技術、滋賀県・日本学術会議近畿地区会議、大津、2006年3月18日。

川地 武 (2006) 土壌第三者評価の意義と課題（パネラー）、環境ビジネスメッセシンポジウム、長浜、2006年10月27日。

小池恒男 (2006) 21世紀初頭10年の歴史的位置と国民の暮らし。大学生協京都事業連合新年集会、京都市、2006年1月6日。

小池恒男 (2006) 21世紀初頭10年の歴史的位置と国民の暮らし。大学生協京都事業連合取引関係者賀詞交歓会、龍谷大学、2006年1月11日。

小池恒男 (2006) わが国の米事業戦略について考える。第3回民間流通米時代“売れる米づくり”シンポジウム、台北市、2006年1月16日。

小池恒男 (2006) 地域農業の担い手確保・育成対策の決め手は何か—本研究会の内容をどう受け止めるべきか—。第30回地域農業振興会に関する研究会、京都市、2006年2月8日。

小池恒男 (2006) 地域農業の担い手育成・支援・確保対策の決めては何か。パネルディスカッション「いま地域に生きる農業の担い手育成にどう取り組むか」コーディネーター、大垣市、2006年3月3日。

小池恒男 (2006) 売れる米作りとそのためにあるべきマーチャライジング。平成17年度官内土地改良区の役職員ならびに県農地集団化技術者協議会彦根支部会員研修会、湖東振興局、2006年3月13日。

小池恒男 (2006) 食のグローバル化について考える。平成18年度公開講義オリエンテーション交流センター長記念講演、滋賀県立大学、2006年4月8日。

小池恒男 (2006) 米政策改革と需給調整システムへ

- の移行, J A 千葉中央会農業振興部, 千葉市, 2006年6月9日.
- 小池恒男 (2006) 集落営農の推進とこれからの地域農業の展開. 集落型経営体推進会議指導者研修会, 佐賀県杵島郡, 2006年7月21日.
- 小池恒男 (2006) 新たな自治体農政の展開方向を見極める. 平成18年度(通算第19回)自治体農政総合研究会総括報告, 京都市, 2006年8月11日.
- 小池恒男 (2006) 米政策改革における全農県本部のポジショニングを問う. 日本協同組合学会第6回大会新シンポジウム「新政策下の協同組合のCOMMENTARY」におけるコメント, 新潟市, 2006年10月1日.
- 小池恒男 (2006) 地域農林経済学研究者の役割と評価—社会貢献の視点より—. 座長改題, 和泉市, 2006年10月28日.
- 小池恒男 (2006) これまでの農業これからの農業—戦後農政の「総決算」と滋賀県農業—. コーブしが地域食料問題研究会公開講座, 野洲市, 2006年11月28日.
- 増田佳昭 (2006) 現在の農業情勢とこれからの農政. 亀岡市農業委員会総会講演, 亀岡市, 2006年5月26日.
- 増田佳昭 (2006) 経済事業改革の到達点と課題. 農業協同組合研究会課題別研究会, 東京都, 2006年7月22日.
- 増田佳昭 (2006) 農地・水・環境保全向上対策と土地改良区の課題?. 彦根市土地改良区連合会総会講演, 彦根市, 2006年12月1日.
- Sawada, H. (2006) Forecasting of the brown planthopper in Japan. National Training Course of Forecasting and Control of the brown planthopper. Jatisari Pest Forecasting Center, West Java, Indonesia. 30 August 2006. (日本におけるトビイロウンカの発生予察, トビイロウンカ予察・防除全国研修会特別講演, インドネシア農業省病害虫発生予察センター, 西ジャワ州, インドネシア, 2006年8月30日).
- Sawada, H. (2006) Bio-ecology of the fruit-fly in the tropics. Directorate of Food Crop Protection (DFCP), Ministry of Agriculture, Indonesia, Jakarta. 4 September 2006. (熱帯果実害虫ミバエ類の発生生態, インドネシア農業省作物保護局, ジャカルタ, インドネシア, 2006年9月4日).
- 中尾博行, 沢田裕一 (2006) 琵琶湖におけるブルーギルの繁殖に関する新知見の紹介. 第1回外来魚情報交換会, 主催: 琵琶湖を戻す会, 後援: 滋賀県, 協力: 滋賀県立琵琶湖博物館, 2006年1月29日.
- 高野裕樹, 南野孝洋, 兼頭淳, 沢田裕一 (2006) コクチバスを琵琶湖で確認—発見の経緯と衝撃映像. 第1回外来魚情報交換会, 主催: 琵琶湖を戻す会, 後援: 滋賀県, 協力: 滋賀県立琵琶湖博物館, 2006年1月29日.
- 藤田建太郎, 沢田裕一 (2006) コクチバス確認—その後の対応と繁殖の可能性. 第1回外来魚情報交換会, 主催: 琵琶湖を戻す会, 後援: 滋賀県, 協力: 滋賀県立琵琶湖博物館, 2006年1月29日.
- 須戸 幹 (2006) 農業散布が環境に及ぼす影響について, 安全・安心の売れる米作り研修会 (湖東地域振興局農産普及課), 2006年3月25日.
- 須戸 幹 (2006) 澁川流域での調査結果から見えてきた農業濁水対策, 宇曾川水系農業濁水対策研修会 (滋賀県湖東振興局), 2005年1月27日.
- 須戸 幹 (2006) 澁川流域での調査結果から見えてきた農業濁水対策, 澁川農業濁水対策連絡会議 (滋賀県湖東地域振興局), 2005年2月5日.
- 高橋卓也 (2006) 三都水源林ものがたり—ニューヨーク、バンクーバー、東京の水源林から考える—, 平成18年度滋賀県立大学春期公開講座, 彦根市, 2006年5月20日.
- 高橋卓也 (2006) 滋賀県における環境ビジネスの展開, 持続可能な社会をめざす滋賀の産業—その現状と政策課題— (「シーケンシャル・ユース評価手法」研究グループ中間成果報告会), 財団法人滋賀県産業支援プラザ地域結集型共同研究事業プロジェクト推進室, 大津市, 2006年11月10日.
- 富岡昌雄 (2006) 佐藤剛史報告「県民と育む農の恵みモデル事業1年目, その成果と課題」へのコメント, 福岡県農政部・科学研究費補助金「生態系調和型農業への政策転換と日本版GAPの構築に関する総合的研究」プロジェクトチーム (代表者: 横川洋) 主催「環境直接支払いシンポジウム—県民とともに育む農の恵み—», 福岡市, 2006年3月18日.

3) 授業

- 長谷川博 (2006) やさしい分子生物学入門. 滋賀県立大学・守山高校高大連携事業, 守山高校, 2006年7月26日.
- 長谷川博 (2006) やさしいバイオテクノロジー. 滋賀県立大学・虎姫高校高大連携事業, 虎姫高校, 2006年7月28日.
- 長谷川博, 清水顕史 (2006) 「水辺の植物, ヨシについて」, 講義・ヨシとはどのような植物なのだろう

うか、実験・ヨシからDNAをとりだす。滋賀県立大学高大連携講座、滋賀県立大学、2006年8月1日。

長谷川博、清水顕史(2006)植物組織からのDNAの抽出とPCRによるDNA断片の増幅。滋賀県立大学・守山高校高大連携事業、滋賀県立大学、2006年8月3日～4日。

長谷川博、入江俊一(2006)DNAの切断と電気泳動実験・大腸菌への遺伝子導入実験。滋賀県立大学・虎姫高校高大連携事業、滋賀県立大学、2006年8月18日。

長谷川博(2006)遺伝子の時代ー遺伝子から見る生命、生物の姿、BICSを活用した高大連携ーテレビ会議システムを用いた講義発信。発信先：膳所高校。滋賀県総合教育センターの依頼による。2006年10月25日。

長谷川博、清水顕史(2006)講義と実験「PCRによる組換え遺伝子検出と制限酵素処理」。平成18年度高校生バイオテクノロジー体験セミナー、滋賀バイオ産業推進機構、滋賀県立大学、2006年12月16日。

矢部勝彦、岩間憲治(2006)大学連続講座・講義「水を節約した植物栽培法」、実験「地中の低いところから高いところへ水を移動させよう」、2006年7月31日。

金木亮一(2006)琵琶湖の水質と農業、大垣南高校、2006年12月21日。

小池恒男(2006)日本における農業・農村の環境問題。独立行政法人国際協力機構(JICA)、ゼロ・エミッション型農業・農村環境システム研修、帯広市、2006年3月6日。

小池恒男(2006)米の文化と歴史。第34回米・食味鑑定士講習会、豊中市、2006年3月18日。

小池恒男(2006)農業の重さーわが国食料安全保障について考えるー。第6期京都創政塾、京都市、2006年5月27日。

小池恒男(2006)地域農業振興計画策定のためのビジョンと戦略思考。平成18年度営農指導員ステップアップ研修会、大津市、2006年6月8日。

小池恒男(2006)地球環境問題と水田環境。環境保全型農業論。水田環境鑑定士資格取得第6回講習会、三重県青山町、2006年7月8日。

小池恒男(2006)論文の書き方。平成18年度近畿農協上級管理者第1次研修会、大津市、2006年7月11日。

小池恒男(2006)米の文化と歴史。第35回米・食味鑑定士講習会、東京千代田区、2006年7月16日。

小池恒男(2006)品目横断的経営安定対策は担い手育成にどう機能するか。京都大学農学部第70回農林経済・経営・簿記講習会(京大公開講座)、京都市、2006年7月25日。

小池恒男(2006)食料・農業・農村基本計画と地域農政の展開方向。平成18年度地方農政局職員行政実務研修、京都市、2006年9月22日。

小池恒男(2006)地域農業計画論。滋賀県農協営農指導員1級資格認証のための講習会、大津市、2006年10月17日。

小池恒男(2006)地球環境問題と水田環境。環境保全型農業論。水田環境鑑定士資格取得第7回講習会、越前市、2006年11月26日。

鈴木一実(2006)植物の病気について。大学模擬講義。滋賀県立守山高等学校、平成18年11月17日。

富岡昌雄(2006)環境と農業。高島市「環境基本計画の策定に向けた学習会」。今津東コミュニティセンター、2006年2月23日。

富岡昌雄(2006)滋賀県の農業環境問題について。(財)日本国際協力センター「ゼロ・エミッション型農業・農村環境システム」コース、滋賀県立大学、2006年3月14日。

富岡昌雄(2006)農業経済論。滋賀県農業協同組合中央会営農指導員(1級)養成研修会、滋賀県農業教育情報センター、2006年10月20日。

矢部勝彦、岩間憲治(2006)作物生産における水資源。講義と実験。滋賀県立大学・滋賀県立高等学校高大連携事業、2006年7月31日。

7. 競争的研究資金の導入

1) 本学特別研究

入江俊一。白色腐朽菌の遺伝子発現プロファイリングにおける未同定遺伝子のアノテーション。奨励研究、平成18年度、50万円。

2) 科学研究費補助金

入江俊一。白色腐朽菌cAMPシグナリング関連遺伝子における分子機構の解析。若手研究(B)、平成16?18年度、80万円。

飯嶋盛雄、北川勝弘、山内章、野島博、泉 泰弘、Osmund Mwandemele、Adayo Ogunmokun、Luke Kanyomeka、Selma Niitembu。基盤研究(B)(2)海外、ナミビア国半乾草地域におけるトウジンビエ栽培体系下での氾濫水利用型粗放稲作の導入。平成16?19年度、500万円。

伴 修平, 大田啓二, 須戸幹, 熊谷道夫, 「代かき水」が琵琶湖生態系に与える影響の評価, 基盤研究 (B) (2), 平成16~18年度, 910万円.

大田啓二, 伴 修平, 須戸幹, 丸尾雅啓, 自然水域における光化学反応の環境科学的評価, 基盤研究 (B), 平成17~19年度, 690万円

杉浦省三, リン応答遺伝子発現による環境負荷低減技術の開発, 科学研究費補助金, 特別研究促進費 (基盤B相当), 平成18~19年度, 340万円.

横川洋, 富岡昌雄ほか7名, 生態系調和型農業への政策転換と日本版GAPの構築に関する総合的研究, 基盤研究 (B) 平成16~18年度.

上町達也, アジサイにおける形態の異なる2種類の小花の形成機構の解明, 基盤研究 (C) 平成18-19年度, 210万円.

3) 政府および地方公共団体 (関連法人を含む) からの補助金

須戸 幹, 滋賀県農業技術振興センター, 近畿地域の水稲の環境負荷低減技術の体系化と負荷予測モデル開発, 平成17~19年度, 190万円.

須戸 幹, 滋賀県, 農業排水対策検証評価調査, 平成18年度, 399万円.

須戸 幹, 滋賀県, 環境影響調査農薬分析業務, 平成18年度, 300万円.

仁連孝昭, 金谷健, 井手慎司, 小幡範雄, 高橋卓也, 吉田徹 (2006) 環境調和型産業システム構築のための基盤技術の開発 (研究3-シーケンシャル・ユースの評価手法の開発), 滋賀県地域結集型共同研究事業 (科学技術振興事業団), 2003年1月~2007年12月, 1223.1万円.

矢部勝彦 (2006) 耐塩性植物の耐塩特性と除塩効果に関する研究, 鳥取大学乾燥地研究センター共同利用研究, 平成18年度, 30万円.

4) その他財団からの研究補助金

長谷川博 (2006) 人間文化研究機構研究「人と水」(総合地球環境学研究所) に連携研究員として参加.

川地 武 (2006) 土壌・地下水汚染と対策に関する事例研究, 2006. 4月1日~6月30日, 25万円.

高橋卓也 (2006) 環境関連技術革新はいかにして発生するのか-日本企業における計量経済分析-, (財)住友財団環境研究助成, 2004~2006年度, 110万円.

5) 受託研究の受け入れ

川地 武 (2006) グリーンフィールドプロジェクト, 2006年6月~2007年3月31日, 50万円.

川地 武 (2006) 土壌・地下水調査結果の解析および浄化対策に関する検討, 2006年6月1日~2007年3月31日, 60万円.

8. 特許、実用新案、品種登録、意匠、その他著作権に関わる事項

川地 武他 (2006) 特許登録番号3834808, 有機塩素化合物の処理装置及びシステム.

川地 武他 (2006) 特許登録番号3800389, 有機塩素化合物の処理装置及びシステム.

川地 武他 (2006) 特許登録番号3800426, 浚渫泥土の処理方法.

川地 武他 (2006) 特許登録番号3800690, 土層側壁の補強方法および遺跡見学用地下通路の構築方法.

川地 武他 (2006) 特許登録番号3767337, コンクリートの脱気方法及び脱気プラグ.

川地 武他 (2006) 特許登録番号3791989, 結晶化ガラス建材の取り付け方法.

川地 武他 (2006) 特許登録番号3828947, 発泡型防火性組成物.

岡野寛治他 (2006) 特開2005-312406, 白色腐朽菌を利用した針葉樹材を原料とする発酵飼料及びその製造方法.

9. 社会への貢献

1) 審議会、委員会等

秋田重誠 (2006) 国際イネ研究所理事 (2006.3まで) 世界の食糧, 貧困問題解決に参画.

秋田重誠 (2006) 農林水産省統計調査部作況委員会 部会長 国の施策立案の基礎となる作物統計の妥当性検討に参画.

秋田重誠 (2006) 農林水産省統計調査部 水稻平年収量検討会委員長.

秋田重誠 (2006) 農林水産研究高度化事業専門評価委員.

秋田重誠 (2006) 日本学術振興会特別研究員等審査会専門委員.

秋田重誠 (2006) 滋賀県農業技術振興センター試験研究等推進委員会委員.

長谷川博 (2006) 滋賀バイオ産業推進機構・理事

- (普及啓発部会副委員長), 滋賀県, 3回。
- 長谷川博 (2006) 遺伝子組換え作物栽培指針検討委員会・委員, 滋賀県, 1回。
- 長谷川博 (2006) 滋賀県立膳所高等学校スーパーサイエンス事業・運営指導委員, 滋賀県 教育委員会, 2回。
- 泉 泰弘 (2006) 滋賀県立虎姫高等学校評議員。
- 金木亮一 (2006) 国営野洲川中流土地改良事業計画樹立に関する専門技術者, 近畿農政局, 3回。
- 川地 武 (2006) 環境省・射撃場鉛汚染対策指針検討委員会委員, 4回。
- 川地 武 (2006) 滋賀県・環境審議会委員, 6回。
- 川地 武 (2006) 滋賀県・環境審議会地下水保全小委員会委員長, 5回。
- 川地 武 (2006) 滋賀県・リサイクル製品認定審査委員, 3回。
- 川地 武 (2006) 滋賀県・有機性資源活用施設整備事業費補助金交付審査会委員, 1回。
- 川地 武 (2006) 栗東市・RDエンジニアリング処分場環境調査委員会委員, 5回。
- 川地 武 (2006) NPO・イービーイング土壤第三者評価委員会委員, 3回。
- 小池恒男 (2006) 彦根市都市計画審議会, 委員。
- 小池恒男 (2006) 滋賀県農政懇話会中山間地域等総合対策検討部会, 委員。
- 小池恒男 (2006) 滋賀県農業協同組合教育審議会, 副会長。
- 小池恒男 (2006) 滋賀県京都府奈良県大阪府農協職員資格認証試験1級試験委員会, 委員長。
- 小池恒男 (2006) 滋賀県京都府奈良県和歌山県大阪府兵庫農協職員資格認証試験上級試験委員会, 委員長。
- 小池恒男 (2006) しがの米政策推進本部, 本部委員。
- 小池恒男 (2006) 滋賀県淡海生涯カレッジ専門委員会, 委員。
- 小池恒男 (2006) 京都府農業会議, 専門委員。
- 小池恒男 (2006) (社)農業開発研修センター, 理事及び運営委員。
- 小池恒男 (2006) 大学生協京都事業連合, 理事長。
- 小池恒男 (2006) 滋賀県立大学生協, 副理事。
- 小池恒男 (2006) 農業濁水問題研究会, 会長。
- 小池恒男 (2006) 食と農を考える県民会議幹事。
- 小池恒男 (2006) 暮らしの協同の研究所理事。
- 小池恒男 (2006) 農協研究会理事。
- 増田佳昭 (2006) 滋賀県, 環境こだわり農業審議会, 委員。
- 増田佳昭 (2006) 滋賀県, 農政懇話会中山間地域等総合対策検討部会, 部会員。
- 増田佳昭 (2006) 滋賀県, 魚の道づくり・魚のゆりかご水田検討委員会, 副委員長。
- 増田佳昭 (2006) 滋賀県, 田園水循環検討委員会, 委員。
- 増田佳昭 (2006) 滋賀県, しがの米政策推進本部基盤整備部会, 副部会長。
- 増田佳昭 (2006) 滋賀県, 環境こだわり農業影響評価検討委員会, 委員長。
- 増田佳昭 (2006) 農林水産省近畿農政局, 行動計画に関する有識者懇談会, 委員。
- 増田佳昭 (2006) 京都府農業会議, 農業経営多角化・高度化推進検討会・会長。
- 増田佳昭 (2006) 全国農業協同組合中央会, 監査士試験委員会, 委員。
- 増田佳昭 (2006) 全国農業協同組合中央会, JAの総合指標化に関する研究会, 委員。
- 増田佳昭 (2006) 近畿地区農業協同組合中央会, 農協職員資格認証試験委員会(上級), 委員。
- 増田佳昭 (2006) 滋賀県立大学生協同組合, 理事長。
- 増田佳昭 (2006) 地域農林経済学会, 理事。
- 岡野寛治 (2006) 米原市バイオマスタウン構想策定委員会委員長, 米原市, 3回。
- 岡野寛治 (2006) 外来魚有効利用試験受託候補者審査委員会委員長, 滋賀県漁業協同組合連合会, 1回。
- 岡野寛治 (2006) 平成17年度食の安全・安心確保交付金「家畜衛生の推進」および「飼料の安全性の確保」に関する意見書, 滋賀県畜産課, 1回。
- 沢田裕一 (2006) 滋賀県環境審議会, 環境企画部会, 滋賀県, 1回。
- 沢田裕一 (2006) 滋賀県環境審議会, 自然環境部会, 滋賀県, 1回。
- 須戸 幹 (2006) 環境こだわり農業審議会, 委員, 滋賀県, 4回。
- 須戸 幹 (2006) 環境こだわり農業環境影響調査事業調査検討委員会, 委員, 滋賀県, 2回。
- 須戸 幹 (2006) 栗東市環境保全対策委員会, 委員, 栗東市, 2回。
- 高橋卓也 (2006) 環境効率向上フォーラム, 幹事, 滋賀県, 1回。
- 高橋卓也 (2006) 財団法人びわ湖造林公社評議員会, 評議員, 財団法人びわ湖造林公社, 1回。
- 高橋卓也 (2006) 滋賀県卸売市場審議会, 委員, 滋賀県, 1回。
- 高橋卓也 (2006) 滋賀県森林審議会, 委員, 滋賀県, 4回。
- 高橋卓也 (2006) 滋賀県森林審議会・森林保全部会, 部会長, 滋賀県, 1回。

高橋卓也 (2006) 第3回全国菜の花学会・楽会in 東近江, 運営委員, 菜の花プロジェクトネットワーク, 1回.

高橋卓也 (2006) 特定非営利活動法人エコ村ネットワークキング, 理事, 特定非営利活動法人エコ村ネットワークキング, 4回.

高橋卓也 (2006) 南部里山フォーラム, コーディネーター, 湖南地域振興局, 1回.

高橋卓也 (2006) 南部流域森林づくり委員会, コーディネーター, 湖南地域振興局, 3回.

高橋卓也 (2006) 木質バイオマス利活用検討委員会, 委員長, 東近江地域振興局・東近江市・ヤンマー株式会社, 1回.

富岡昌雄 (2006) 滋賀県環境こだわり農業審議会, 会長, 4回.

富岡昌雄 (2006) 湖国農政懇話会中山間地域等総合対策検討部会, 部会員, 1回.

富岡昌雄 (2006) 滋賀県中小企業団体中央会再資源化連携研究会, 会員, 1回.

上町達也 (2006) 財団法人滋賀県公園・緑地センター, 評議委員会 委員, 2回.

矢部勝彦 (2006) 滋賀県棚田地域等保全検討委員会, 委員長, 滋賀県農林水産部.

矢部勝彦 (2006) 国営事業環境配慮アドバイザー, 近畿農政局.

2) 学会等の委員

秋田重誠 (2006) 近畿作物・育種研究会評議員

長谷川博 (2006) 日本育種学会, 常任幹事 (会計幹事), 4回

長谷川博 (2006) 近畿作物・育種研究会, 会長, 2回

金木亮一 (2006) 農業土木学会, 野洲川沿岸地区地域環境生態系調査検討委員会, 委員, 1回.

金木亮一 (2006) 農業土木学会, 児島湾周辺地域調査検討委員会, 委員, 2回.

金木亮一 (2006) 農業土木学会, 京都支部役員会, 役員, 1回.

金木亮一 (2006) 農業土木学会, 農村計画研究部会, 幹事, 1回.

川地 武 (2006) 地盤工学会・地盤材料の化学試験ワーキング座長, 4回

川地 武 (2006) 地盤工学会・表彰委員会委員, 2回.

川地 武 (2006) 日本材料学会・新材料技術評価委員会部会長, 3回.

小池恒男 (2006) 日本農業市場学会, 副会長.

小池恒男 (2006) 地域農林経済学会, 常任理事.

小池恒男 (2006) 月刊誌『農業と経済』編集委員, 副委員長.

増田佳昭 (2006) 日本フードシステム学会, 理事.

増田佳昭 (2006) 暮らしと協同の研究所, 企画委員, 運営委員.

増田佳昭 (2006) 近畿農業協同組合研究会, 運営委員.

小谷廣通 (2006) 農業土木学会, 野洲川沿岸地区地域生態系調査検討委員会, 委員, 1回.

岡野寛治 (2006) 肉用牛研究会, 評議員会, 1回.

岡野寛治 (2006) 関西畜産学会, 評議員会, 1回.

沢田裕一 (2006) 日本環境動物昆虫学会, 評議員会, 1回.

沢田裕一 (2006) 関西病虫害研究会, 評議員会, 1回.

沢田裕一 (2006) 関西病虫害研究会, 編集委員会, 2回.

須戸 幹 (2006) 環境科学会, 環境科学会誌編集委員会

鈴木一実 (2006) 北日本病害虫研究会評議員.

高橋卓也 (2006) 水資源・環境学会, 理事, 2回.

Takahashi, T. (2006) Corporate Social Responsibility and Environmental Management (John Wiley & Sons), Editorial Board Member.

富岡昌雄 (2006) 地域農林経済学会近畿支部第24回研究大会「地域から考える農業環境政策—滋賀県環境こだわり農業を中心に—」座長, 滋賀県立大学, 2006年7月15日.

富岡昌雄 (2006) 水資源・環境学会, 監事.

10. マスメディアとの対応

1) 新聞、雑誌等からの取材による記事

沢田裕一, 中尾博行 (2006) ブルーギルに"天敵"／巻き貝が卵や稚魚を食べる／滋賀県立大学が調査／, 日本経済新聞, 産経新聞, 2006年1月11日.

沢田裕一, 中尾博行 (2006) ブルーギルに天敵／巻き貝、卵や稚魚食べる／繁殖阻止のヒントと注目／滋賀県立大 琵琶湖で確認／, 中日新聞, 神戸新聞, 奈良新聞, 岐阜新聞, 中国新聞, 四国新聞, 徳島新聞, 信濃毎日新聞, その他多数, 2006年1月11日.

沢田裕一, 中尾博行 (2006) ブルーギル 駆除に秘策／琵琶湖などで猛威の外來魚／巻き貝、卵や稚魚襲う／新型網、生息場所で威力／, 中日新聞, 2006年2月7日.

2) TV、ラジオ番組への出演等

小池恒男 (2006) VOICE：お米の産地偽装に米穀店主の困惑と激怒. MBS(大阪毎日放送), 2006年9月18日.

増田佳昭 (2006) NHK大津放送局. おうみ発610. 農業濁水問題. 2006年4月11日放送.

増田佳昭 (2006) K B S 京都. びわこ放送. 大きく変わる!?食と農-W T O 農業交渉を考える. 2006年8月26日放送.

上町達也 (2006) ウィークエンド関西, アジサイの解説, NHK, 2006年6月24日.

(※ 本学教員・学生をアンダーラインで表示)

卒業論文・制作／修士論文リスト

卒業論文

●環境生態学科

- 0311001 井貝 堯 腐植物質のトリハロメタン生成能に関する研究
- 0311002 池田 悠 湖陸風が彦根市の気温環境に与える影響
- 0311004 遠藤 修作 水田におけるニゴロブナの潜在的餌資源としての二次生産量の算出
- 0311005 大倉 英也 植物プランクトンが関わる自然起源エストロゲン暴露シナリオの評価
- 0311007 川合絵理子 彦根周辺におけるアカマツ林の現状と遷移過程について
- 0311008 河野 真実 琵琶湖における植物プランクトンの総生産と純生産の関係
- 0311009 小林 良幸 河口部掘削の影響を受けた犬上川の下流部の地形変化
- 0311011 周防 恵理 小河川と排水路における溶存態ケイ素濃度の時間変化と人為的影響について
- 0311012 杉田 幸平 都市における島緑地の気温緩和効果
- 0311013 曾束 洋士 大気降水物負荷量の実測と評価法
- 0311014 楯 敬介 琵琶湖水中におけるFe(II)の鉛直分布を決定する要因について
- 0311015 角川 裕一 液果植物の種子散布に及ぼす鳥類の影響について
- 0311016 時政百合子 彦根市内の休耕田のヨシ群落におけるオオヨシキリの繁殖状況
- 0311017 中井健太郎 淀川水系における腹口吸虫*Parabucephalopsis parasiluri*及び*Bucephalopsis ozakii*による魚類への寄生虫感染動態把握と魚病阻止の提言に関する研究
- 0311018 中畑里枝子 温帯林主要樹種の樹液流・蒸散速度と樹冠部フェノロジーおよび環境条件の影響
- 0311021 中山 弘子 落葉広葉樹二次林の萌芽再生過程における光合成・蒸散特性
- 0311022 橋詰 和典 犬上川下流部のサイドチャンネルにおける湧水とその起源
- 0311024 藤林 豊 オオミジンコ*Daphnia magna*の成長・再生産に与えるセレン欠損および過多の影響について
- 0311025 保坂 奈美 落葉樹林内の気象特性 —金糞岳ブナ林の場合—
- 0311026 安岡 秀晃 琵琶湖における*Uroglana americana*シストの水平分布と生産量
- 0311027 山口真玲子 滋賀県湖東・湖北地方における緑化法面の植生状況と各種要因の影響
- 0311028 山本 陽太 水中に溶存する腐植物質と鉄の錯形成に関する研究
- 0311029 渡辺 千晶 彦根港周辺水域における下水処理施設からの放流水の影響
- 0311030 和田 彰之 水田のニゴロブナ稚魚の成長と食性
- 0211028 丸山 友幸 シメトリンとMEPによる光分解反応および腐植物質の影響

●環境計画学科環境社会計画専攻

- 0312001 東 秀朗 木くず再資源化率向上における中間処理業者の実態と役割
- 0312006 大橋 佳奈 団塊世代の定年退職男性による地域環境ボランティア活動の推進に関する研究
- 0312007 梶山 圭那 エコツーリズムにおけるガイド制度の創設経緯と問題点に関する研究 —屋久島を事例として—
- 0312009 亀山 太輔 中小建築物におけるエネルギー環境管理システム(簡易BEMS)の概念設計 —京都市立H高校を事例とした省エネルギー行動指針とエネルギーモニタリングシステムを用いたエネルギー管理方法の提案—
- 0312010 川村 友葵 イベントで効果的なごみ減量活動を実施するための必要条件の研究 —活動に取り組む人々の意識と言動に注目して—
- 0312013 坂井 一彦 シルバー人材センターの社会的発展に関する研究 —子育て支援事業の展開から—
- 0312015 佐々木裕介 産業廃棄物処理業者の優良性の判断に係る評価制度についての研究
- 0312016 佐藤 正人 ユニバーサルデザインの観点から見た駅構内情報板の在り方
- 0312017 佐藤 裕里 滋賀県における学校ビオトープの整備状況と活用方法に関する研究
- 0312019 新玉 拓也 多主体が連携した自然保護活動におけるコーディネーターの役割に関する研究 —高島市うおじまプロジェクトを事例として—
- 0312020 曾我 健 まちづくりワークショップにおけるファシリテーターの必要性についての研究

- 0312024 田中 絵美 環境アセスメントにおける方法書のあり方に関する研究
- 0312025 谷口 浩 エコアクション21の普及における課題と可能性に関する研究 ～滋賀県内の審査人を中心とした各主体を対象として～
- 0312026 地主 清太 川づくりにおける住民参加ネットワーク構築に関する研究 —大阪府寝屋川・ねや川水辺クラブを対象として—
- 0312027 戸嶋 祥浩 改訂版と既策定版都市マスタープランの比較研究～草津市都市マスタープランの策定過程に着目して～
- 0312028 鳥居 保人 環境広告におけるコピーの時代変遷と「表現の曖昧さ」に関する研究 —TCC「コピー年鑑」を対象として—
- 0312029 中上 洋平 官民協働による道路美化管理制度の有効性と課題 ～滋賀県「近江の美知普請」制度を事例として～
- 0312030 永田 雅 不法投棄防止条例の施行及び運用実態と効果 —産業廃棄物を対象に—
- 0312031 西村有加里 コミュニティ組織による水環境保全活動に関する研究～滋賀県守山市を対象として～
- 0312032 橋本美由紀 コミュニティガーデンの施設形態と活動内容の関係性について
- 0312033 浜野 純 マイカップ対応式自動販売機の課題と可能性
- 0312034 肥田真梨子 大学（全国）におけるISO14001活動の現状分析、活動の改善方法に関する研究～ISO14001認証取得大学間における違い～
- 0312035 福田 絵里 消費者の選好分析を用いた化粧品の選択基準に関する研究
- 0312036 藤井 康博 環境影響評価審査会の運営実態に関する研究～都道府県・政令指定都市を対象として～
- 0312038 水崎 陽一 ニュータウンでの『良好な住環境』をめぐる価値意識とその実現過程に関する研究～千里ニュータウンを事例として～
- 0312039 森 友秀 彦根市における市民団体活動の情報発信と交流の場に関する研究
- 0312042 山口健太郎 自動車リサイクル法施行の現状と解体処理業者に及ぼす影響に関する研究
- 0212011 北川 大介 景観計画策定過程における合意形成のあり方に関する研究
- 0212033 松本 洋人 森林所有者による主体的な森林管理の可能性に関する研究—「境まわり」の考察を中心として—
- 0112025 迫間 勇人 まちの開示に見るコミュニティの結合効果に関する研究—彦根市高宮町「色彩参画」を事例として—
- 0312005 太田 博史 自治体による戸建住宅屋上緑化支援施策に関する研究～支援実施自治体を対象として～
- 0312018 志部谷順平 ブログに掲載された写真の特徴に関する研究 ～国宝彦根城を事例として～
- 0312023 辰巳美登利 アジア・太平洋地域における湖沼NGOの活動比較に関する研究
- 0312046 箱森 昌太 家庭における生ごみ堆肥化と廃プラスチックリサイクルによるCO₂排出量削減効果に関する研究 —近江八幡市を対象として—
- 0212029 藤関 功樹 グラフィティの発生とその移り変わりに関する研究 ～大阪アメリカ村を対象として～
- 0212031 別生栄次郎 自治体による景観評価・施策に関する研究 —宇治市をケーススタディとして—
- 0212040 吉野 和 環境基本計画のテーマと大学研究とのかかわりに関する研究—彦根市環境基本計画と卒業論文・修士論文を対象として—
- 0112024 額田 拓 地域づくり主体としての集落営農組織の可能性—農事組合法人万葉の郷ぬかづかを事例研究として—
- 0012010 北村 陽香 彦根市における商店街活性化事業に関する研究～チャレンジショップの試みから～

●環境計画学科環境・建築デザイン専攻

- 0313001 足立真由子 (論文) 城下町彦根における都市街区の変遷に関する研究
(設計) 水没ジャパン —それでも水辺にすむ—
- 0313003 石倉 香織 (通年論文) 那智参詣曼荼羅に見る信仰世界の構成

- 0313004 伊藤舞衣子 (通年論文) 地震動により塑性履歴を受けた鉄骨フレームの残存耐力評価
- 0313005 井上 恵 (通年論文) 京都における新たな観光トイレの在り方
- 0313006 上田 宏樹 (論文) 琵琶湖湖岸周辺の駐車場についての調査・考察
～琵琶湖湖岸周辺の道の駅を例として～
(設計) Parking 一人と車が触れ合う場所
- 0313007 大友 貴生 (論文) 琵琶湖における港の活用方法と可能性ー長浜港整備計画を通じてー
(設計) 波紋 ー港からつながるものー
- 0313008 大取 祐介 (通年論文) 酒場の内部空間に関する研究 ー時系列的分析による空間の変容ー
- 0313009 大原 淳美 (通年論文) 木質面ラーメン構法に用いるパネル材に関する実験的研究
- 0313010 尾田 昌之 (通年設計) 風紋
- 0313012 北川智香子 (通年論文) 言説に表現された村野藤吾の建築思想について
- 0313013 木俣佐知子 (通年論文) 沙沙貴神社境内の空間構成と祭祀
- 0313014 久郷 晴哉 (通年設計) blend hill
- 0313015 倉西 正憲 (通年設計) 視野の意識
- 0313016 小林 加奈 (通年論文) 琵琶湖博物館におけるサイン計画に関する研究
- 0313017 齊藤 仁美 (通年設計) 一日一嬉
- 0313018 佐藤 正憲 (通年論文) 飲食店の外観デザインと利用者の入店心理
ー画素、統計データによる分析の可能性ー
- 0313019 柴田 勇貴 (通年論文) 避難所における防災機能に関する研究
ー非常用トイレのあり方を中心にー
- 0313020 杉原 徹平 (論文) 日本における混構造住宅の設計手法と可能性
(設計) 結の里 ー多賀環境学習ビレッジー
- 0313021 須口 真樹 (通年論文) 現代中低層集合住宅における共有空間の構成手法に関する考察
ー雑誌『新建築』に掲載された事例を通じてー
- 0313022 瀬戸 祥司 (通年論文) 湾曲壁工法の構造特性に関する研究
- 0313023 高橋 溪 (論文) 日本におけるムスリム社会とモスクの建築類型に関する考察
(設計) 形式の森 ー装置としての建築ー
- 0313024 田中 亜紀 (通年論文) 加賀車町ミョウチンヤシキ遺跡についての建築学的考察
- 0313025 谷水 あき (通年設計) すみれ荘の1日 ー楽しく住もうー
- 0313026 寺田 博一 (通年論文) 産廃問題が周辺住民へ与える影響に関する研究
ー栗東市RD処分場問題を事例にー
- 0313028 中 貴志 (論文) ウトロ口地区(宇治市)における居住空間とその変容に関する研究
(設計) ひとりたちの住み処
- 0313030 永田明日香 (通年論文) 長周期地震動を想定した高層建物の疲労損傷評価と柱梁接合部の繰り返し加力実験
- 0313032 羽尻 佑一 (通年設計) リズム
- 0313033 波多野倫之 (通年論文) 地下駅のプラットホームにおける視環境
- 0313034 原 寛紀 (論文) 湖南省 JR草津線三雲駅、駅舎及び駅前広場改修計画
(設計) エキ ーまちに根付く木ー
- 0313035 馬場 廣太 (論文) 重森三玲の茶室の研究ー天籟庵を中心としてー
(設計) 琵琶湖神仏習合化計画
- 0313036 疋田 香澄 (通年設計) 蛍の魅えるまち ー大津市長等地区都市水路再生計画ー
- 0313037 兵藤 由佳 (通年論文) 公共ホールの現状とこれから ー音に関する調査をもとにー
- 0313038 松宮 佑里 (論文) アムステルダム(オランダ)におけるタウンハウスの形態に関する考察
(設計) 橋の中の門と家
- 0313039 水野 浩嗣 (論文) 彦根市における木造アパートの特徴に関する研究
(設計) Forgotten Nature
- 0313040 宮田 亮 (通年設計) 陰陽

- 0313041 三輪 裕子 (論文) 地域と調和した畜産施設のあり方に関する研究
—都市近郊の養豚施設を中心にして—
(設計) 豚生×人生 —各務原アグリファーム—
- 0313044 森元 絢子 (通年論文) 野洲市の地盤特性に関する研究
- 0313045 山崎 直子 (通年設計) 食でつながるコミュニティ：土の上の穏やかな生活
- 0313046 山村はづき (通年論文) プルーノ・タウトの建築における色彩に関する研究
- 0313047 山盛 孝治 (通年論文) 伝統構法における仕口部分の構造特性に関する研究
- 0313048 吉岡 達哉 (通年論文) コンパクトシティを前提とした都市の徒歩生活圏に関する研究
—彦根市の大型店舗を対象として—
- 0313049 吉田 敏也 (論文) 米原駅周辺地域における都市形成とその変容に関する考察
(設計) 駅の上に都市を想う
- 0313050 依田 知大 (論文) 京都における墓地空間の空間的特質の変容に関する考察
—大文字山山麓の蓮台野を事例として—
(設計) アングラ・アナグラ —立杭再利用計画—
- 0313051 井上 友彩 (通年論文) 海岸景観の再生・保全に対するアートイベントの効果に関する考察
- 0313052 倉本 真衣 (通年設計) 少子化に対する小学校の提案 —地域と見守る子どもの成長—
- 0313053 菅田 祐子 (通年論文) 伝統構法における足固めの耐震性能に関する研究
- 0213016 北井 公平 (通年設計) わたしたちのピラミッド
- 0213017 木村 真也 (論文) 住宅の公室私室における空間構成および外部環境との距離に関する研究
—1989年～2001年にかけての建築家による住宅作品と住宅メーカーとの比較分析—
(設計) Inheritance
- 0213025 柴田 由紀 (通年論文) 集合住宅における原風景に関する研究
- 0213032 竹村 紗羅 (通年論文) 谷口吉生の美術館建築における設計手法に関する考察
- 0213034 谷口 藍梨 (通年論文) 大橋川(島根県松江市) 周辺まちづくりと景観形成手法に関する考察
—治水・景観・合意形成—
- 0213037 中濱 春洋 (論文) 韓国における日式住宅の変容に関する考察—慶州の鉄道官舎を事例にして—
(設計) Shuffled —関係性の連鎖—
- 0213040 藤崎 友太 (通年論文) 免震構造物の動特性と地震応答
- 0213052 岡崎 まり (論文) 大阪市西成区あいりん地域(釜ヶ崎)におけるサポータティブハウスの成立
過程とその可能性に関する考察
(設計) ミライヨセバ —よどみに浮かぶ都市の泡—
- 0113017 小林 弘幸 (通年論文) 木造建物の水平引張試験に基づく地震応答解析と観測記録との比較
- 0013038 林 亮介 (通年論文) 珪砂混入モルタルの材料性質に関する基礎的研究

●生物資源管理学科

- 0314001 石井 敬己 屋上緑化における自動水管理技術の新しい可能性
- 0314002 石黒 豊 スギ枯れに及ぼすスギ葉中の無機成分と照度の影響について
- 0314003 井関洸太郎 水稲玄米へのカドミウム蓄積機構
- 0314005 膽吹 憲吾 甲賀市の生ゴミ堆肥化システムにおける物質収支
- 0314006 伊吹知恵美 *Oryza sativa* L., *Oryza glaberrima* Steud., およびその種間交雑系統NERICAの土壌
圧縮ストレス耐性
- 0314007 内田 瞳 有機性廃棄物の再生利用における地域農業の活性化への取り組み —熊本宇城農業
協同組合の牛糞及び動植物性残渣混合堆肥システムを事例として—
- 0314008 榮長 裕晴 *Phanerochaete chrysosporium* eIF5A遺伝子の転写様式
- 0314009 大野原 旬 琵琶湖水および流入河川河口における農薬の動態
- 0314010 大橋 光政 白色腐朽菌を培養したモウソウチクの飼料化
- 0314011 岡田 知子 ダイズ開花初期の深層追肥による増収効果の検証

- 0314012 奥村 麻未 *Hydrangea macrophylla*の花房型の制御に関する遺伝子の単離と発現解析
- 0314013 加藤 智也 ヒロヘリアオイラガ*Parasa lepidae*の発生生態と生命表
- 0314014 川崎 慎也 白色腐朽菌トキイロヒラタケ (*Pleurotus salmoneostramineus*) を培養した竹の給与が肥育牛の増体量、第一胃内容液性状および行動に及ぼす影響
- 0314015 神社 道子 南部大長なんばんのウイルス抵抗性機構の解析
- 0314016 河南 元希 オオクチバス雄親魚による卵及び仔稚魚に対する保護行動
- 0314017 黒田 純 西洋アジサイの作出母本と日本の在来種や野生種との類縁関係
- 0314018 向 先京 生物多様性に基づく環境直接支払いの意義と可能性
- 0314019 小鐵 慎 東ネパール・Dudh Kosi地域の氷河末端変動について
- 0314020 小林 淳志 無代かき・育苗箱全量施肥による流出負荷削減
- 0314021 後藤 香奈 生分解性プラスチックPLAの分解促進に関する研究
- 0314022 佐藤 健洋 内湖の水質浄化能について
- 0314023 佐野 智洋 新エネルギー推進における廃棄物発電の可能性と課題
—大阪市舞洲清掃工場を事例に—
- 0314024 佐野 瞳 一筆水田 (県大圃場9号田) における除草剤の流出機構に関する研究
- 0314025 上西 康介 交配によるトバモウイルス抵抗性素材の作出
- 0314026 末盛 剛史 集落一農場型集落営農は持続的な地域農業の担い手たりうるか—滋賀県野洲市南桜農業生産組合を対象とする実証的研究—
- 0314027 住近 哲 イネの低硝酸還元酵素活性突然変異体の遺伝解析
- 0314028 瀬尾 晋平 品目横断的経営安定対策は地域農業の構造をどう変えるか—滋賀県湖北町を対象事例とする実証的研究—
- 0314029 田口 晴香 イネの低硝酸吸収突然変異体のキャラクタリゼーション
- 0314030 田中 信 宇曾川における浄化能の評価
- 0314031 田中 友理 砒素汚染地下水の簡易浄化方法の実験的検討
- 0314032 谷 明子 養分吸収特性の異なるヨシ系統の競合力および環境応答の比較
- 0314033 種村 尚典 イネの成長に及ぼす1価カチオンの影響とeIF-5Aの発現について
- 0314034 中條 義一 ニゴロブナ卵・仔魚へ及ぼす農薬の影響
- 0314035 常松 孝祐 各種炭そ病菌の付着器形成および付着器侵入の解析
- 0314036 徳永 泰秀 環境こだわり農業が農薬の流出負荷に与える影響
- 0314037 中田 博之 環境負荷軽減水田における表面流出負荷の削減
- 0314038 中西 香織 ニゴロブナ異物代謝酵素mRNAの農薬による発現量の増加
- 0314039 中野 浩世 冬季代掻き水稲直播栽培における播種時期の拡大および深水による雑草抑制の可能性
- 0314040 長尾 正和 生態系回復型農業による農家と生き物との繋がり
—滋賀県、「魚のゆりかご水田」を事例に—
- 0314041 西尾 裕佳 アジサイにおけるclassA遺伝子の単離および発現解析
- 0314042 林 知宏 *Phanerochaete chrysosporium* eIF5A全長cDNAのクローニング
- 0314043 林 祐希 カブシクム属植物におけるウイルス抵抗性素材の探索
- 0314044 東谷 顕拓 低リン飼料によるニジマス魚体脂質の改善
- 0314045 樋口 晃司 彦根市立病院における屋上緑化現場の水分動向調査
- 0314046 平井久美子 多収性水稲の登熟期の葉の空間的配置が個体群生長速度および生産力に及ぼす影響
- 0314048 本郷 朋博 アトロピンにより転写抑制される*Phanerochaete chrysosporium*遺伝子群の検索
- 0314049 前田 純 SSR (Simple-sequence Repeat) マーカーを用いた琵琶湖・淀川水系におけるヨシの遺伝的多様性の解析
- 0314050 松本 祥平 通性嫌気性菌による有機物の嫌氣的分解の可能性について
- 0314051 松本百合香 アジサイにおけるclassB遺伝子の単離および発現解析
- 0314052 松本瑠衣子 スギチップを利用した、ゴルフ場の池等の浄化実験について
- 0314053 丸山 静香 白色腐朽菌*Pleurotus salmoneostramineus*を培養した竹の栄養価
- 0314054 道上 菜穂 オオクチバスの産卵床で見られる卵・仔魚の捕食者について

- 0314055 森 雄史 石膏ボードからの溶出成分とその地中における挙動
 0314056 山崎有香里 農産物直売所による地産地消の推進についての研究
 —J Aグリーン花野果市を事例に—
 0314057 山本 茜 農業排水の再利用による栄養塩・農薬の環境への負荷低減
 0314058 山本恵理子 センチピードグラスの既成畦畔への直播方法
 0314059 楊 光 軟X線撮影技術を用いた飽和砂質土壌中における流体挙動の画像化とその定量化
 0314060 慶山 智宣 耕作放棄地における牛放牧の実態と普及に関する研究
 0314061 若園 拓人 集落営農組織の経営発展に関する研究 ～作業受託型から借地型へ～
 0314062 和久田壯一郎 土壌pHの原位置測定に関する実験的検討
 0314063 岩堀早希子 水稻育苗時における「苗踏み」処理の成育促進効果の検証
 0314064 井頭 祐二 二次元電気泳動法による細菌のセルラーゼの精製
 0314065 笹井 美希 シイタケにおける組換えマンガンペルオキシダーゼ生産に関する研究

修士論文

●環境動態学専攻

生物圏環境コース

- 0551001 秋友 康夫 負圧差灌漑用ホースの開発に関する研究
 0551002 李 泰勲 安定型処分場周辺の地下水汚染の事例と修復過程の考察
 0551004 岡田 淳 内湖・ため池の農薬分解過程に影響する環境要因
 0551005 後藤 裕子 土壌動物における農薬の蓄積
 0551008 中江 美子 浅層地下水及び土壌中における水田施用農薬の動態
 0551009 西垣 司朗 草本類およびWoody Debrisの橋脚への集積による流木災害の可能性
 —実河川での実態および小規模水路を用いた実験的解析—

生態系保全コース

- 0551003 大饗 嘉子 ニホンイノシシ*Sus scrofa leucomystax*が樹木実生の発生と生残に与える影響
 0551006 更井 紀一 オオミジンコ (*Daphnia magna*) におけるこみ合い応答遺伝子の発現解析
 0551011 松浦 嘉樹 琵琶湖沿岸帯における底生藻類の現存量とその水平分布変動に及ぼす環境要因
 0551012 松本真理子 琵琶湖における溶存腐食物質の鉛直分布と季節変化
 0551015 山中みのり 滋賀県におけるニホンザル (*Macaca fuscata*) の種子散布と糞虫による二次散布

生物生産コース

- 0551007 高野 裕樹 ブルーギル*Lepomis macrochirus*の繁殖成功に対するコロニー規模、捕食者、季節の影響
 0551010 西田 哲 ヒロヘリアオイラガ*Parasa lepida*(Cramer)(Lepidoptera:Limacodidae)の個体群動態
 0551013 宮角 裕喜 イネのフィチン酸合成関連遺伝子を導入したヨシの作出と特性
 0551014 山川 裕徳 直播ナタネの収量決定機構の解析
 0551016 横山 実果 イネの硝酸還元酵素欠失突然変異体を用いた硝酸代謝の日周変化に関する制御機構の解明
 0551017 李 紅燕 異なる硝酸濃度条件におけるイネ幼植物体の生長に関する遺伝子型の変異
 0551018 渡辺 準子 イネのセシウム抵抗性の遺伝解析

●環境計画学専攻

地域環境経営コース

- 0552001 小林 匡哉 持続的な地域経済システムに関する研究—地域産業歩留まり率の分析を通じて—
 0552002 杉本さやか 五感マップ手法におけるイメージ調査の有効性に関する研究

0552004	平山奈央子	昭和30年代以前の琵琶湖における有機物指標の推定に関する研究～過マンガン酸カリウム消費量とCOD（公定法）との関係を用いて～
0552005	楊 海鯤	滋賀県における環境ビジネスの展開の可能性に関する研究
0552006	李 光	中国におけるISO14001導入の現状および中国進出日系企業の取組み実態に関する研究
0452003	橋本 晋一	滋賀県における再生材利用の現状と課題
環境意匠コース		
0552007	今村 広大	琵琶湖沿岸域における湖岸と地域住民との関わりについての研究
0552008	小栗 脩平	近江八幡における西勝酒造酒蔵活用の可能性～登録文化財にむけて～
0552009	河合 克俊	定期市における賑わいの創出に関する研究－浜大津こだわり朝市を事例として－
0552010	北村 義也	木質面ラーメン構法の構造特性に関する研究
0552011	小島 奈苗	都市型小住宅のプロトタイプに関する基礎的考察
0552012	謝 海燕	近江八幡市円山町におけるヨシ産業と景観に関する調査および考察 ～「ヨシの作業場」を中心に～
0552013	高内美代子	古代における日本人の空間図式に関する研究－源氏物語に表現された出来事を通して－
0552014	千葉 知智	水路形態からみた集落形態の形成と変遷－江面川流域集落を事例として－
0552015	水野 智博	コミュニティ活動の場としての地域施設の使い分けと課題に関する研究 －滋賀県大津市晴嵐学区を事例として－
0552016	森井 雄太	滋賀県における清掃工場と地域住民の利用実態に関する研究 －地域施設としての清掃工場の提案－
0552017	矢倉 明絵	アートによるまちづくりの可能性 －アートイベントの事例調査・実施における手法の検討－
0552018	山崎 惣生	近江地方の浄土真宗寺院本堂の平面形態の変遷－旧愛知川町を中心として－
0552019	湯本 佳子	都心回帰におけるモノの取捨選択に関する基礎的研究
0452006	川井 操	西安城内における回族居住地区の空間構成に関する研究
0452007	木下 良一	内井昭蔵の建築装飾に関する研究
0452011	中川 雄輔	インド洋スマトラ沖地震津波被災地における住宅復興過程に関する研究 ～スリランカ・南西沿岸被災者の居住環境変容を事例として～
0352016	中嶋 達郎	伝統的構法住宅における扁平型管柱の有用性の研究

編集後記

2006年の環境科学部、環境科学研究科の活動を紹介する年報第11号をようやくまとめることができました。この間、私たちの地球では、2006年から2007年にかけて北半球の冬は記録的な暖冬を経験しました。また、2007年2月にIPCCの第4次報告者が出され、温室効果ガスの排出などによる人為的な要因による気候変化のリスクが今まで以上に科学的な根拠に基づいて報告されました。またポスト京都議定書に向けた各国の温室効果ガス排出削減への動きも活発になってきました。アル・ゴアの「不都合な真実」も幅広い注目を集めました。1992年の環境サミット以来、環境問題が大きな国際的なテーマとしてなってきたことを実感した1年であったと振るかえることができます。環境科学部、環境科学研究科の教育・研究活動を通じて地球規模の環境問題に資する責任はますます大きなものとなってきました。

さて、第11号では「学生主体の教育活動のとりくみ」を特集のテーマにしました。これからの時代を担う意欲的な学生の取り組みに触発されながら環境科学部、環境科学研究科の教育・研究を発展させる糧になればと考えています。

この1年間に新しく迎えた教員の研究紹介を「私の環境学」で書いていただきました。研究領域の幅が広がってきていることを理解していただけたと思います。

年度末の多忙な時期に原稿を寄せてくださった教員と学生のみなさん、それから原稿集めから編集作業までを手伝ってくださった清水さん、そのほか様々な面で支えてくださったみなさまに編集委員からお礼を申し上げます。

環境科学部年報委員会

委員長 仁連孝昭

委員 後藤直成 (環境生態学科)

金谷 健 (環境社会計画専攻)

小林正実 (環境・建築デザイン専攻)

沢田裕一 (生物資源管理学科)

環境科学部
環境科学研究科

年報第11号 **学生主体の教育活動のとりくみ**

発行日 2007年3月31日

発行所 滋賀県立大学環境科学部

〒522-8533 滋賀県彦根市八坂町2500

Tel 0749-28-8301

発行人 大田 啓一

印刷所 株式会社 ヒコハン



滋賀県立大学
環境科学部
環境科学研究科